

日本葬送文化学会

会誌

平成15年10月

第6号

目次

第一部

わが国で最大規模の火葬場

—名古屋市立八事斎場の歲月—

浅香 勝輔  
水谷 年成 3

祖先祭祀とキリスト教の姿勢

柴田千頭男 27

祭祀財産の承継

稲村 吉彦 31

Suicide in three perspectives  
Biblical study, Bushido, and Koran

上村 敏文 33

第二部

衣・食・住について、「衣」とは

天野 勲 49

「葬送文化の衣食住」に寄せる想い

谷 莊吉 52

入会のご挨拶

『私の人生への思念と葬送』

並木 清 54

靖国を想う

杉浦 昌則 56

第三部

活動報告

二〇〇二年十月から二〇〇三年九月まで

59

日本葬送文化にまつわる調査

回収結果報告

88

モンゴル葬送文化紀行

二村 祐輔

89

会員名簿

99

奥付

104



## わが国で最大規模の火葬場 —名古屋市立八事斎場の歳月—

浅香 勝輔  
水谷 年成

「日本一」の公認

設置されている火葬炉数が最多ということで、建物の広さ、施設・設備の大きさということではない。人口二百万余の大都市に、火葬場は一方所しかなく、四六基の火葬炉がズラリと並んでいて、その炉前で告別（お別れ）と拾骨（骨上げ）が行われている火葬場である。特に「告別ホール」も無ければ「拾骨室」も無い。その点を批判する向きもあるが、筆者たちはこの火葬場を指弾する気持ちはない。

今日の歴史的研究では、歴史の全体像を描くのに、ほとんど無名の一農民の些細な日常の再現を試みることで、逆に時代や地域の歴史的特質を浮き彫りにする、マクロヒストリーに対するミクロヒストリーの手法を、筆者たちは小稿に当てはめたい。近代歴史学の正統である政治史や国制史に対抗して出発した、人間の心性や個々人の社会的結合のあり方の追求から始める社会史は、さらに新たな研究の展開をみせていることに導かれて、筆者たちはこの火葬場の歴史の経緯をたどり、日本史の中に位置づけたい。

火葬場の風景というものは、どんな時代どんな土地であっても、知らず知らずのうちに常に変わっていくものであって、変わらない風景などというものはあり得ない。

だが、それにしても日本一の火葬炉数を有するに至った、とりわけ都市型火葬場風景の変貌ぶりは、とてつもなく劇的で無造作に過ぎるように思われる。小稿で資料として使う写真を見てみると、たかが四十年前が、はるかな前時代で、歴史や風土が断絶してしまっているかのような錯覚に襲われる。

それだけにこの火葬場が地域の人びとの暮らしに密着して、地域発展に寄与することができたのかを考察するとともに、いわゆるハコモノ機能から脱して、市民からの新しい問いかけにこたえているかを追求したい。

そして、火葬場がその地域で生きるということ、環境や技術に対応して稼働してきた価値を掘り起こし、整備保存の足跡を検証し、「日本一」とならざるを得なかった歴史を公認し、その事実立脚して考えながら、次世代に伝えていくシステムの組み立てについて、さまざまな角度から提案をしたい。そしてその過程で、「現代史における自治と公共性に属する重層的な絡み合い」めいたものが打ち出せれば、と考えている。

「一極集中」への道

平成一五年七月一日現在の面積三二六・四五平方キロメートル、人口二一九万一九〇五人を有する政令指定都市としての名古屋市中区は、市営のメインの火葬場は一方所のみである。名古屋市中区天白区天白町大字八事字裏山六九に所在する名古屋市立八事斎場である。

このほかに、西接する愛知県海部郡蟹江町が、名古屋市域の港区南陽町大字西福田字井箱一三に、蟹江町舟入斎苑（灯油炉二基）を保有し、操業している。これは名古屋市立八事斎場とは無縁であるし、小稿とも直接には関係ないが、若干後述する。

さて、名古屋市がここに至るまでには、数多の零細な火葬場、場合によっては野焼き場のような簡易火葬場が数多く所在していた。そこで、名古屋市について歴史的展開ないしはその発展過程のなかで、時間の経過とともに火葬場の立場が、分散型から集中型に至ることについて、若干の叙述を加えておきたい。

幕藩体制の一拠点であった名古屋の市制施行は明治三二年（一八八九）一〇月一日にさかのぼる。明治四一年（一九〇八）四月一日に初めて四区制施行（東・西・中・南の各区）、その後、大正から昭和戦前期にかけて、近隣町村の編入・合併を行い、しだいにその市域を拡張していくなかで、昭和一二年（一九三七）一〇月一日、一〇区制を施行（千種・中村・昭和・熱田・中川・港の各区を増区）し、さらに第二次世界大戦中の昭和一九年二月一日に一三区制を施行（北・栄・瑞穂の各区を増区）し、戦後の昭和二〇年（一九四五）一二月三日には右記の栄区を廃止して一二区制としている。そして高度経済成長期に人口が増大した周辺町村の編入・合併を続け、さらに昭和三二年（一九五七）九月一日に政令指定都市として発足後は、昭和三八年（一九六三）二月一日に守山市を編入して守山区を増区して一三区制に戻り、同年四月一日には愛知県鳴海町を編入して緑区を設置、さらにその後、昭和五〇年（一九七五）二月一日に千種区から名東区を、また昭和区から天白区をそれぞれ分区分、現在の一六区制となった。

ちなみに名古屋市の人口が一〇〇万人に達したのは昭和九年（一

九三四）であり、二〇〇万人を超えたのは昭和四〇年代の後半である。

こうした近隣町村の編入・合併を繰り返しつつ、しだいに大都市となった名古屋市での火葬場事情を物語る好個の資料が存在する。それは名古屋市役所が昭和二九年（一九五四）に発刊した『大正昭和名古屋市史 第六巻』で、その三〇三〜三〇六ページに次のような記載がある。

市民は、地勢と信仰との関係で、主として市内に散在する寺院附属の墓地を利用し、最近まで土葬さえ行われていたが、日露戦役後産業の発展と、それに伴う人口の増加によって、市内の土地は狭隘を告げるに至ったばかりでなく、都市衛生上の見地からいっても、人家の稠密する市内に墓地のあることは好ましくないところである。この意味から寺院の整理は、当然行うべきものとし、さらに進んでは、近い将来において市内における埋葬禁止も行われることが予想されるに至ったから、市は、大正元年愛知県天白村大字八事裏山の地を選んで、共葬墓地・葬儀場および火葬場を設置する計画をたて、まず土地の買収を行い、ついで工事に着手したが、三年二月共葬墓地および葬儀場の竣工とともに、これを名古屋市八事墓地と名付け、同年三月一日より市民の使用を開始した。附設の火葬場は、やや遅れて四年五月竣工し、名古屋市八事火葬場と名付け、六月一日から使用を開始した。〔中略〕

八事火葬場は、大正四年五月八事墓地の附設設備として創設後、昭和二年および九年の二回にわたって増改築を行ったが、九年の改築によって、従来の火炉十五基を高松式石炭炉十五

基、重油炉十五基、計三十基に改めて、全くその面目を一新した。このほか市内の火葬場は、旧町村在のものが未整備のまま存しているため、昭和十年末現在において三十九カ所の多きに達しているが、そのうち米野・鍋屋・野立・則武・枇杷島・西志賀・北一色および桜にある火葬場が火炉二基以上を有するのみで、他は一基の小規模なものである。

なお死体埋葬（土葬）は、都市衛生その他の見地から、大正十五年二月以降全市にわたって禁止せられたため、現在土葬をなし得る市民の共葬地は、手近なものとしてはこの八事墓地のみとなったが、近年土葬は著減の傾向をたどり、一般に火葬が行われている。したがって八事火葬場の利用数も年々増加している。

右の引用によって分かることは、この文章が書かれたのは、今から半世紀前の昭和二十九年（一九五四）である。それから逆算すれば引用文の記述は、およそ四十年前ばかり前から始まることになり、引用文発表時から距離感を考えれば、その間には経済成長と大衆社会化が急激に進展した大正期が介在しており、さらに昭和の十五年戦争期までの、名古屋市における火葬場の発展の推移のおおよそが理解できる。

この引用文の中で、昭和十九年の改築によって、従来の火炉十五基を高松式石炭炉十五基、重油炉十五基、計三十基に改め、全くその面目を一新した」と控えめな記述に出てくるのが、昭和一〇年（一九三五）五月に完工した、図1の写真に提示したような全面的に改築された火葬場である。

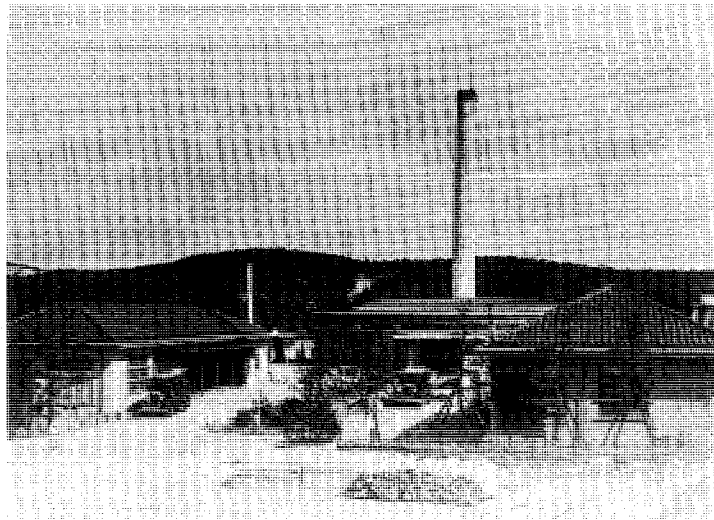


図1 昭和10年から昭和45年まで稼働した円型建築の  
名古屋市営八事火葬場（名古屋市立八事斎場提供）

寺院風建築の木造火葬場が全国を席卷している時期に、鉄筋コンクリート造で、火葬炉三〇基を、並列配置を排し、円型放射状回廊式火葬棟とした円型火葬場で、中央に煙突、地下煙道をもつ革新的な施設として登場した。当時の大岩勇夫市長が、不況対策も兼ねて、市庁舎・公会堂・東山動物園などとともに、思い切った投資をして建てた火葬場であつて、まさに一大壮挙であつたと讃えてよい。この施設は、昭和四五年（一九七〇）三月三十一日に、後述する火葬炉五〇基を有する現在の火葬場の建物が、この施設の後方に建設されて操業を開始するまで使用された。この間、昭和三年（一九二八）三月一五日には、火葬場が所在する愛知郡天白村大字八事は、名古屋市に編入されている。

一方、八事のような市営火葬場のほかに、かつて名古屋市内には民営の火葬場も存在した。さきに引用した『大正昭和名古屋市史第六卷』に出てくる「米野」と「野立」<sup>のたて</sup>がそれに該当する。米野とは、名古屋博善株式会社が経営した米野火葬場のことであり、野立とは、信愛株式会社が経営した野立火葬場のことである。

旧・米野火葬場は現在の中村区二ツ橋五に所在した。大正八年から昭和三五年九月まで操業していたが、閉鎖する直前には火葬炉は八基あつたという。その跡地の一郭は、現在では名古屋西労働基準監督署、長栄寺、二ツ橋保育園となつてゐるが、火葬炉棟であつた跡地には、長栄寺という寺院の全体と、二ツ橋保育園の一部がかかる。図2の写真はその二ツ橋保育園の正門を撮つたものである。

旧・野立火葬場のほうは、熱田区の北西隅である現在の熱田区千代田町一ノ一二に所在した。（現在、東海道新幹線の高架線東側に、熱田区野立町という町名があるが、ここではない）。野立火葬

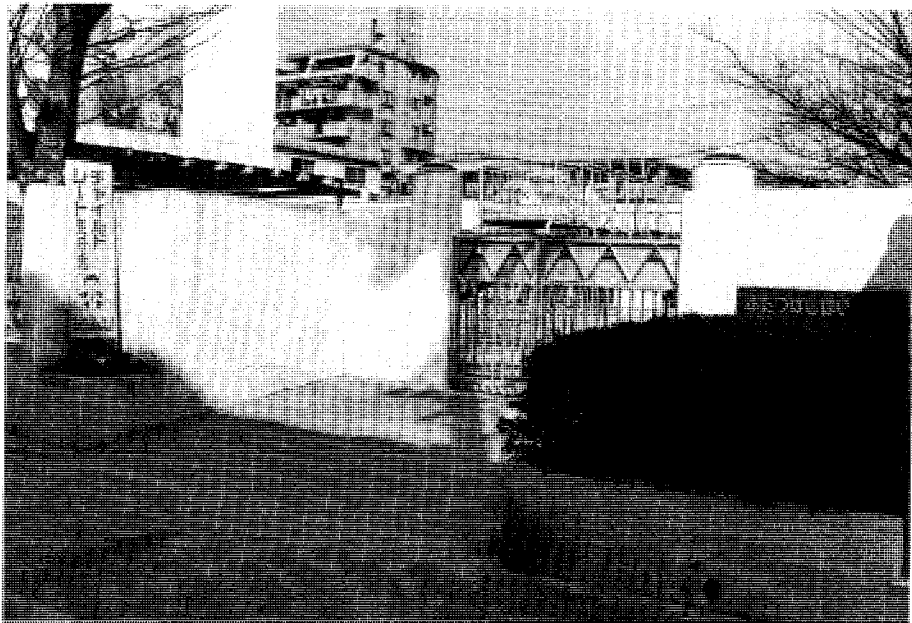


図2 米野火葬場の跡地にある保育園 (H.13.2.11)



図3 野立火葬場の跡地にある駐車場 (H.13.2.11)

場を経営していた信愛株式会社というのは、大正一〇年ごろ、当時の愛知郡八幡村大字野立の集落の有志が出資して設立された法人で、自分たちの火葬場をつくったのが始まりだったと伝えられている。いつごろから株式会社になったのかは不明であるが、株主が三〇〇人も居たといわれ、一般の人びとの火葬も引き受けるようになった模様である。大正一五年四月に火葬場が操業を開始し、昭和五四年三月三十一日に営業を廃止する直前には、火葬炉は九基であった。その跡地は、現在では図3の写真のようなトーカーという名称の駐車場となっている。

第二次世界大戦終了時までの名古屋市の市街化は、おおよそ北は荘内川、西と東は国鉄（現・JR）東海道本線と中央本線とに囲まれた内側の都市計画区域内であった。したがって、戦中期や戦後期の交通事情もあり、東郊の八事火葬場まで搬送するのを避け、名古屋の中心部から手近な米野や野立の両火葬場の利用者も多かったのであつたらうと考えられる。

野立火葬場が廃止になったのは、昭和四七年度から、市営の八事斎場が無料となったためである。それによつて民営であつた野立火葬場は収入減となり、加えて建物の老朽化も進行していたので、閉鎖に踏み切ったといわれている。事実、昭和五四年度から市営八事斎場の火葬件数が、一挙に二二〇〇件も増加していて、この野立火葬場の閉鎖の影響を裏付けている。

ところで、八事・米野・野立のほかには、いわゆる地区火葬場ともいうべき零細な簡易火葬場が存在したことは、さきに引用した『大正昭和名古屋市史 第六巻』でも明らかである。特に中川区・港区の各地域に、名古屋市編入前の旧町村（特に愛知県海部郡富田村や南陽村に多く所在した）が、大字あるいは小字などの集落単位

で維持していた火葬場が多く所在し、筆者のひとりである浅香が昭和四七年（一九七二）八月に、その所在地を確認した調査では、じつに二二カ所を数えた。二、三間四方程度の建物で、簡単なれんが積み火葬炉と短い煙突を伴うものが多かった。その詳細はすでに「地域施設としての火葬場と都市計画規制に関する研究」（『日本建築学会計画系論文報告集 第四二一号』平成三年、八三〜九四ページ）で発表している。

それから三〇年、その論文で紹介されているすべては、名古屋市当局の廃止指導によつて姿を消しているが、その論文執筆当時は、まだ二カ所の火葬場が操業を続けていた。その一つの茶屋新田火葬場（港区南陽町大字茶屋新田字一番割末新田松台下七四に所在）は、平成になって無くなっている。

もう一つの舟入火葬場（港区南陽町大字西福田字井箱一三に所在）は、その後、奇異な運命をたどり、現在では名古屋市内にありながら、西に隣接する海部郡蟹江町所有の舟入斎苑となっている。

もともとこの火葬場は、今から四〇〇年ほど前から、現在の蟹江町の舟入区の集落の火葬場であったが、昭和五年前後の福田川の改修のとき、その火葬場の敷地の一部がかかるので、蟹江町当局は廃止指導をした。しかし集落の人びとが無くされたら困ると言うので、再建した場所が、すでに名古屋市内になっている所であった。

蟹江町では、ここを本格的な火葬場とすることとし、蟹江町の町民のほか、名古屋市の市民の火葬も、希望があれば地域を限定して受け付けている。限定している地域は、戸田川より西、近鉄名古屋線の軌道より南の名古屋市域としている。

現在の鉄筋コンクリート造の火葬場の施設ができあがったのは昭和六三年四月一日である。灯油炉二基を設置している。蟹江町で



図4 舟入斎苑の門標 (H.14.5.18)



は、このほか本町火葬場も保有しているが、そちらの火葬を行っている。

舟入斎苑の例年の火葬件数は、だいたい一〇〇件前後で、そのうち蟹江町民が八割、名古屋市民が二割という比率で推移している。

かつて、筆者のひとりである浅香は、名古屋市の西端に位置する簡易火葬場であったころの舟入火葬場を、蟹江町の集落の施設とは考えず、名古屋市域のものと思い違いをしていたのであったろう。筆者のひとりである水谷は、すでに三〇年も前にこの地を歩いていた恩師の、凄まじい執念と努力を決して批判するものではないが、近年の追跡調査のときに撮った現在のこの火葬場の門標の写真を、図4に揚げておく。

副都心・八事

現在の八事斎場がこの地に火葬場として設立され、操業を開始したのは大正四年（一九一五）六月一日にさかのぼり、その後、幾多の変遷を経て、現在の建物になったことは、これまでの記述で判明した。現在では市立八事霊園に隣接した敷地面積一万六一三四・四六平方メートルの丘陵地の一角に延べ一八六三・五六平方メートルの火葬棟があり、四六基というわが国で再多数の火葬炉が収納されている。平成一四年度の火葬件数は一万八六〇五件である。

現在の建物は、昭和四四年（一九六九）六月一日に新築工事を起工し、翌年三月三十一日に完工、四月一日より操業を開始した。その時に八事「火葬場」より八事「斎場」に呼称を変更している。

鉄筋コンクリート造で平家建て一部地階の建築上の特色は、敷地の地形条件を考慮し、しかも五〇基というわが国で最多の火葬炉を

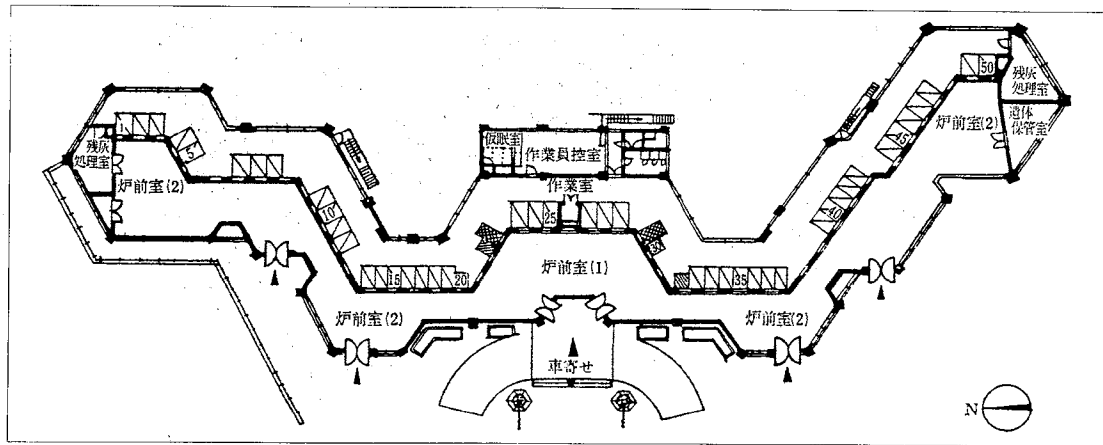


図5 完成時の八事斎場の火葬等1階平面図

収納することができるように、図5の平面図でも分かるように、六角形の組み立てを基本としたこと。また、作業と設備機器類の配列から敷地の傾斜を利用して、裏側に地階を設けたことなどがあげられる。図6の写真はその航空写真であるが、完成時はもちろん現在でも、その斬新なデザインは、人びとの目を見張らせるものがある。限られた規模を有効に使い、わが国最大級の火葬場として出発した火葬場も、それから三十年余、今日まで多難な道を歩むことになる。

昭和四五年の建設当時には、全国的にみて、きわめて近代的な施設で、かつ大規模な施設として注目を浴びていたが、やがて火葬場周辺の市街地化、そして火葬技術の革新などにより、まもなくこの施設では、時代にそぐわないものと化してしまった。

建設当時、「大は小を兼ねる」との考えで、五〇基の火葬炉を並べた設計が、まず第一の失敗だったという説もある。冬期の火葬件数の多い時期は、ふつう一つの炉で一日一〜二回の火葬という原則を破り、無理をして三回も使用する。正面の車寄せから近いほうの炉の使用頻度が高く、両サイドに行くにしたがって炉の使用回数が低くなるという不均衡が防ぎにくい。

それに台車式の火葬炉であるから、拾骨のさいも炉の前面へ出てくるので、炉前で告別と拾骨の会葬者群が錯綜する。炉前ホールの狭さはもとより、別棟の待合棟の狭さもままならない。五〇基の火葬炉に対して六基の再燃焼炉が設置され、特A重油を使用している火葬であったにもかかわらず、排ガスの再燃焼時間が不足しているため、その効果が十分にあがらなかった。したがって、高さ五〇メートルの二本の煙突から排出される黒煙に対して、周辺住民からの苦情が絶えなかったという。ちなみに、昭和四〇年代末期から建設さ

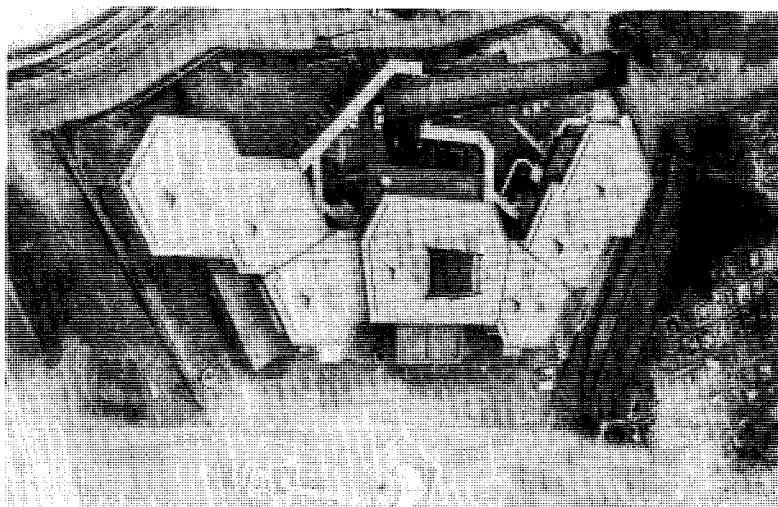


図6 完成時の八事斎場の航空写真（名古屋市立八事斎場提供）

れている火葬場では、火葬炉と再燃焼炉を一对で組み合わせる新設備の施設が、各地で出現しつつあった時期であった。加えて、この八事の場合は、炉の背面の作業室も狭あいで、作業する技士たちの労働環境も劣悪な状態にあった。

そのうえ、八事という立地が、名古屋市の中心部からは、東に片寄っており、中村区・西区・北区などから、霊柩車を先頭にした自動車の葬列が、この火葬場にたどり着くまで、交通渋滞に巻き込まれ、時間を浪費するケースも多いという。都市高速道路を利用すれば、さきの地区からでも三〇〇四〇分で到達することもできるが、霊柩車の高速道路使用には難点を伴うと指摘する識者も多い。

また、冬期や夏期の死亡率が高い季節には、名古屋市営として一カ所の火葬場であるため、市内の各地域から自動車の葬列が集中し、構内は車の混雑ぶりだけで驚かされる。特に宮型霊柩車が入れ替わり立ち替わり出入りするさまは、その周辺の住民たちにとっても、決して穏やかな心象風景ではない。

昭和六〇年九月五日午後二時、調査のため同行した学生は、この火葬場の構内だけでじつに一四台の宮型霊柩車の駐留を数えている。図7の写真はその時撮ったもので、構内にあふれた宮型霊柩車が、正門に向かう通路にまで駐車している有様で、背後の火葬棟の煙突からたなびいている黒煙とともに、こうした取材や調査には慣れているつもりでも、いくばくかの無気味さを禁じ得なかつた。かつてこの場長として苦労された久米實氏が、場長であった昭和五七年当事、「すべて適性規模が望ましい」と語っておられた言葉の重みが忘れられない。

さりとて、名古屋市区にはもはや新しい火葬場を建設する土地は皆無と言つてよい。かりに有つたとしても、周辺住民の激しい反対

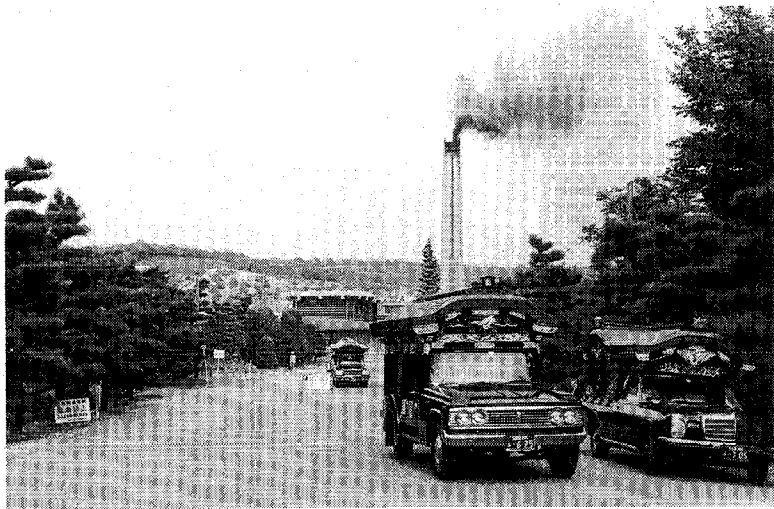


図7 宮型霊柩車が構内にあふれた八事斎場 (S.60.9.5)

運動にあつて、その建設は、ついえ去つてしまふことが予想される。市議会でも新しい火葬場の問題が積年出ているのだが、結局、既設の八事斎場の建物を改築すると言うことに落ち着いた。

しかし、都市計画審議会をはじめ知事の許可など、非常に煩雑な問題を含んでいて、現在の敷地内で建築面積は増やせない。そうした厳しい制約の中で、市は二〇〇万都市に見合う施設づくりを開始した。それは、火葬業務をしながら、新しい設備に改修していくという苦しい道程の選択であつた。昭和五九年（一九八四）一月月から六期に分けて改修工事を行い、三年後の昭和六二年一月に完成し、供用開始している。火葬炉と再燃焼炉を一对で組み合わせ、誘引ファンを設け、無煙・無臭・無騒音の炉に改善した。この間の事情は『昭和六三年版 衛生局事業概要』（名古屋市衛生局、昭和六三年、五ページ）に簡潔にまとめられているが、筆者たちなりに写真提示も含め、順を追つて説明しておこう。

「無煙無臭化と化粧直し」とも言うべき大改修の主な点は、①火葬炉は台車式のままとし、既設の炉は解体し、新たに築炉した。②火葬炉一基に対し再燃焼炉一基を設け、火葬炉からの排煙を完全燃焼させるようになった。③火葬炉・再燃焼炉とも、燃料として都市ガス（13A）を使用するようになった。④短排気筒（短煙突）を各ブロックごとに一本ずつ設けて、不要となつた既存の高煙突を撤去した。⑤五〇基あつた火葬炉のうち、四基（一二号炉・二〇号炉・三一号炉・三九号炉）を間引いて四六基とし、炉前の狭あいを軽減するなどである。また全体として、火葬場独特の、↓入り口↓受付↓告別↓火葬炉↓待合室↓拾骨↓出口↓、と言う会葬者動線に十分な配慮を払つていることも納得できた。

工期は、六期に分けて改修を進めたが、すでに一号炉から八号炉

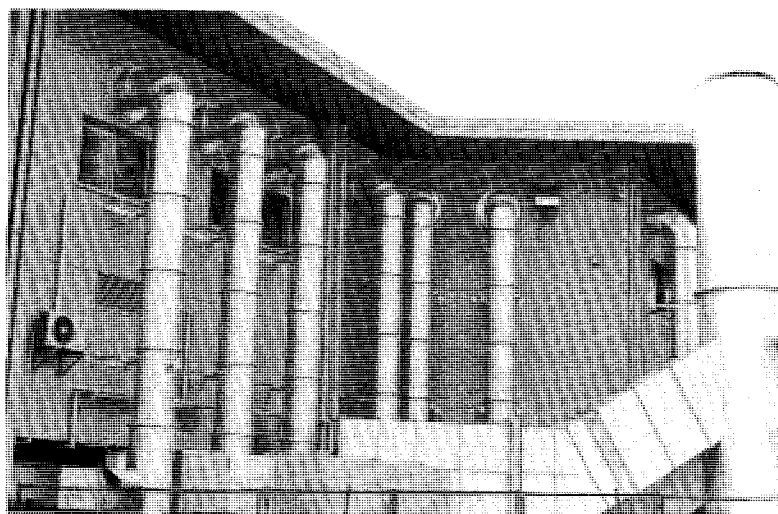


図8 八事斎場の改修後の火葬棟の裏側 (S.60.9.5)

までを対象とした、昭和五九年一月から昭和六〇年七月までの第  
運動にあつて、その建設は、ついで去つてしまふことが予想され  
一期工事が終了した時点で、二枚の写真に収めることができた。図  
8の写真は、その第一期工事終了後の火葬棟の裏側より再燃装置の  
ダクト類を撮つたものであるが、火葬炉一基に対して再燃焼炉一基  
の新設備の様相がよく分かる。それは、その時点でまだ改修されて  
いなかった第五期工事が予定されていた三六号炉から四一号炉付  
近、まだ旧設備のまま操業中の、火葬炉八基に対して再燃焼炉一基  
の、同じく火葬棟裏側を撮つた図9の写真と比較してみると、その  
差異は明確であろう。

この昭和五九年から昭和六二年にかけての改修・改築工事に当  
たつても、当時の用途地域の関係上、名古屋市当局は、当時の建築  
基準法第四八条二項や、第五条のただし書きとの関連から、建築  
基準法施行令の第一三〇条の二の三号を配慮し、火葬棟はもろろん  
待合棟の延べ面積および改築にかかわる部分の床面積の増加を行つ  
ていない。なお、待合棟の増築は、前述した法令との関係もあつて  
至難であろうと予測していた市当局であつたが、都市計画審議会の  
柔軟な対応に支えられ、平成に入つてから床面積の増加を行つてい  
る。

この付近は現在では、大部分が市街化区域の第一種住居地域であ  
るが、周辺には第一種低層住居専用地域や第二種低層住居専用地域  
も多く、緑の多い落ち着いた環境にある。名古屋大学・名城大学・  
中京大学・南山大学などがこの周辺部に集まつていることもあつ  
て、火葬場の敷地がある八事霊園から一步出ると、そこには「副都  
心・八事」としての活気あふれた雰囲気や躍動感がある。そうした  
地区を、一日に何台もの宮型霊柩車が行き交う光景が、まず異様で

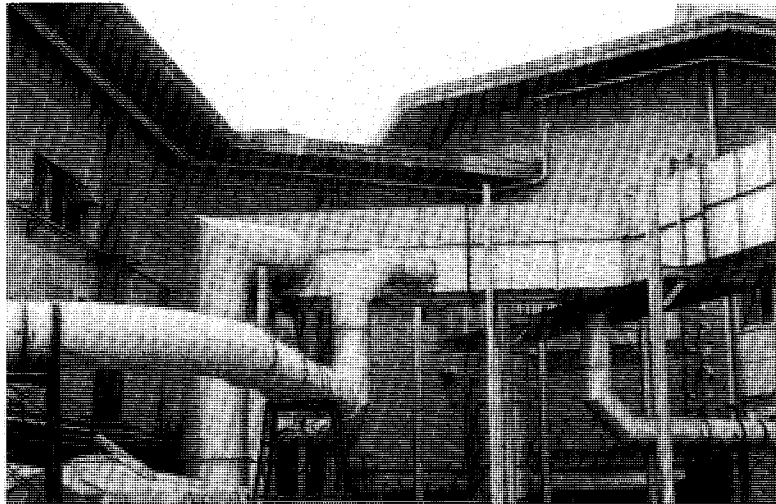


図9 八事斎場の改修前の火葬棟の裏側 (S.60.9.5) .

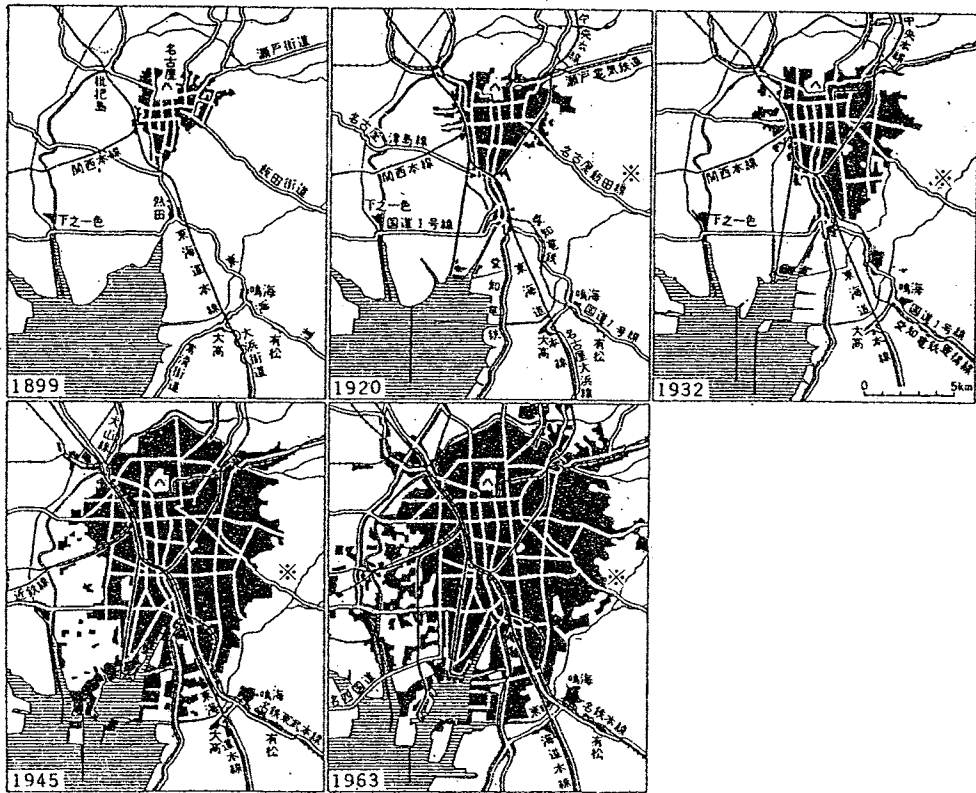


図10 名古屋市街の拡大

ある。

東京や大阪に比べて名古屋は、市街地が狭い。といっても、地図上で概括的に検討してみると、市街地の拡大は著しい。図10の各図の※じるしの地点が八事火葬場↓八事斎場の所在地であるが、すでに市街地化に席卷されていくことが読み取れる。(地図は青野寿郎・尾留川正平『日本地誌12(愛知県・岐阜県)』(二宮書店、昭和四四年、一四六ページ)より引用)。

しかし、名古屋の都市圏は、「日常圏」「買物圏」「市街地の広がっている圏」として考えられるように、市街地が小じんまりとまとまっている観がある。これは交通史的には、かつて市電が走っていた範囲におさまる。それに加えて、さきにも記したように、名古屋市は明治四一年(一九〇八)の区制施行から、区境がよく変わっている。このあたりにも火葬場を一カ所におさめてしまった歴史的理由がひそんでいるのかもしれない。政令指定都市になってから、行政区の再編成などに全くかわりないのである。

#### 「友引明けの日」の終日観察

「友引ともびき」の日は、陰陽道で「友を引く」として葬儀を行うことを忌む日という習俗が、わが国の各地に残っている。友引の日を休業日とする火葬場は、公営・民営にかかわらず、現在でも各地に多い。盛夏や厳冬の死亡率が高い季節の、特に友引の翌日、関係者がいいうわゆる「友明ともあけ」の日は、火葬が集中するというのが全国的な現象である。八事斎場も友引の日を休業としているため、「友明」の日は、名古屋市営として一カ所の火葬場であるため、市内各所から自動車の葬列が殺到し、普段の日よりも火葬数が多くなる。

平成一〇年一月二十九日（火曜日）という歳末の「友明」の日をねらって、筆者のひとりである水谷は、高校時代の友人数名の協力を得て、朝八時半から午後四時半まで、八事斎場の構内にへばりついて、当日搬入された七五体の火葬のそれぞれについて、綿密に完全な一日断面調査を行った。もちろん前々日までに、市当局、場長、管理事務所、作業現場の技士の方々に、研究上や調査上の趣旨を説明して理解いただき、挨拶をしておいて許可をもらっている。当日は、友人たちにも暗い色の服で手伝ってくれるよう配慮したが、特に火葬棟の現場の作業技士の方々が、親切に接遇してくれた恩誼が忘れられない。

当日搬入された七五の遺体のそれぞれについて順番①～②⑤、これは八事斎場への(A)到着時刻（霊柩車が管理事務所の受付をすませた後事務所棟前に停車した時刻にしたがった）、(B)霊柩車の種類、(C)霊柩車に随伴してきた車両数（普通乗用車・ワゴン車・小型自動車・マイクロバス・大型バスなど分類して記録してあるが煩雑になるので一括して車両数とした）、(D)火葬炉の番号、(E)火葬炉の前で告別に立ち会った会葬者数、(F)火葬所要時間（一つ一つについて、火葬開始時刻と拾骨開始時刻も記録してあるが所要時間のみ掲げた）の六項目について密着取材をした。

右の(A)～(F)について一覧できるようにまとめておきたい。

順番	(A)到着時刻	(B)霊柩車の種類	(C)車両数	(D)火葬炉の番号	(E)会葬者数	(F)所要時間
①	九時五四分	宮型	五	2	10	一時間一分
②	〇時〇〇分	特殊		27	10	一時間四七分
③	〇時一分	特殊		1	6	五八分
④	〇時三四分	寝台	3	26	20	一時間一分
⑤	〇時四〇分	宮型	4	5	38	一時間一分
⑥	〇時四二分	宮型	5	25	17	一時間一分
⑦	一時〇五分	宮型	7	3	32	一時間〇九分
⑧	一時〇七分	宮型	6	11	10	一時間二分
⑨	一時〇九分	宮型	4	31	20	一時間二分
⑩	一時一四分	宮型	8	24	40	一時間一分
⑪	一時一七分	宮型	6	32	18	一時間一分
⑫	一時一九分	宮型	5	23	28	一時間二分
⑬	一時二一分	宮型	2	8	28	一時間二分
⑭	一時二三分	宮型	4	16	10	一時間三分
⑮	一時二五分	宮型	7	17	25	一時間二分
⑯	一時二六分	宮型	2	7	15	四四分
⑰	一時二七分	宮型	8	22	17	一時間二分
⑱	一時二八分	寝台	5	29	28	一時間三分
⑲	一時三〇分	宮型	3	21	14	一時間四分
⑳	一時三一分	宮型	2	10	17	一時間二分
㉑	一時三二分	宮型	2	30	35	一時間三分
㉒	一時三五分	宮型	2	35	43	一時間二分
㉓	一時三六分	宮型	4	15	21	一時間一分
㉔	一時三七分	宮型	2	20	50	一時間〇九分
㉕	一時三八分	宮型	4	34	35	一時間〇八分

52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
三時四二分	三時四一分	三時四〇分	三時三九分	三時三〇分	三時二七分	三時二六分	三時一七分	三時一六分	三時一五分	三時〇四分	三時〇二分	三時〇一分	三時〇〇分	二時五二分	二時四三分	二時三五分	二時三一分	二時二八分	二時一六分	一時五二分	一時五一分	一時四六分	一時四三分	一時四一分	一時四〇分	一時三九分
宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	寝台	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型
四	六	二	二	七	一	七	六	九	七	二	九	五	六	六	三	三	一	一	一	二	二	四	二	七	五	五
5	39	6	17	7	36	3	26	25	46	44	41	50	28	45	40	27	47	48	43	14	13	18	12	6	33	19
一五	一七	二八	二四	二六	一六	二六	二四	二四	二一	三一	二二	一四	二六	一八	二九	二八	一六	一八	一九	九	一八	一一	一四	三〇	三二	二〇
一時間二二分	一時間二七分	一時間三一分	一時間一九分	一時間三四分	一時間三四分	一時間二四分	一時間二一分	一時間〇四分	一時間二七分	一時間〇七分	一時間一五分	一時間二七分	一時間二〇分	一時間三五分	一時間二二分	一時間二九分	一時間二七分	一時間二五分	一時間二三分	一時間二三分	一時間二三分	一時間二四分	一時間二七分	一時間一〇分	一時間二二分	一時間二〇分

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	
一五時〇一分	一四時五五分	一四時五三分	一四時四九分	一四時四八分	一四時四六分	一四時四二分	一四時三八分	一四時三七分	一四時三四分	一四時三一分	一四時三〇分	一四時二九分	一四時二八分	一四時二七分	一四時二六分	一四時二五分	一四時二四分	一四時二二分	一四時二〇分	一三時四七分	一三時四五分	一三時四三分	
宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型	宮型
六	四	二	一	二	一	六	二	六	三	二	二	二	二	五	三	一	一	三	二	二	二	三	
31	24	32	29	19	22	30	14	21	1	11	12	13	19	18	15	20	8	16	23	5	38	37	
二六	三七	三〇	一六	一三	一九	二四	二二	二〇	九	一九	二五	一〇	三〇	二三	一九	二二	一八	一六	六	二七	三〇	一一	
一時間二二分	一時間二五分	一時間三二分	一時間三〇分	一時間三〇分	一時間二二分	一時間一四分	一時間二六分	一時間一九分	三四分	一時間二二分	一時間二〇分	一時間二九分	一時間二二分	一時間二二分	一時間二七分	一時間二三分	一時間三一分	一時間三三分	一時間三六分	一時間二二分	一時間二〇分	一時間二七分	

表1は右の一覧をまとめたものであるが、火葬場へ霊柩車の到着が集中するのは、午前一時台と午後二時台に山がある。特に午前一のピーク時には一〜二分刻みで霊柩車が入構してきている。午前一



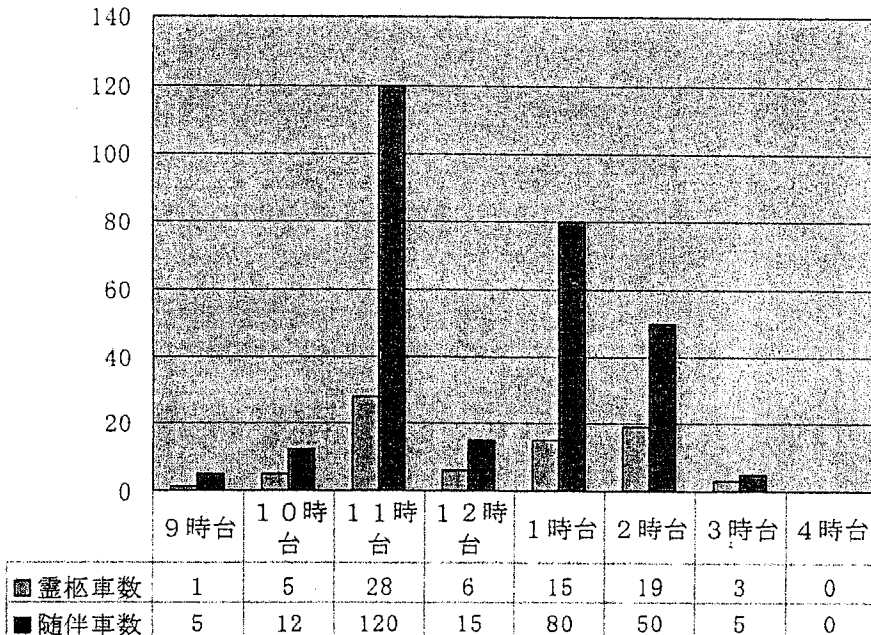
一時台には一時間に何と二八台の宮型霊柩車が入構してきた。これは近年の葬儀・告別式のあり様も浮かび出している。つまり、火葬場の利用時間は、会葬者への時間の配慮や、初七日法要、精進落としなどの開始時間との関連で、午前一時から午後二時台までに集中していることが理解できる。また、この時間の片寄り、前日までに、八事斎場のほうで、喪家・葬儀社・霊柩自動車会社などに理解を求め、利用者の喪家の希望時間を多少スライドしてもらっても、計画的に時間を分散できないであろうか。

これらの宮型霊柩車が、火葬棟中央の車寄せのエントランスで棺をおろしたあと、次の葬儀式場へ向かうまでの時間調整か、あるいは運転手の休憩のためか何かは分からないけれども、正門入口付近の構内で並んでいるのは、図11の写真のように、異様な構内風景というほかはない。調査当日の正午直前に撮影したものである。

霊柩車の種類については、土地柄かもしれないが、調査当日に七五の遺体が搬入されたうち、七〇例が宮型霊柩車による搬入であった。行路病者や身元不明人、病院からの解剖遺体、刑死遺体などの特殊な遺体は、図12の写真のようなバン型の搬送車で搬入される。随伴してくる車両もないのが特徴である。当日は二番目と三番目に二つの例を観察したが、プライバシーにわたることなので、その事情を詮索しなかった。また、洋型の寝台型霊柩車の利用は圧倒的に少なく、当日はわずかに三例を見たのみであったが、「葬式を派手にやる名古屋の特徴だよ」と、ある作業技士が勤務の合間に教えてくれた。

今年（平成一五年）の初夏、筆者たちは八事斎場に立ち寄って観察していたら、寝台型霊柩車が増えていることに驚いた。その運転手の一人に聞いたところによると、現職で亡くなられた故・小淵恵

表1 平成10年12月29日、八事斎場へ入構した霊柩車と随伴車両の時間帯別車両数



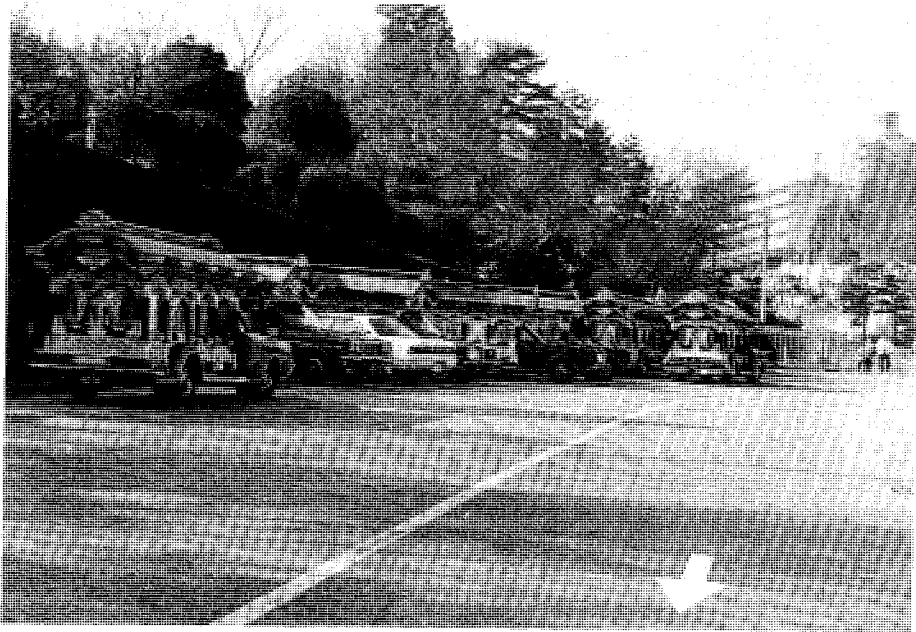


図1 1 八事斎場の構内にあふれた宮型霊柩車群 (H.10.12.29)



図1 2 遺体搬入のための特殊自動車 (H.10.12.29)

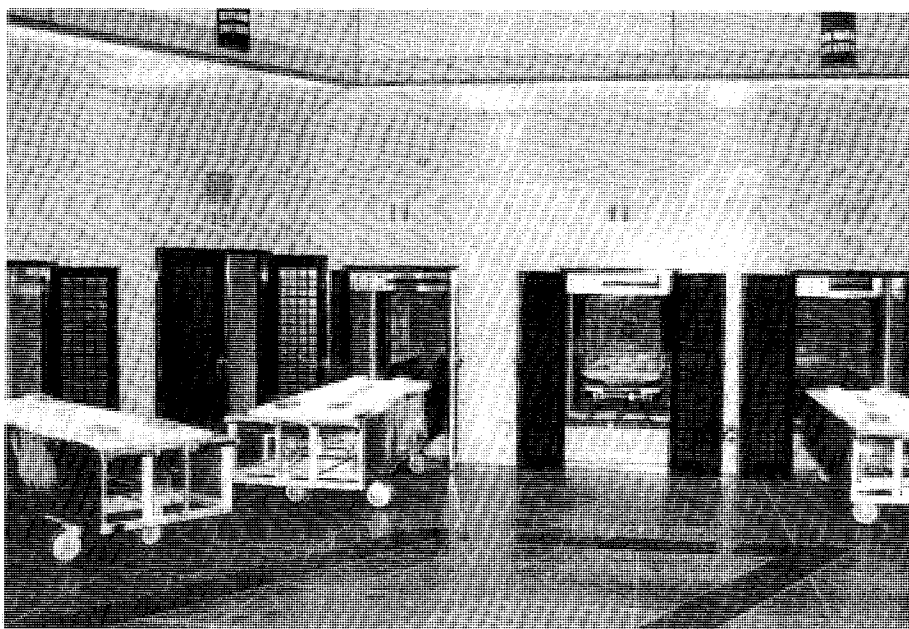


図13 八事斎場の炉前風景 (H10.12.29)

三首相の葬儀のあと、寝台型霊柩車で国会の周辺を回る光景などが、テレビで放映されて以降、寝台型霊柩車の需要が急速に増加し始めているという。

さて、図13の写真は、火葬棟の中央のエントランスから撮った炉前風景である。炉室どうしの間隔も非常に狭いことが理解できる。この写真では、いくつかの炉が開いている状態で、その前面に、棺を乗せる台車が整然と待機しているのが見て取れる。炉室が隣接している所では、重なり合った状態となってしまう。

台車式の火葬炉では、拾骨のさいも炉の前面へ出てくるので、炉前で告別と拾骨の会葬者が錯綜する。特に、筆者たちが観察した「歳末の友明」の日などは、棺を前にした告別のための会葬者集団と、待合棟から移ってきた拾骨のための会葬者集団とが、入れ替わり立ち替わりで、その混雑ぶりには驚かされた。大都市における一極集中型の火葬場のあり方が問われる問題であり、これは、構内のどこかに別個に告別式場や葬祭棟を設置しても、解決される問題ではないとみた。

斎場側も、図14の写真のように、会葬者の人数制限を呼びかけてはいるが、炉前での混雑には対処しきれていないのが現状である。さらに斎場側も、コンピュータなどを駆使して、正面玄関入口付近の二〇号炉の辺りに集中しないように、また接近した番号の炉での告別や拾骨が重ならないように、あるいはどの炉にも均等に分散化するように、かなりきめ細かく使用ローテーションを組み立てている。斎場側の苦心のほどがうかがわれる。ただ調査当日、「一四番目と一五番目」に搬入された柩が、隣り合った火葬炉の炉前で、ほぼ同時刻に告別があったことが、若干気になった。同じようなケースが、「三一番目と三二番目」の搬入、「四四番目と四五番目」の

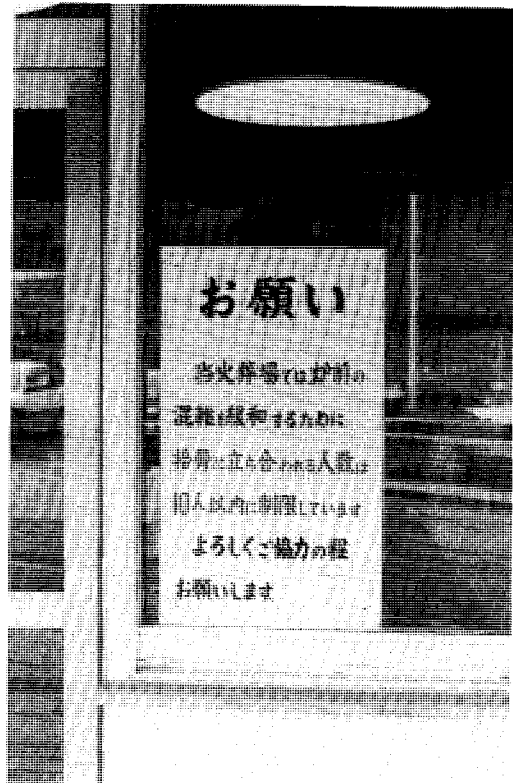


図14 八事斎場の火葬棟と待合棟の間に掲げられた人数制限の注意書 (H13.2.11)

搬入、「五三番目と五四番目」の搬入、「六三番目と六四番目」の搬入に、それぞれ観察できた。だが、火葬所要時間などにより、拾骨のさいは、かち合っていないかった。

会葬者については、炉前での告別はするが、拾骨まで待機しない会葬者が、ほぼ三割と観察した。乗用車で来た会葬者に多く見られた。会葬者の人数についても、二四番目に搬入された、一七三分の二〇号炉の火葬に、五〇人もの会葬者が付いてきたというのも、異常であり、一考を要する。反対に、ごく少人数の会葬者の遗体については、推量ではあるが、特殊な事情を伴った故人ではないかと考えている。

ところで、さきに提示した一覧によって、四六炉の使用ローテーションが分かり、まんべんなく使用していることに納得がいく。一号炉から五〇号炉までであるが、四・九・四二・四九は欠番となっていて、実在する炉は四六基である。普通炉（幅六〇センチ、長さ二〇〇センチ）と巨人炉（幅六二センチ、長さ二二〇センチ）があり、二二号炉と二九号炉が巨人炉であることは、図13の写真をよく見ると理解できよう。また、管理事務所の話によると、火葬の執行を開始する時間は、遺族からの申し出により、火葬炉、霊柩車などの事情が加味され、あらかじめ定められる。葬儀などとの関連も含め、斎場側はできるだけ遺族の希望に添えるように配慮しているという。

火葬開始から拾骨開始までの火葬所要時間に差がみられるのは、遺体の年齢、大きさ、死因などが影響している。さきの一覧でも分かるように、「六六番目」に搬入され、一号炉で火葬された遺体の火葬所要時間はわずかに三四分である。この遺体の場合は、小さな木製の柩にお人形のように入ってきた、生後四日ほどの乳児であっ

た。

そのほか、二二号炉と二九号炉の巨人炉の火葬に、やはり時間を取っていることが目立つ。また、一回転目の火葬炉使用の所要時間の最大は一時間四七分、最小は四四分で、平均すると一時間二〇分であった。二回転目の炉の平均所要時間も一時間二二分で、ほぼ同じであった。

次に、火葬炉前で告別に立ち会った会葬者の人数を時系列化で調べると、午前一一時台に六〇九人、午後二時台に四〇四人の、二つのピークが観察できた。この日の全時間帯の会葬者合計は一六二六人であった。この八事斎場では、火葬棟に到着した柩を、会葬者が集まると同時に炉前で告別（お別れ）し、火葬炉の中に収める。告別のための特別の場所は無く、炉前で会葬者の流れを処理するためと考えられる。

さて、再燃焼炉付きの火葬炉四六基を配した最新式の火葬設備を誇るこの斎場であるが、調査の当日午後三時三〇分ごろ、筆者のひとりである水谷は、この火葬棟の一号炉寄りの短排気筒から、黒煙が上がる場面を目撃した。図15の写真がそれを撮ったものであるが、この日のこの火葬場の再燃焼炉は、処理能力以上のものが負荷されたのであろう。黒煙が火葬棟の屋根から上空へ浮遊し始めたのである。ごく特異な日の例外なアクシデントと考えるが、驚くべき事実であった。

この日、四六基の火葬炉のうち半分が一回、あとの半分が二回使用されている。詳細に言えば、一号炉と五〇号炉の全部が一回転、一号炉から三二号炉まで（二八号炉を除いて）二回転、ということになる。普段の日は、それぞれの火葬炉は、一回の使用で済んでいる。火葬炉の常識的な維持管理のためには、その運転回数は一日に



図15 はからずも黒煙が上空へ浮遊する八事斎場の火葬棟 (H10.12.29)

二回までが限度だとされている。そうすると、この四六基に火葬炉は、しばらくこのままで良いだろう。火葬炉の基数についての問題は無いが、現在では他の多くの火葬場が採用しているように、それらの火葬炉に前室を設けることが必要だが、ここではもはや、そのスペースが取れない。

拾骨も、炉の前面へ、焼骨をのせた台車が出てきて、そこで会葬者が拾骨しているが、現在の面積上、仕方がないことだろう。別な空間に拾骨のためのスペースを設け、そこまで台車を移動させての拾骨は、かえって混乱をひき起こすことになるだろう。ただし、一つの炉の前面で拾骨のさいは、その炉の近辺の炉の前で、告別や拾骨がかち合わぬよう、斎場側の十全な時間的配慮が必要である。

ともあれ、ハード面・ソフト面で問題を取り上げ出すと、きりが無いだろうが、やはり大きな問題は、名古屋市の火葬場が、ここ八事の一カ所のみで、「一極集中」の典型例であることである。異常事態に備えての防災や代替の難しさを、以前から指摘されていた火葬場であったが、平成七年一月の阪神・淡路大震災以降、特にこの「一極集中」が問題視されるに至っている。

### 解決の方途

今、その都市の過去が忘れられて火葬場が語られている。と言つても、過不足なく叙述するのは不可能であり、それゆえに一面的であるといった批判を免れないかもしれない。火葬場の歴史を叙述する難しさであると言える。

研究者として学問をやっているという覚悟の乏しさを露呈させたくないし、そのためには史資料の問題とか住民のかかわり方に、い

ろいろな記述上の工夫が必要であろう。ただ、今の歴史学のなかでも、若い人たちがマルキシズムに絶望して、実証主義の方向性に行くと言われているけれども、かつて実証主義者たちが持っていた強烈なイデオロギー性に対する無批判という問題だけは、非常に大きな問題だと考えている。筆者たちは、歴史を語らず、確たる思想も思惟も持たず、火葬場をハコモノとして論じている人たちを、うとましく思う。そういう人たちの火葬場に寄せる「せめて近代」、という思いはどのようなものであるか。火葬場を設計したとか、火葬場の情報を他人よりもちよつと知っているという手合いが、「最後の告別をする荘厳な空間づくり」で歯止めなく漂流している意見や意識（思想やイデオロギーではない）では、本当の合理的な火葬場はあぶり出されてこないはずだ。日本近代史像の方法「革新」に、研究対象の火葬場がシフトしてこないからだ。近代都市構造史研究の成果を十分に踏まえ、大都市 地方都市 町場 周辺農村という重層的編成のなかで、火葬場の類型化を考えるべきだと思う。

以上のような視点からみていくと、まず八事斎場も、市当局の努力で昭和五九年から六二年までの改修で、周辺住民が納得のいく能力まで火葬炉の性能を向上させ、無煙無臭化が実現できたのであるが、外観がそのままなので、住民の共感が得られないままではいるのではないかと懸念がある。

次に、変転する法制を受けつつも、明確な都市計画決定を行ったうえで、名古屋市の長期計画における都市施設としての火葬場の整備を確認することが不可欠の要件である。八事斎場は大正四年の都市計画以前の出發で、都市施設としてできたものでないから、都市計画から適用除外をした。というのはどうも、名古屋市は火葬場に関して、姑息な手段で回避してはいないか。もっと自信をもって所



図16 周辺市町との連携の提案図

業に当たってもらいたい。

さらに、一極集中火葬場の問題点を解決するために、早急な計画的分散化を提案する。さりとて、名古屋地域の現状では、新しい火葬場を建設する用地は皆無に等しい。そうした背景から、周辺市町との連携も選択肢の一つであろう。例えば、名古屋市を中心に周辺市町のブロックをつくり、広域事務組合の火葬場を設けて、補い合う解決策である。筆者たちの案は図16のとおりである。周辺の火葬場を保有していない市や町と組み、人口割で経費を負担し、火葬場を維持管理することである。火葬場を持たない隣接する市や町を含む三つのブロック（北・東・西）に分け、北のブロックでは西春日井郡師勝町付近に、東のブロックでは、西加茂郡三好町にそれぞれ火葬場を設置するという案である。

加えて、八事斎場のような大規模な火葬場での災害時への対象として、分散化のほかに「非常用火葬炉の設置」を提案したい。住民が気付かないような場所、例えば名古屋市内の公園の一角などに、災害時の非常用として火葬炉を設置しておくことである。これについては、さまざまなクリアすべき問題も存するが、京都市における実例がある。

また、阪神・淡路大震災のときのように、直接遺族が火葬場に遺体を運んできたケースの対策について、八事でも円滑な火葬業務が遂行できるように迅速な対応を準備しておかなければならない。

いずれにしても、災害の有る無しにかかわらず、数年来、この国から地域社会と企業社会が蒸発し、人びとがばらばらに暮らすようになった揺らぐ現実の影響も考えておかななくてはいけない。

八事斎場をあげつらう人びとは、火葬炉に前室がなく、告別と拾骨が炉前で行われていることを、まるで鬼の首でも取ったように批

判する。しかし、筆者たちはあまり言いつのることは考えていない。現実のそのことを絡めてあれこれ指摘し、提言しておきたい。

前室が無いから、会葬者に汚れた炉内が直接に目視されてしまうという心配は、炉内を常によく清掃し、清潔に保全しさえすれば、別にきわだつ悪い特徴はない。ただ前室が無いと、急熱急冷の繰り返しで、炉内の痛みは速いという欠点はあるが、会葬者には関係のないことである。

火葬場を論ずるとき、あまり「告別」だとか「最後のお別れ」などという観念に固執していると、告別ホールや拾骨ホールの増設で、建築空間が増え、いたずらに出費を増し、近年そちこちで見かけるホテルのような「斎場と称する火葬場」となる。研究者の立場から、こうした意見は慎むべきものと筆者たちは考えている。「最後のお別れ」は告別式のあと、出棺前に、その式場で十分に行えばよい。そのために告別式があるのである。

出棺後は火葬場に到着したら、直ちに炉に収めるべきである。前項で指摘したように、五〇人もの人が会葬者として火葬場に付いてくるのが異常としか言いようがない。そういう例があるから、八事の場合、炉前の使われ方については、棺の見送り場所の関係や、会葬者群どうしの空間共有に対する考え方から、批判される向きがあるかもしれないが、特にトラブルが無ければ、厳然と処理してよいと考えている。範にしてほしい例が京都市である。葬儀社たちの尽力で、火葬場に赴く人員を、一会葬者群一〇名と、出棺前に厳重に制限し、それを歴史的に守ってきて、火葬場内の混乱を見事に避けている。京都市中央斎場の事例に学ぶことが必要である。

炉前へ引き出される台車での拾骨も、現在の建物の面積上、いたし方ないであろう。炉の回転や間隔や、周囲の炉との関連などを十



分に考慮して、近隣の炉での告別や拾骨とかち合わぬよう、斎場側の時間的気配りが重要であることはすでに触れた。現在の八事では、それもうまく行っているほうである。四六基の炉が並んでいるどの位置に拾骨コーナーを設けても、台車にのせて移動させての拾骨は、いたずらに混乱を招くに過ぎなくなるだろう。

日本一の大規模な火葬場を、改造と称して変にいじくり回したり、妙な火葬炉の改変を行うなどは、火葬炉メーカーとの癒着が指弾され、あぐくの果ては福島県二本松市長のように逮捕されるといふ結果になつては、目も当てられない。筆者たちは、この国のこの面でのこれからは、いつそう深く沈み込んでいく凶兆を読み取っている。

それに、最大規模の火葬場の改造・改築・新築のいずれに際しても、慎重な計画・監理のうえで設計・施工が必要であるが、そのために審議会や監査委員会などを設け、厳重にチェックするための機能が絶対に必要となる。

いつぼうソフトの面でも、大きな規模の八事斎場には、現在も火葬棟内にきわだった特徴があり、その判断に迷っている。はしたない言われ方をすれば、「民間企業圧迫」とも取られかねない提言である。

この火葬棟内で、各葬儀社から派遣されたいらしい、スチュウワーズのような制服の女性群が、会葬者をいろいろと指示し誘導している。いわば「仕切っている」のである。が、果たしてコンピュータの所在する管理事務所や、炉の裏側の作業技士陣と、十分な連絡をとって指揮を取っているのであろうか。会葬者は動転しているから、それにしたがっているが、客観的に観察していると奇妙な存在である。現在の体制下（名古屋市から、もし第三セクター的な正式

な依頼があるのでなければ）では、「公営」への越権か奉仕か「なれあい」か判然としない。平たく言えば「出しやばり過ぎている」観もある。市当局が必要ならば、矜持きょうじを持って葬儀社派出とは別途に、こうした女性群を公務員（パートとしても）雇用すべきであると断定する。会葬者をおして、市に対して妙な疑惑を抱かせることを、筆者たちは恐れる。

これらの女性群が、この火葬場の「事のはこび」をテキパキとこなしているのは、経年的に十分認めるのだが、何事も「立ち場」を明瞭にしておく必要がある。「小さなことに目くじらを立てるな」との指摘も受けようが、習慣が旧習となり、旧習は旧弊となつて予想もしないトラブルが起こる温床ともなることを案じるからである。

名古屋市だけとはいえないが、社会ことに家庭の変化に着目してほしい。かつて家庭は生産の共同体であり、子育てと教育の場であった。それが戦後の高度成長のなかで、生産と教育の機能を失った。単身赴任の増加で消費共同体としての役割も小さくなった。葬儀や結婚式も隣近所や親類の人たちが取り仕切ることもなくなった。近代工業社会が家庭に期待したのは、情報と蓄財の共同体に過ぎなかつた。

ところが、携帯電話やインターネットで、情報もまた個人化する。そんななかで育つ若者がどんな「火葬場」を求めるか、名古屋市全体で考えるべき問題であろう。名古屋市も例外なく少子化であろうが、それを年金や財政に矮小化わいしょうしてはならない。それに本来、死は生および性とともに、もつとも私的な領域に属するものと考えられているのである。

筆者たちは八事斎場が残したおびただしい記録を検討したり、实地に踏査することで、八事の上を何が通過し、何が失われていったかを、あたかもCTスキャンで輪切りにしたように、日本の火葬場の精緻せいちを見ることができた。

筆者たちはまた、小稿で、研究上という外側から、かぎりなく細分化された分野から八事斎場を、大仕掛けな見せ物としてしか見えないかもしれない。だが、次の世代に客観的認識の必要とする姿勢だけは貫いたつもりである。

しかし、斎場側の他者であり内側におられる人びとにも、共感すること多く、落ち着いてこの道筋をたどっていれば、順逆の誤りもなく、これでいいのだ、と肯定し、安堵する。これは他の火葬場では経験できない安堵である。ここから、これからの未来への道のつけ方を示してくだされば、それでよい。

それは、他の火葬場へのこだわりを振り払って、名古屋市立八事斎場の新しい可能性を探し求める道の分岐点である。歴史と地域の織りなす網目から、その分岐点は透けて見えるであろう。

八事斎場と称しても、斎場（葬祭場や式場）の設備は無く、一貫して火葬場一筋でやってきた。火葬炉の使われ方と平面構成との関連は、わが国の古くからの火葬場の形式が踏襲され、成熟したものと考えてよい。社会的弱者に対しても、この火葬場は決して差別をしていない。というか、一本筋のおつた歴史的なポリシイを持っている。

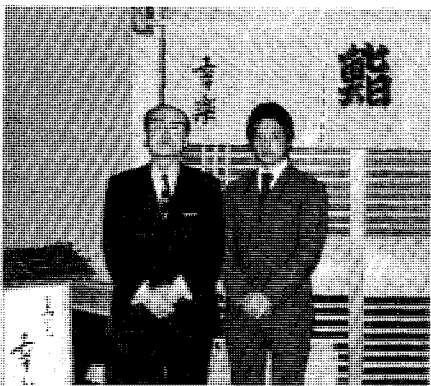
火葬場に遺族の誰もが抱く心の闇、会葬者が迷い込む謎なぞの森。そういうものも包み込んで、今、八事斎場は、新しい世紀に生きようとする名古屋市民の、心の断面に現われた不安と愛に、こたえようとしている。

【追記】 日本大学理工学部建築学科の学生であったころ、卒業論文を書くに当たって、浅香教授は次のように指導された。「歴史の考察にページをさき、思想を盛り込むと重厚なものになります」「現実と切り結んだ学問でなくてはいけませんよ」と。今回はその師匠と、学生時代に戻った気分を勉強した。

編集部からの「ご寄稿のお願い」には、「お顔写真を添えてください」とあった。ご一緒に撮った数少ない写真のうち、主題の八事斎場に調査に赴いた日の帰途に、名古屋の栄のプリンセス大通りの幸楽寿司の前で、主にシャッターあらしを切ってもらったものである。今年（平成十五年）六月三日の夜ふけである。

（水谷記）

あさか・かつすけ 日本大学大学院理工学研究科  
みずたに・としなり ミサワホーム東海株式会社



## 祖先祭祀とキリスト教の姿勢



(ルーテル学院大学名誉教授)

柴田千頭男

### 1 葬儀と祖先祭祀

ロバート・スミス教授(コーネル大)の指摘を待つまでもなく、日本における仏教葬儀は、そこがすべてでなく、長期にわたる祖先祭祀に直結している。現在、大多数の葬儀は仏教式であるが、それが祖先祭祀に直結していることになんの疑念も挟まない。端的に言うなら、仏教と葬儀と祖先祭祀は一つにパッケージされ、仏教を祖先祭祀と同一視している人も多い。仏教から祖先祭祀を取り除いたなら、現在の日本の仏教は成り立つだろうか、という声もあるし、ラファディオ・ハーンと小泉八雲は、祖先崇拜を日本の最も優れた宗教としたが、その一世紀後、同じ外国の研究者、ヘルマン・オームス教授(カリフォルニア大)は、仏教が死んでも祖先崇拜は残るだろうと言っている。論者もかつてアメリカの西海岸の日系市民250名の調査をしたが、生活が変わり、改宗した後でも、祖先との連帯を伝統儀礼的に守る人々が多数いた。時代、世代、環境の変化を越えて、この宗教的行為が存在することで、祖先崇拜が日本人の基層宗教であり、永続的存在であることが示唆されていた。にもか

かわらずこの課題について、キリスト教の立場からの本格的な研究書はきわめて少ない。J. M. Berentsenの『Grave And Gospel』などは例外的な研究書である。しかし布教という実践の場では、キリスト教もこの問題に直面せざるを得ない。16世紀に来日した最初の宣教師ザビエルも、離日後の長い書簡で、日本人は死者への特別な思いがあり、それがキリスト教会の布教にとつても課題であることを指摘した。今日も葬儀・葬儀後の諸儀礼で悩むキリスト教徒は多いし、教会に対応策を求める声は大きい。内部で批判はあつたが、日本のカトリック教会は、実践的な立場からの対応策を打ち出した。具体的な『手引き』を1985年に出した。他方、プロテスタント諸教会は、祖先崇拜行為には概して批判的、拒絶的である。しかし祖先祭祀の家族共同体的性質を考えるなら、批判と拒否だけでは具体的対応になれるか、疑問もある。16世紀に中国伝導に着手した先駆者マテオ・リッチ師は、中国社会が祖先崇拜を中心に動いている以上、キリスト教会側も「それにとつてかわるものを持たなければ、この国での伝導は成功しない」とローマに報告したが、状況的には日本も似ている。一体宗教は、どこまでも個人行為なのか。それとも家族・社会共同体との関係においてこそ意味付けられ、機能するものなのか。こうした根本的な課題を、この問題を通してキリスト教も考えざるを得ない。祖先祭祀問題は、仏教の本来の教え、日本古来の宗教性、習俗や家を中心とした社会構造、さらにはキリスト教自体の祖先理解、宣教地の宗教文化とキリスト教の関係などを考察しなければ簡単に結論が出るものではないだろう。本論はこの広い射程をもつ課題への序論である。

### 2 カトリック教会の対応

日本のカトリック教会は1985年に、司教協議会の認可を経て、『祖先と死者についてのカトリック信者の手引き』という小冊子を刊行した。批判もあったが、大方ではこの手引きは受容され、実践されているようだ。その証拠にカトリック系の祭具などの販売所には、仏壇に似た家庭用祭壇や位牌も売られている。手引きは、日本で一般化している祖先祭祀のやり方を大方容認し、信徒の質問に対する答えという形式で、かなり具体的なやり方も示唆している。カトリックの意味においてであるが、祖先祭祀は拒否されていないのである。しかし、これをカトリック教会の変質とするより、むしろ必然的な結果と言つてよい面がある。二つの事を指摘しておく。一、カトリックの教えには、人間の死後について死がすべての終りでなく、伝統的に『煉獄』と呼ばれ、今日では『きよめ』のプロセスとして理解されている教会の教えがある。死後であっても、人間は完全でなく、罪・けがれよりの清めのプロセスが継続している。だから死者への愛から、生者が神への祈りをもってその清めを助け、早く完了するよう願うことが、生者の当然の宗教行為として期待され、それが死者と生者を連帯させている絆になつているのだ。こうした教えは、日本人の基層宗教的行為である祖先祭祀・崇拜に向かい合つても、反発よりも、受容の可能性を内包していると言える。二、1962年から1965年にかけて第二バチカン公会議という、画期的な会合が開かれ、世界から2200名の司教が集まり、教会の在り方を現代という状況においてどう理解し、どう是正していくべきか、あらゆる角度から検討し、それを教会憲法・教令、あるいは宣言という形で公文書化した。これは、ある意味ではカトリック教会の地殻変動的な転換をうながした。その宣言のひとつ

である『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』が、この『手引き』のバックアップになつていたのである。

「すでに古代から現代に至るまで種々の民族が、自然界の移り変わりと人生のさまざまな出来事にひそむ、あの言い尽くしがたい力を認めている。それどころか、時として、神的な最高のものを感じ、さらに父なる神をも感じとつていっている。こうした認識や霊的感覚は深い宗教的感情となつて、かれらの生活のすみずみにまで及んでいる。」という宣言の言葉が『手引き』にも引用され、この精神により、日本人が古来から実践してきた「祖先をまつること」に深い宗教的感情や霊的感覚を発見し、評価しなければなりません」としている。(p.9)。例えば「私はカトリック信者ですが、先祖も両親も他宗教(仏教)でした。どのようにまつればよいでしょうか」という質問への答えは、「第二バチカン公会議によれば、本人の落度からでなく、おかれた状況のために、真の神も、救い主イエズスも知らない人は：：イエズス・キリストの十字架の死と復活の功徳によつて、神の豊かな慈愛にあずかれる」である。ここには、日本人の祖先崇拜との断絶よりも、むしろその継続が示唆されている。

### 3 プロテスタント教会の場合

同志社大学の創始者新島襄は、十年のアメリカの生活を終えて帰国した時、まず出身地安中の父母、親族を訪ねた。彼の無事を喜び、神棚に灯明をあげて拜んだ両親を見て、人間は木や石で造つたものを神としてはならないと諭し、神棚を焼き、祖先を敬しその名を保有するは子孫の勤めであつても、これを拝し、祭るのは誤りである、と書き残して安中を去つた。きわめてラジカルな行爲だった

が、人は人、神は神という不動の規定が、混同されることは許されないという信仰の姿勢を、新島はこのようにして示したのだ。神に従うということは、他の神、あるいは「神らしきもの」に従わないとする旧約聖書の民に通じる姿勢である。しかしそれは、祖先への思いも排除することなのか。新島にあつても「子孫の勤め」として祖先を敬う重要性に触れている。そこも見なければ、こうしたラジカルな対決の姿勢だけがキリスト教の姿勢と思われるだろう。聖書をすこし見てみたい。

(a) 聖書における先祖への言及。

聖書には先祖への言及はまったくなく、と言うと、実は、族長や国の王が死んだ時は、きわめてしばしば、その者は『死んで先祖の列に加えられる』（創世記49章33節）とか、『先祖とともに眠る』（申命31章16）あるいは『その民に加えられる』と言われているのである。先祖と訳された言葉は、父（アブ）の複数（アポート）であるから父祖たちである。人の死に際してのこの定型化された表現は、祖先崇拜を前提とした者でないと言う学者が多い。しかし死を個人の危機ということだけに限定してしまった現代への反省をここに、死者を人間共同体や伝統と記憶の中で見ようとしているのだという研究者もある。この表現で人の一生とその死が、その人に先立った者たちとの関連の中で見られていることは確かだ。キリスト教は自己の創造者は神であると信じる。しかし、創世記5章でアダム（人間の意味）が自分の子をもうけた時の記述は注目に値する。「神は人（アダム）を創造された日、神に似せてこれを造られ、男と女に創造した。アダムは30才になったとき、自分

に似た、自分にかたどった男の子をもうけた。アダムはその子をセトと名付けた。」という記述がある。ここにある「似る」「かたどる」という言葉は本来、神による人間の創造の場合の言葉であるが、その言葉がここでは、人による人の誕生にも用いられている。それによつて、神による人間の創造と、人による人の誕生がバラレルに扱われ、その両者に正当性が与えられているのではないか。人間には自分のおかれた『時』を考へる場合、三つのレベルがある。この5月のある日の新聞に、日本の国産ロケット、ミュゼスの打ち上げ成功のニュースが出た。そのとなりに、イラクのフセインを倒したアメリカ軍が、少なくとも一年をそこにとどまるといふ記事があつた。一方は、来年の6月に小惑星に到達し、そこで砂粒をとり、7年6月に地球に戻るといふ、気の長い行為であるが、今一つは、アメリカの占領が一年にわたることへの反感や反動が高まるという記述である。その両方ともわれわれにとり事実であるが、この二つの『時』を同じレベルで理解しようとしても、それは不可能である。共に人間がしてる事でありつつ、まったくレベルの違う歴史の時に関わっているからである。一方は宇宙の歴史で、われわれが生まれ、そこで生きている場である宇宙の研究である。言うなれば世界を生んだ母体の時間である。地球は時計になぞらえるならもう4時半ぐらいのところに着いているが、5時くらいになると氷河期にはいる、という説もある。そういう時間の中にわれわれがあるのも、事実であろう。しかし他方は、地球上にきざまれていく人間の歴史で、すべての人間がその影響下にあり、また関わっている歴史の時である。しかし『時』はこの二つだけではない。もう一つのレベルの時がある。父母に、さらに先祖に繋がる『私の歴史』の時、そこでわれわれは、他の人間との連帯の中で自分の生存の根拠が与

えられている。そういう時である。アダムに似て、セトが生まれる。私に似て、私の子が生まれる。確かな血の繋がりがそこにある。これは宇宙の歴史、社会の歴史以上に *language* な歴史ではないか。そこを見ないことには、自分の生存の根拠は見えてこない。親より生まれ、そして死んで先祖の列に加わる。それは生存の具体的条件ではないか。それら包含して神の創造があるとしても、神の創造による人間を強調する反面、この面でも、われわれが自分の時を生きているという事実を、キリスト教も軽視はできない。

(b) ザーカル(想起)の問題

この想起というヘブライ語は、聖書ではきわめて重要な用語だ。それを示す一例は、聖書の神が自分を語るとき、ただ「わたしは神だ」と言わずに、いつも聖書の民の過去、つまり彼等の先祖の歴史に結び付けて自分を語っているという事実がある。「わたしはあなた方の先祖をエジプトから導き出し、荒野の旅を40年にわたり、守り、導き、今この地に入れた神である」という語り方だ。「あなたがたがわたしのことを思う時は、あなたがたの先祖をエジプトから開放した、あのわたしの行為と結びつけてわたしを想起しなさい」ということである。聖書の神は抽象的でなく、歴史を造り、歴史にある神として自己を示す。こうした神の言葉にふれて人は、かつて地上を生きた自分の先祖の影(かたどるのヘブライ語の意味)として、今を生きている自己をいやでも自覚するのである。祖先祭祀はこれからどうなるのか。プロテスタントの教会の立場から言うなら、先祖の神格化はない。しかし、想起することとはあつてしかるべきで、祖先想起がなければ、今の自分の理解もない、とも

言える。こうした理解をするなら、この問題についての仏教との対話も可能ではないか。想起は新約聖書の言葉であるギリシャ語では、記念(ムネメー墓の意味もここからくる)である。教会としても、個人としても、死者記念は重要だ、それを深くとらえることで、祖先への感謝が、さらに神への感謝という宗教的感情の深化にもなるだろう。これが祖先祭祀を、キリスト教の立場から考える場合のわたしの立場である。ここを手掛かりに、さらなる研鑽をし、この課題についての宗教間対話を目指したい。

参考文献

- 河野純徳訳編『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』 1985年、平凡社。  
ラフカディオ・ハーン『心』平井程一訳、1951年、岩波書店。  
同『神国日本 解明への柏倉俊三訳』1984年、平凡社。  
ロバート・スミス『現代日本の祖先崇拜』前山隆訳、1983年、お茶の水書房。  
ヘルマン・オームス『祖先崇拜のシンボリズム』 1987年、弘文堂。  
W>ブルックマン『創世記』向井孝史訳、1986年、日本基督教団出版局。  
カトリック中央協議会『祖先と死者についてのカトリック信者の手引き』1985年、南山大学監修『第2バチカン公会議公文書全集』 1986年、中央出版社。  
ブラッセル・山崎寿賀訳『新カトリック教理』 1976年、エンデルレ書店。  
同志社編『新島襄書簡集』 2000年、岩波書店。  
日本聖書協会『聖書 新共同訳』1987年、その他。

## 祭祀財産の承継

稲村 吉彦

戦前までの旧民法では、物質的遺産である家産家業と精神的一族の表徴である祭祀財産は、長男子が家の承継者として、受け継ぐことになつていた。国家も家制度を国家を形成する基本的思想として、さらに富国強兵策により、欧米に追い付け追い越せ、という政策の表現でもあつた。

遺産は個人の一身専属のものは別にして、ご承知のとおり、預金や有価証券、土地不動産などをいう。祭祀財産とは、仏壇、仏具、位牌、祭具、墓所、系譜、系図などを指す。現行民法では旧法の家制度を廃止し、婚姻中心主義となり戸籍にも三代の記載を許さず、子供も婚姻によつて新規に戸籍を編成することになる。

又、二十歳になれば新規に自分の戸籍を編成することもできるようになつた。

現民法は、祭祀財産の承継には、遺産相続とは別のルールによることを定めている。それが民法第八九七条の規定である。

その第一位は、被相続人の指定がある者、第二位は慣習により祖先の祭祀を主催する者、第三位は慣習が明らかでないとき家裁が決定する者となつている。

この被相続人の指定には、近親者とか、家督相統的な長男優先などの規定はなく、極端に言えば友人知人でもよく、その指定書にも遺言

書のような様式制の規定もない。

慣習により、ということも家制度が廃止されている現在、家督相統的な近親者優先ではなく、新民法施行以来今日まで育成されてきた慣習によるものと解釈される。

家庭裁判所の決定には、被相続人との身分関係や、承継者の管理能力とか、生活実態などを総合的に判断して決定しているようである。

勿論、長男が継承してはいけない理由はない。但し、現在も祭祀財産の承継は、長男が継ぐべきものと思ひ込んでいる人々が多い。遺産相続については、均分相続がかなり普及しているのに、子供の各個人は親の遺産を少しでも沢山欲しいと、裁判で争う事例が珍しくない。祭祀財産については、面倒ということもあつてか、長男と決めつけている人も枚挙にいとまがない。

さらに、遺産相続のもつれから、祭祀財産についても共有名義を主張する人がいる。新規に建墓工事をする際にも、共有名義にして、という要求がなされることもある。

中年の奥さん方仲良し三人で家族とは別に墓をつくり、自分たちでそこに入り、名義を共有にしたい、という相談もあつた。

この人たちは、祭祀財産を財産という認識を持たず、単に遺骨の処理、又は追憶の場としか考えていないらしい。

祭祀財産も財産であるから、必ず承継されることを考えなければならぬ。

特に墓の場合は、共有名義にすることが困難である。仮に、兄弟で共有名義の権利とした場合、兄弟も親密な関係の間はよいとして、一旦関係が拗れると、墓所としての機能が失われてしまう可能性がある。

例えば、兄弟関係が感情的に拗れた場合、新規に納骨する遺骨が出たとき、墓地管理者は共有名義人の同意書を求めることになる。も

し、納骨同意書を取らないまま、納骨をさせると、共有名義人の一方の墓所使用権を侵害したことになる。墓所管理の瑕疵として、損害賠償などの訴訟を提起されることになりかねない。

平成十一年五月に改正された「墓地、埋葬等に関する法律」施行規則にも、名義人以外の者からの改葬許可申請には、名義人の同意書の添付を義務づけている。

これは、取りも直さず名義人の墓所使用権を認めたというか、保護したものと思われる。

先の話に戻ると、もう一方の名義人の同意書が得られない場合、新規の納骨は管理者が拒否することになり、又もう一方の名義人の新規納骨が出た場合も、同意書は得られない結果になってしまう。従って、この墓所は墓としての機能が失われ、やがて管理者によつて無縁墳墓として整理される可能性がある。

他の祭祀財産を分割相続することには、差程の障害はないものと考えられる。管理者としても、現在は殆どの墓地霊園で管理料請求などの事務は、コンピュータ処理がなされており、名義人の権利等は単記一名分としてプログラムされており、共有名義の場合などになつたら、プログラムを作り直すことになり、莫大な経費が必要になる。何れにしても、墓所使用者も墓地管理者もなんの利益も得られない共有名義は避けるべきである。

過去の判例で、祭祀財産の承継について、先妻の長男などに分割承継させたことがあり、その後何の問題も起きていないかが墓の承継というけれど、されど墓の承継は、後々まで問題を起しかねない要素を含んでいるのである。

先に遺産相続は、均分相続が原則といったが、本当に公平な分配だろうか。親を死ぬまで日常同居して世話をしてきた子と、なんの手伝いもせぬが子が同一の額の遺産が果たして公平なものとは考え難い。

現在は、個人主義が行き過ぎて、利己的な風潮が跋扈しているが、この辺で立ち止まり戦後の来し方行方をじつくりと、考えたいと思う。



## **Suicide in three perspectives Biblical study, Bushido, and Koran**

**Toshifumi Uemura**

### **Introduction**

Opinion about suicide was divided among the various schools of antiquity. While the Cynics and Stoics accepted suicide as legitimate, Platonists and Peripatetics were against it. Aristotle insisted that to kill oneself is to wrong the community to which one belongs. St Augustine was to take up the issue again when he constructed the root-and-branch prohibition of self-destruction which Christianity has maintained from century to century ever since.

On the other hand, the philosophers and researchers continued their disputes in Japanese *seppuku*, *hara-kiri*<sup>1</sup>. It is precisely in order to keep faith with his community that *seppuku* occurs: to serve his city, its liberties and laws, up to the supreme sacrifice.

In this paper, I want to examine three aspects of suicide: biblical perspectives, *seppuku* in Japanese context, and Muslim philosophy in Koran.

### **Texts used to condemn suicide**

In the Ten Commandments, God explicitly ordered, “You shall not murder (or kill)”(Exodus 20:13, Deuteronomy 5:17). Saint Augustine condemned anyone who committed suicide based upon this commandment. The belief that life is a gift of God the creator is foundational for those who believe that suicide is against the will of God. I was

---

<sup>1</sup> In this paper I will use *seppuku*. *Hara-kiri* is too vivid of language for Japanese reflecting the actual actions of this ritual suicide. Although *seppuku* is almost the same meaning as *hara-kiri*, Japanese prefer to use *seppuku* over *hara-kiri*.

also taught by my grandmother that suicide is much worse than killing others. The precious life from God must be honored. If you break it, there is no salvation after death. God alone has the authority to take our life away. Here I consult several verses from the Bible that preclude suicide<sup>2</sup>.

Genesis 1:1 – 2:4 [The Creation Stories]  
Genesis 9:6 [Blood for blood]  
1 Samuel 2:6 [Life belong to God]  
Job 1:20-21 [The Lord Gave and the Lord has taken away]  
Deuteronomy 32:39 [I Kill and I Make Alive]

See now that I, even I, am he;  
    There is no god besides me.  
I kill and I make alive;  
    I wound and heal:  
    And no one can deliver from my hand

Thomas Aquinas (1225-1274) denounced suicide citing Deuteronomy. His influence was so strong that suicide has been seen as evil, especially among Catholic believers. Proverbs 8:34-36 also implies suicide is going against God (“all who hate me (God) love death.”) Psalm 104:29 recalls the creation story; when you take away their breath, they die and return to the dust.

### **Suicide and attempted suicide in the Bible**

It was or is one of the more prevalent assumptions of Western religious culture that the Bible prohibits suicide as I surveyed in the previous chapter. Inspection of the biblical texts, however, shows that this is by no means clear. To begin with, there is no explicit prohibition or commandment against suicide in the Bible. There is no word

---

<sup>2</sup> James T. Clemons, What does the Bible say about suicide? (Minneapolis: Fortress Press, 1990). P32-37.

anywhere in the Bible, either in Hebrew or Greek, which is equivalent to the English term suicide<sup>3</sup>, nor is there any passage in either the Old or New Testament that can be directly understood as an explicit prohibition of suicide.

On the contrary, the biblical texts do describe several suicides and attempted cases. These are the examples which appear in the Bible;

- (1) Abimelech (Judges 9:54) [ordered young man to draw his sword and kill]
- (2) Samson (Judges 16:30) [“Let me die with the Philistines.”]
- (3) Saul and his armor bearer (I Samuel 31:4, 5, II Samuel 1:6, I Chronicles 10:4)
- (4) Ahithophel (II Samuel 17:23) [hanged himself, buried in the tomb of his father]
- (5) Zimri (I Kings 16:18) [burned down the king’s house over himself with fire]
- (6) Razis (II Maccabees 14:41) [fell upon his own sword being surrounded]
- (7) Ptolemy Macron (II Maccabees 10:13) [poison]
- (8) Judas (Matthew 27:5) [hanged himself]
- (9) Paul’s jailor (an attempted suicide) (Acts 16:27) [drew his sword and was about to kill himself]

The careful observation brings to light that there is a typical pattern of suicide in the Old Testament. The most prominent Old Testament figure recorded to have committed suicide was Saul. His long and illustrious life came to its miserable end in a battle in which three of his sons were killed, all his men were lost, and he was badly wounded. In a few short verses the author of I Samuel recorded the story of Saul’s death in these poignant words:

---

<sup>3</sup> Margaret Pabst Battin, *Ethical Issues in Suicide* (New Jersey: Prentice Hall, 1995), p28

Then Saul said to his armor-bearer, "Draw your sword and thrust me through with it, so that these uncircumcised may not come and thrust me through, and make sport of me." But his armor-bearer was unwilling; for he was terrified. So Saul took his own sword and fell upon it. When his armor-bearer saw that Saul was dead he also fell upon his sword and died with him. So Saul and his three sons and his armor-bearer and all his men died together on the same day (1 Samuel 31:4-6).

And the story continues:

The next day, when the Philistines came to strip the dead, they found Saul and his three sons fallen on Mount Gilboa. They cut off his head, stripped off his armor, and sent messengers throughout the land of the Philistines to carry the good news to the houses of their idols and to the people. They put his armor in the temple of Asarte; and they fastened his body to the wall of Beth-shan. But when the inhabitants of Jabesh-gilead heard what the Philistines had done to Saul, all the valiant men set out, traveled all night long, and took the body of Saul and the bodies of his sons from the wall of Beth-shan. They came to Jabesh and burned them there. Then they took their bones and buried them under the tamarisk tree in Jabesh, and fasted seven days (1 Samuel 31: 8-13).

The valiant men of Jabesh-gilead, at the risk of their own lives, went to retrieve Saul's and his sons' body from Beth-shan. Having done so, they grieved over the loss of their king.

In terms of the attitudes of the community for whom this story becomes Holy Scripture, there is no suggestion that Saul, or even his armor-bearer, were in any way to be condemned for their actions<sup>4</sup>. From the times of the Egyptian pharaohs, perhaps earlier, servants of kings have been known to join their masters in death, either by choice or command. In Japan, we can point out several examples, too. In ancient times, it is said, at the death of the king, his servant was also expected to die as in Egypt. But this practice

---

<sup>4</sup> See James T. Clemons, *What does the Bible say about suicide?*, (Minneapolis: Fortress Press, 1946), p17

was replaced by *haniwa*, a clay image of men or animals, in the Tumulus period which began the end of the third century and ended around the seventh century.

After the death of Saul's armor-bearer, there is no later reference to him, which suggests that the manner of his death was taken simply as a normal reaction for the people at that time. His suicide may have come as a result of overwhelming grief or a sense of shame for not having obeyed his king's last command. No solid clue is given regarding motive. Clearly, however, the Bible offers no condemnation of the armor-bearer's self-chosen death.

Several later passages indicate how Saul was remembered by the Israelites. Interestingly enough, Saul was cremated by the brave men who took his body from the Philistines.

### **Different observations in 2 Samuel about the death of Saul**

2 Samuel came up with a rather detailed account of Saul's death. Upon hearing the young man of Amalekite who claims that he himself killed Saul at the king's own request, David orders one of his servants to strike the man down.

Why did David kill this young man who reported Saul's death and brought the crown and armband of Saul? Did the poor young man report a false story to get such a reward? I personally do not understand David's reaction. I cannot find a fault with the messenger. I can only imagine from this passage that he is the son of a resident alien, an Amalekite (2 Samuel 1: 14). As he was a foreigner, he did not have an authority to kill King Saul. Before David commanded death for this man, he asked him, "Where do you

come from?" This question showed the importance of the Lord's anointed for David and the Israelites.

### **The code of suicide in Japanese context**

Until the economic crash in the beginning of the 1990's, ten thousand people committed suicide every year. But after 1992, the suicide rate rapidly increased to thirty thousand. Before I came to the U.S.A in 2001, there was news about suicide almost every day. In Tokyo, one of the largest and most crowded cities in the world, middle aged businessmen who lost their job jumped in front of a train every morning, which caused seriously traffic jams. The reason why they jumped into a train is not clear. The most common method of suicide was to jump from a high-rise building. These cases seem different from traditional suicides in Japan. Now I want to survey the meaning of suicide of past days.

It was thought a virtue for a samurai to kill himself when his lord died. The armor bearer of Saul was almost the same case. He followed the death of his king. In Japan, however, it was prohibited by law in the beginning of the seventeenth century. An able samurai's death causes a loss of human resources. As recently as the early 20<sup>th</sup> century, however, Maresuke Nogi (1849-1912), a general of the army at the time of the Japan-Russo war, immolated himself at the funeral of Emperor Mutsuhito (1852-1912).

There was a tradition of voluntary death in Japan going back to *Kamakura* period (1192-1333). It may well be that this tradition, which was confined to the warrior class; *bushi* or samurai.

Dr. Nitobe Inazo wrote the book of “Bushido<sup>5</sup>” in 1899. “Bushido” is literally “the way of bushi.” Dr. Nitobe was the final samurai class. After Japan opened her doors to the western countries in the middle of nineteenth century, the government abolished class distinctions. Samurai were no longer the privileged class. Swords on their belt became of no use. However, the spirit of samurai remains. Dr. Nitobe mentioned in his influential book;

Chivalry is a flower no less indigenous to the soil of Japan than its emblem, the cherry blossom; nor is it a dried-up specimen of an antique virtue preserved in the herbarium of our history. It is still a living object of power and beauty among us; and if it assumes no tangible shape or form, it none the less scents the moral atmosphere, and makes us aware that we are still under its potent spell. The conditions of society which brought it forth and nourished it have long disappeared; but as those far-off stars which once were and are not, still continue to shed their rays upon us, so the light of chivalry which was a child of feudalism, still illuminates our moral path, surviving its mother institution<sup>6</sup>.

Bushido is an ethics for the privileged class. It is not a written code. It consists of a few maxims handed down from mouth to mouth. It was founded not on the creation of one generation. “It was an organic growth of decades and centuries of military career.”<sup>7</sup> We cannot point out any definite time and place and say, “Here is its fountain-head.”<sup>8</sup> Only as it attains consciousness in the feudal age, its origin, in respect to time, may it be identified with feudalism. *Yoritomo*, the first shogun as a samurai class late in the twelfth century began a government. Samurai, as a governor, gradually studied rituals.

---

<sup>5</sup> It was published 1900 in Philadelphia. Dr. Nitobe served the League of Nations as Under-Secretary General. He wrote Bushido in English for western people. F Roosevelt read this book. Moved by this book, he willingly mediated Japan-Russo war (1904-1905). Despite the victory of the war, Japan suffered a tough negotiation with Russian diplomat.

<sup>6</sup> Inazo Nitobe, *Bushido; Bushido as an ethical system*, (Philadelphia: The Leeds & Biddle, 1900)

<sup>7</sup> *ibid.*

<sup>8</sup> *ibid.*

## The institution of suicide in Bushido

*Seppuku* is literally ripping the abdomen. “Absurdly odd as it may sound at first to foreign ears” and contemporary Japanese ears alike, Dr. Nitobe pointed out, “it cannot be so very foreign to students of Shakespeare, who puts these words in Brutus’s mouth—“Thy spirit walks abroad and turns our swords into our proper entrails<sup>9</sup>.” When Razis was surrounded by his enemy, he also fell upon his own sword (2 Maccabees 14:41).

As the Semites habitually spoke of the liver and kidneys and surrounding fat as the seat of emotion and of life, the term “*hara*” was to be thought that our soul lives.

Modern neurologists speak of the abdominal and pelvic brains, denoting thereby sympathetic nerve centers in those parts which are strongly affected by any psychical action. The view of mental physiology once admitted, the syllogism of *hara-kiri* is easy to construct. “I will open the seat of my soul and show you how it fares with it. See for yourself whether it is polluted or clean<sup>10</sup>.”

*Seppuku* was not a mere suicidal process. “It was an institution, legal and ceremonial. An invention of the medieval period, it was one way by which warriors could make amends for their crimes, apologies for errors, and escape from disgrace, redeem their friends, or prove their sincerity. When enforced as a legal punishment, it was practiced with due ceremony<sup>11</sup>.” Dr. Nitobe described “it was a refinement of self-destruction, and none could perform it without the utmost coolness of temper and

---

<sup>9</sup> *ibid.*

<sup>10</sup> *ibid.*

<sup>11</sup> *ibid.*



composure of demeanor, and for these reasons it was particularly befitting the profession of bushi.<sup>12</sup>”

The last official *seppuku* was held in 1868 when the civil war ended and new government by non-samurai started. The class system was abolished in 1870, and the next year likewise carrying two swords, which was the privilege only allowed to the samurai class. When the system of conscription was brought in, samurai completely lost their identity. Nothing remained but nostalgia. Other privileges, such as family names, permission to ride a saddle-horse, etc, were also open to everybody. Finally the hereditary salaries paid were turned into government bonds and then abolished. Though there were several conflicts, generally people followed the government policy. For Japanese at that time, loyalty to his master was the virtue.

Slowly and with great dignity the condemned man mounted on to the raised floor, prostrated himself before the high altar twice, and seated himself on the felt carpet with his back to the high altar, the kaishaku crouching on his left-hand side. One of the three attendant officers then came forward, bearing a stand of the king used in the temple for offerings, on which, wrapped in paper, lay the wakizashi, the short sword or dirk of the Japanese, nine inches and a half in length, with a point and an edge as sharp as a razor's. This he handed, prostrating himself, to the condemned man, who received it reverently raising it to his head with both hands, and placed it in front of himself.”

“After another profound obeisance, Taki Zenzaburo, in a voice which betrayed just much emotion and hesitation as might be expected from a man who is making a painful confession, but with no sigh of either in his face or manner, spoke as follows:

“I, and I alone, unwarrantably gave the order to fire on the foreigners at Kobe, and again as they tried to escape. For this crime I disembowel myself, and I beg you who are present to do me the honor of witnessing the act.”

“Bowing once more, the speaker allowed his upper garments to slip down to his girdle, and remained naked to the waist. Carefully, according to custom, he tucked his sleeves under his knees to prevent himself from failing

---

<sup>12</sup> *ibid.*

backward; for a noble Japanese gentleman should die falling forwards. Deliberately, with a steady hand he took the dirk that lay before him; he looked at it wistfully, almost affectionately; for a moment he seemed to collect his thoughts for the last time. And then stabling himself deeply below the waist in the left-hand side, he drew the dirk slowly across to his right side, and turning it in the wound, gave a slight cut upwards. During this sickeningly painful operation he never moved a muscle of his face. When he drew out the dirk, he leaned forward and stretched out his neck. But he uttered no sound. At that moment the kaishaku, who still crouching by his side, had been keenly watching his every movement, sprang to his feet, poised his sword for a second in the air; there was a flash, a heavy, ugly thud, a crashing fall; with one blow the head had been severed from the body.” “A dead silence followed, broken only by the hideous noise of the blood throbbing out the inert heap before us, which but a moment before had been a brave and chivalrous man. It was horrible.” “the kaishaku made a low bow, wiped his sword with a piece of paper which he had ready for the purpose, and retired from the raised floor; and the stained dirk was solemnly borne away, a bloody proof of the execution.” “The two representatives of the Mikado then left their places, and crossing over to where the foreign witnesses sat, called to us to witness that the sentence of death upon Taki Zenzaburo had been faithfully carried out. The ceremony being at an end, we left the temple.”<sup>13</sup>

The glorification of hara-kiri offered, naturally enough, no small temptation to its unwarranted committal. For causes entirely incompatible with reason, or for reasons entirely undeserving to death, hot-headed youths rushed into it as insects fly into fire. And yet, for a true samurai to hasten death or to court it was alike cowardice. A typical figure, when he lost battle after battle and was pursued from plain to hill and from bush to cavern, found himself hungry and alone in the dark hollow of a tree, his sword blunt with use, his bow broken and arrows exhausted- did not the noblest of the Romans fall upon his own sword in Philippi under like circumstances? – deemed it cowardly to die, but, with a fortitude approaching a Christian martyr’s, cheered himself with an impromptu verse:

---

<sup>13</sup> Maurice Pinguet, *Voluntary Death in Japan* (Cambridge: Polity Press, 1993). pp.151-152.

“Come! Every more come,  
Ye dread sorrows and pains!  
And heap on my burden’d back;  
That I not one test may lack  
Of what strength in me remains!”

This, then, was the Bushido teaching- Scar and face all calamities and adversities with patience and a pure conscience. True honor lies in fulfilling Heaven’s decree and no death incurred in so doing is ignominious, whereas, death to avoid what Heaven has in store is cowardly indeed!

As to *seppuku*, though it too has no existence in modern Japan, suicide of a manager in the company is still a common phenomenon. Recently, however, the increase of suicide in Japan needs careful observation. Suicide by young who can not find any value to live, as with the who tire of living is dramatically increasing.

### **What does Koran said about suicide?**

I interviewed a Muslim woman who works in a cafeteria near Luther Seminary. Her background is complicated. Her father who is from Poland is a Baptist and her mother who is from the Middle East is a Jew. At first she inherited the Jewish tradition,

and under the influence of her father, she went to church. But she converted to Islam six years ago. She could not accept the Pauline tradition. For her, the teaching of Mohammad is simple and much easier to understand. She mentioned that the Koran is practical for everyday life, which can apply to this century.

Concerning suicide, she immediately told me that it was prohibited by the Koran. Although she could not point out which verse of Koran prohibits suicide, her attitude or thought about suicide was completely negative.

According to Koran, no one can die unless Allah's will:

Nor can a soul die except by Allah's leave, the term being fixed as by writing.

(3:145)

We need the permission of Allah to die. "Life and death" are also mentioned in Koran in many verses:

Say "Truly, my prayer and my service of sacrifice, my life and my death, are all for Allah, the Cherisher of the Worlds. (6: 162)

Say:" O men! I am sent to you all, as the Messenger of Allah, to Whom belongs the dominion of the heavens and the earth: there is no god but He: it is He that gives both life and death. (7: 158)

To Allah belongs the dominion of the heavens and the earth. He gives life and He takes it. Except for him you have no protector or helper. (9: 116)  
It is He Who gives life and who takes it, and to Him shall you all be brought back. (10:56)

It is Allah who creates you and takes your souls at death; and of you there are some who are sent back to a feeble age, so that they know nothing after having known much: for Allah is All-Knowing, All-Powerful. (16:70)

This is so, because Allah is the Reality: it is He Who gives life to the dead, and it is He Who has power over all things. (21: 6)

It is He Who gave you life, will cause you to die, and will again give you life: truly man is a most ungrateful creature! (22:66)

It is Allah Who has created you: further, He has provided for sustenance; then He will cause you to die; and again He will give you life. Are there any of your (false) "Partners" who can do any single one of these things? Glory to Him! And High is He above the partners they attribute (to Him)! (30: 40)

It is He who gives Life and Death: and when He decides upon an affair, He says to it, "Be", and it is. (40: 68)

And among His Signs is this: you see the earth barren and desolate; but when We send down rain to it, it is stirred to life and yields increase. Truly, He Who gives life to the dead earth can surely give life to men who are dead. For He has power over all things. (41:39)

What! Have they taken for worship protectors besides Him? But it is Allah,- He is the Protector, and it is He Who gives life to the dead: it is He Who has power over all things.(41:9)

There is no god but He: it is He Who gives life and gives death, - the Lord and Cherisher to you and your earliest ancestors. (43: 8)

Verily it is We Who give Life and Death: and to Us is the Final Goal. (50:43)

That it is He Who grants Death and Life. (53:44)

To him belongs the dominion of the heavens and the earth: it is He Who gives Life and Death; and He has Power over all things. (57: 2)

He Who created Death and Life, that He may try which of you is best in deed: and He is

the Exalted in Might, Oft-Forgiving. (67: 2)

Repeatedly, "Life and Death" are pointed out. Only Allah has the right to decide for life and death. As in the Bible, there is no explicit statement about suicide in Koran; however, the reiteration of "Life and Death" is good enough to give up the idea of suicide for Muslims. They worship Allah five times a day!

## Conclusion

In this paper, I survey three different religions focus on suicide. Although Japanese Bushido is not a religion, it reflects Japanese traditional way of life. I did not mention Shinto. It is said that there is no concrete philosophy in Shinto. Shinto is the original way of life for the Japanese. The central idea of Shinto is gratitude to Nature. The most important thing is a *matsuri*: festival in the autumn. After the harvest, the big festival to thank to the gods is given. *Tenno*(emperor) is a priest of the *matsuri*. The biggest role is to thank to gods for the crops. When the Buddhism was brought into Japan through Korea in the middle of sixth century, the Buddhism philosophy greatly influenced Japanese society. *Tenno* accepted Buddhism as a national religion. Up until now, Buddhism is the most popular religion in Japan. At the same time, Confucianism and Taoism were also introduced to Japan. Generally speaking, although there were small conflicts, Japanese accepted those religions favorably. Judaism and Islam are the religion that Japanese have not accepted. One big reason is that the nature of God of these religions is too exclusive. Although Christianity had/has also inherits exclusivism, Japanese seems to respect it. Contradictory enough, the modern Shinto learns a lot from Christianity. As Christianity was divided into groups; Catholic and Protestant, Japanese government would not accept both of them. Government decided to make an artificial religion using traditional Shinto. *Tenno* suddenly became *Kami* (god).

Bushido by Dr. Nitobe, was written under such circumstances. His philosophy is influenced by the ethics of Christianity-Shinto mixed idea. As he himself was a devout Christian, he had a deep knowledge of Christianity. But he did not have enough

knowledge about Shinto. Shinto is not a “religion” like Christianity. There is originally no ethics in Shinto.

Concerning suicide, Japanese have no idea for his/her background. As many Japanese chose to kill themselves, I tried to find out what was death through the biblical and Koran research. As Christianity and Islam have a common origin, the nature of God is as creator and transcendent existence. Although there is a big controversy about the nature of God, it is totally a different idea of Japanese *Kami*. *Kami* is simply the symbol of nature. *Kami* have never ordered people. So the choice of death is not in *Kami* but people.

### **Bibliography**

Ali, Abdullah Yusuf. *The Qur'an Translation*, New York: Tahrike Tarsile, 2001.

Baechler, Jean. *Suicides*, New York; Basic Books, 1975.

Battin Margaret P. *Ethical Issues in suicide*, New Jersey: Prentis Hall, 1995.

Bosselman, Beulah Chamberlain. *Self-Destruction*. Springfield: Charles c Thomas, 1958.

Cleary, Thomas. *Code of the Samurai: A Modern Translation of the Bushido Shoshinsu*. Boston: Tuttle, 1999.

Clemons, James T. *What does the Bible say about Suicide?* Minneapolis: Augsburg Fortress, 1990.

Gervais, Karen G. *Redefining Death*. London: Yale Univ, 1986.

Farberow, Norman L. *The Many Faces of Suicide*. New York: McGraw-Hill, 1980.

Pinguet, Maurice, *Voluntary Death in Japan*, Cambridge: Polity Press, 1993.

Wroblewski, Adina. *Suicide: Why? 85 Questions and answers About Suicide*, Minneapolis, 1989.



## 衣・食・住について、「衣」とは

天野 勲

文化とは、「衣・食・住をはじめ、宗教・政治・技術・など、生活形成の様式と内容を含む」Ⅱ広辞苑Ⅱとある。即ち、文化とは、衣・食・住・なくしては成立しない。その衣（服飾）食（食物）住（建築物）はそれぞれ単独の文化を形成しているが、学会が標榜している、葬送文化では、衣・食・住・すべて深い関わりがある。

葬送の主役である死者のあの世への旅装束Ⅱ通称「帷衣」のことにふれてみる。帷子というのは「麻・絹布・木綿・で縫われたひと重もの」白布を親族・縁者の女性が縫ったのである。その縫うときの風習として、縫い終りのときに「玉結び」はしない。また「返し縫いはしない」死者に「帷子」を着せるのは遺族・親族が死者との大切な別れの儀礼である。また、子供や孫が死者のうえに大きめの白布をかざして陽がとどかないようにという風習が残っている所もある。また「囲炉裏」で香を焚き、囲炉裏の上に帷子を広げ懸して、香を込める。これは死者が発する臭いをやわらげる。また香で悪霊を寄せつけないという行為であろう。帷子と共に死者の身体に着ける「天冠（三角布）」「手甲」「脚伴」「頭陀袋」などがある。帷子・が親族が縫う風習が、なくなった現在、繊維メーカーが縫製・販売しているが、そのメーカーの「商品カタログ」に記載

してある「品質」「寸法」「種類」を抽出してみると、品質はすべてポリエステル〇〇％使用しており「ちりめん織り」白色の「サテン生地使用の柄の織込み」「スエード」「ジャガード織り」で縫製されている。また消費者の志向を考え「小人用ⅡわらべⅡ」「洋風」などがある。白を基本としているが、ピンク・グレー・その他の色が使われている。寸法は、五尺丈から、三尺九寸、小人用として、二尺五寸までとなっている。また白・紫・の二色で、羽織も縫われている。因みに、「神式葬儀用として通称「白丁」Ⅱ浄衣ともいうⅡもある。五尺丈の品は、完全に着せられるものもあるが、一般的には死者の身体にかけるだけのものを使用している。同じあの世への旅立ちの衣装として、「笈摺」Ⅱ巡礼者（お遍路）Ⅱに経文・名号などを書いた着衣・寺院Ⅱ長野善光寺Ⅱなどで「旅支度」一切と共に授かる着衣などがある。帷子の色は白が主体であるがその理由は文献によりさまざまである。「白」というのは汚れない色・その人（死者）の心の表れであり、悪霊をよせつけないという意味もある。善人であった人は勿論のこと、悪人であった人も、あの世への旅立ちには汚れない「姿」・「心」であれという願いが込められているのではないだろうか。「仏教に忌みなし」といわれている。死者はもともと穢れているのでなく、死を忌み嫌うのではないということに通じているのだろうか。還ってくるのではない死者、を表徴しているのではないだろうか。「弔」と「慶」を同時に考えるのは如何と思うが、花嫁衣装の「白無垢」も帰って来ないと言う意味が含まれているのではないだろうか。「帷子」のことを「経帷子」ともいうが、これは帷子の背に当る部分に、経文又は名号を各宗派の寺院で僧侶に書いて頂くからである。先述した笈摺も、同意味といえるだろう。葬儀用品繊維メーカー株式会社イガラシのカタ

ログに掲載されている「佛衣」についての文を轉載させて頂く。

「仏教では死者の旅立ちの際、僧の姿になぞらえて、白木綿に経文を記した着物を着せます。これを「経帷子」という。また「明衣」「浄衣」ともいわれています。昔は死者とゆかりのある女性、孫や姪、などがこの経帷を縫っていました。その作り方にも独特の作法があり、さらし木綿一反をはさみを使わずに裂いて裁ち、何人もが同時に引張り合い乍ら、一針づつ縫う「ひつぱり縫い」や、縫い終りの糸尻は“おしまい”を連想させるので、玉結びをしない。繰り返し不幸のくることを恐れ、返し縫いはしない等です。その他附属類「帯・手甲・脚絆・三角布・頭陀袋・六道銭・足袋・草履等も作られました。経帷子は通常とは逆の左前に着せます。額につける三角布は天冠<sup>11</sup>てんかん<sup>12</sup>と呼ばれており、仏教思想に基づき、死者があゝの世に行く際通るといわれる、閻魔庁での礼装。手甲・脚絆はそれぞれの手足につけ、白足袋と草履を履かせます。<sup>13</sup>中略<sup>14</sup>尚、浄土真宗や日蓮宗では、死者が冥土の旅に出るとは考えないため、好んだ着物や新しい浴衣を着せている所もあります<sup>15</sup>」原文のまま<sup>16</sup>葬送文化を研鑽している一人として、旧い仕来り、風習、風俗が失われつつある現代の趨勢に逆うことは出来ないであろうが、感無量である。物て、葬礼の「衣」であるが、死者に着せる帷子でなく葬儀の当家「喪主」「親族」参列者の衣服について述べてみたい。先に「帷子」の基本の色は白であることは先に列記したが、「喪主」の着用する「衣服」は、昔は白であったのは明々白々である。では何故ということは明確な答は出せない。しかし、「白」というのは「清い」「穢れない」「虚しい」<sup>17</sup>漢語林<sup>18</sup>という意味である。「清い」「穢れない」「虚しい」は仏教思想に相通するものであり、「虚しい」は淋しさに通るのである。即ち「弔」を表現する色な

のであろう。白い着衣で死者を送り、「喪」に服する「主」であるから、「白」を着たのではないかと考える。現代はその風習・着衣は見る事ができなくなつたが、地方・地域によつては、まだ着用している。白い喪服は和装（着物）であつたが、洋風が全国に広まり徐々に変わつたのであろう。明治・大正・昭和と年代は移り、喪主（男性）は礼服<sup>19</sup>燕尾服<sup>20</sup>女性<sup>21</sup>は黒の和装とそれぞれふさわしい服装であり、それが現代の主流である。しかし最近<sup>22</sup>は男性は、黒のフォーマルの洋服が多くなつて来ている。因みに参列者は、葬儀に相応しい平服であつた。しかし、現代は参列者の男性・女性を問わず、黒いフォーマル等に統一されたのは、「いつごろから」・「何故」・という疑問が生ずる。これについては二つの譬がある。その一例は関東大震災の折、火災にて各戸にあつた礼服が焼失、燕尾服がすぐに調達できず、黒のフォーマルな洋服を縫製して喪主に間に合わせたという。この事例については、現文京区で九十才まで、洋服縫製職として現役で活躍営業していた、今は亡き橋本氏より聞き取り調査したものであり、あと一例は、九州の炭坑で事故があつたとき、その葬儀式のとき、参列される方々の発案で縫製されて着用したということ聞いた。しかしその他にも各地域に埋もれた歴史の流れはあると考えられる。葬儀式参列者は現代は男性・女性とも黒が基調であるが、以前は平服に弔問の証として、腕章・喪章など使用されていた。現代よく見、聞きする「冠婚・葬祭」の慶事の際に、黒い服に白いネクタイ着用は、いつの時代からであろう。因みに、葬礼の場合は黒い服に、黒いネクタイ。葬式<sup>23</sup>のとき、黒と白の鯨幕を使用。これも葬送文化として研鑽すべきか、単に服飾文化とすべきか。「名古屋市史第九卷」<sup>24</sup>平成一三年<sup>25</sup>の記事を<sup>26</sup>当会常任理事代表、浅香勝輔氏より提供<sup>27</sup>記載する。「喪服といえ

ば、黒いものというイメージがあるが、戦前の名古屋地域では、特に親族の場合、白を着るのが一般的であった。中川区下之一色では、戦前の葬式では喪主は麻の白の袴で、他の親族、特に身内の近い女性は白を着た。黒を着るのはいいところの人であったという。名東区高針でも、女性の喪服は白であった。瑞穂区井戸田でも、戦前の葬式では身内は白を着ることになっていて、女性は嫁入りの時の白無垢、跡取りの男性は浅葱の袴、小学校から中学校くらいの男子は白袴であった。額には三角に切った半紙を付け、女性は島田を低くした崩し島田を結った。このような傾向は町場でも同じであった。大正時代の東区富士塚町では、一般の人は紋付の羽織を着たが、身内の女の人は白の喪服であった。

西区兎玉町に昭和五年に嫁いだ話者は、白は葬式に着なければならぬといひ、帯から何から白のものを嫁入り道具として持つてきた。同七年に葬式があり、主人は素足に白の袴で藁草履を履き奥さんは白無垢であった。東区出来町では、昭和ひとけたの葬式の時喪家の男の人は白袴を着て、女の人は白装束であった。年取つた人は髪結さんに来てもらつて崩し島田に結び、白足袋で藁草履を履いていた。この頃は葬具屋が白の袴を貸していたといふ。同一二年、熱田区千年であつた葬式の時、多くの人は黒の喪服になつていた。しかし、親族のうち、死者の娘は帯から何からすべて白で、死者の兄弟も白の袴、履き物も白の鼻緒の草履であつた。同一五年東区車道の葬式では、白の喪服を着用する習慣はなくなつていたといふ。同一六年新開地の中村米野の葬式では、身内の女性は白無垢、男の人は浅葱の袴であつた。喪服が白から黒へと完全に転換してゆくのは戦後のことであつた。後略。以上の名古屋市史に述べられているように、日本全国の喪服・葬式・服装の変化は地方・地域に

より変遷は、異なつていふと考へられる。更なる研究を深めていく必要を痛感する。

## 「葬送文化の衣食住」に寄せる想い



谷 莊吉

平成一五年の重要課題として、「葬送文化の衣食住」が示された時、私は、今まで全く気づかなかった「観点」を認識することが出来たように思っている。

ある意味では、カルチャーショックであった。これからの勉強が楽しみである。

最近うすうす感じていたことだが、いま一つ、鮮明な考えとして纏まっていなかった点が明確になって来た。それは、一言で言えば、「個人の死」と「民族(家・家族の絆の中の家)の死」との関係性についてとも言えようか。

私は、長年にわたり、日常の臨床現場における、ホスピスケアの体験として、多くの方々の個人的な「死の看取り」のお世話をさせて頂いて来た。そして、キザな表現であるが、「別れの美学」の提唱をしたりした。しかし、それはあくまで、「個人の死」についてである。

最近の世界的傾向により、インフォームドコンセントの重要性が強調されていることの影響もあり、「個人の自己(決定権)を尊重する」ことに重点を置いたケアが行われている。「個人重視」の観点から、すべての対応における価値判断が横行していると言える。それが時流であるとも考えられるが、少なくとも、「死」に関することを「思索する」のであれば当然、「個人の死」だけでなく、「民族の死」につ

いても、同等に、否、同等以上に、その意味について考察すべきだと考えるようになったのである。ホスピスケアの場面で語られる「死」は、殆ど全て、「個人の死」である。個人が生まれ、個人として生き、そして、個人として死ぬと言ふ捉え方からの「死生観」が主流となる。それは、それなりに重要であろうが、個人の死と民族文化における死の違いを考えたい。

「文化」という視点から考えると、個人の歴史(生育歴)と、家(民族・地域社会・国家)との関係から言えば、その個人が生まれるまでの、民族集団のご先祖が残して来た、文化遺産(生活のしきたりの継承)とでも言うような、死生観の影響(善悪はとにかくとして)を無視することは出来ないであろう。「私だけの死」であつて良いとは言えない。

特に「葬送文化」の視点からは、とても重要な継承文化(民族文化・文化遺産)があると思うのである。あえて強調すれば、それが今年度の「葬送文化の衣食住」という課題に集約されることになると言えよう。

現在、我々は、どのように「振る舞っているか」、「どのように生活しているか」が問われている訳だが、その意味を理解する上でも、過去の「ご先祖・家々単位・村・町ぐるみ」の歴史(郷土文化)に照らして、我々の「生と死」を検討する必要がある。

最近の傾向として、「死の受容」を考える場合、「死は万人に訪れる」、「人間は全員死ぬ」などの言い方が正論になっている。しかし、今、上述の「文化的視点」を考察した時、「死がタブー」だった、と言う考えと、民族的なもの、あるいは、ご先祖の「死を忌み嫌った・あるいは・嫌って来た」歴史(文化)を一瞥のもとに、「死をタブー視して来た」と言うのとは、少し、意味が異なるのではないだろうかと思うのである。

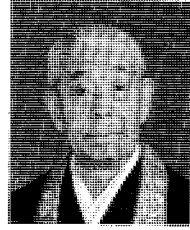
「死を忌み嫌う・お祓い・けがれ」などの、「民族的な生活感情」は、それなりの文化遺産的な重要な「意味」がある筈ではないか。ならば、「死がタブーだった」と言った、簡単な言辞で片づけられるものではないのかとの思いが湧いて来るのである。

飛躍的な自己反省から言えば、「別れの美学」を提唱する根底に、そうした「日本民族の文化遺産としての・葬送文化の歴史」をもう少し深く理解した上で、現在の我々の生活感情として、「こうした方が良いのではないか」と言う提案をすべきであると気づいた訳である。私の提案は、何か非常に浅薄な現代感覚になってしまったと考えたい。

一九八一年に、リヨン社から、西村鞆山著「墓」と言う著書が発行されている。「その祀りと在り方」と言う副題が付いている。最近この著書を読み返す機会があり、再度、この著書により、一層、「個人の死」の重要性とともに、民族（家・家族・村・町）の民衆の「死」の重要性（特に、墓の存在意義）を、再認識している次第である。

この頃、少し、あまのじゃくになっているが、「死を見つめて生きる」、「死を学ぶことは、良く生きることになる」などの言辞が、とにかく安易に喧伝されているので、少々苦言を呈したくなっている。そこで、「歴史文化・日本人的継承文化」をもう少し深く理解すべきではなからうかと、「葬送文化の衣食住」に熱い想いを寄せているのである。

## 入会のご挨拶 『私の人生への思念と葬送』



並木 清

私は昭和三年、埼玉県に生まれました。職歴は昭和二十七年、民間企業に入社して以来三十余年間、各地への転勤で多くの人達との有り難いご縁を賜り、どうにか定年を迎えました。また法務歴は昭和五十七年、浄土真宗本願寺派で得度を受けた後、教師・布教使の資格も頂き、平成二年、松江市の圓照寺へ住職として入寺し、平成十三年住職を後継者に譲り退任しました。このように私は宗門では珍しい世襲でない住職でした。そして現在は寺を出て、妻と二人で最晩年を生かさせて頂いております。この様な経歴の一老人ではございますが、今後よろしくお付き合い頂けたなら幸甚と存じております。

ところで私がこの学会に入会させて頂いたのは平成十四年六月です。そのきっかけは平成十三年十月の新聞紙上で「葬式が形骸化」という見出しの付いた報道記事に触れたことでした。この記事の中で、会長さんが『葬送儀礼の形骸化が進む中、儀礼文化の再構築をしたい』と記されていたことに、心が動かされ入会の動機となりました。

そして昨年六月の月例会に出席させていただいた時のことです。ご講師のお話も終わった後で、天野会長さんから私に向けて、「…住

職ご在職中に「臨終経」を何回くらいお勤めになられましたか？」とご質問を受けました。初めて出席し、不意なご質問に一瞬戸惑いましたが、私は「臨終経」とは、世間一般で「枕経」といい、私どもでは正式には「臨終勤行」と言って居るものではないが、このお勤めは僧侶としても、またご遺族にとりましても、一連の「葬送勤行」の中でも特に重要なものとして時間もかけ心を尽くして行っております。」ととりあえずこの勤行の概況をご説明しながらも、現在行われている臨終勤行の根本的な問題点に触れるべきだと思いい、その場の対応として正直な自分の心境を率直にお話しようと考え、言葉を繋いで「しかし現実に行われている臨終勤行は死後勤行で臨終勤行ではないと思います。私も住職在任中ほんとうの臨終勤行を行ったことは残念ながら一度もありません。ただお一人、ご門徒の方ではありませんでしたが、篤信の老紳士が事前にご家族立会の上で『私の臨終には住職さんにぜひ立ち会って頂きたい、ですから私は病院でなく自宅で臨終を迎えますから』と、生前に臨終勤行の厳修を私に要請され、私もこの勤行の重要性に身の引き締まる思いを感じながら『ご縁がございますならば…』と丁寧に受け致しました。しかし現実にはご家族にも全く気づかせず厳冬の早朝お一人で臨終を迎えられてしまいました。そしてこの方以外にはこのような例は一件もないのが、僧侶として私の最大の痛恨事です」と回答しました。

帰りの車中でもこのことが反芻され、会長さんのこのご質問は正に私たち僧侶にとっては貴重な「頂門の一針」であろうと真摯に受け止めた次第でございます。

ところで臨終勤行については、わが国では十世紀末、浄土信仰の隆盛期、源信僧都の「往生要集」にも「臨終の行儀」として詳しく

記述されており、庶民の仏教と葬送との関わり発端はこの臨終勤行にあつたようです。しかし、前述の様な空洞化した臨終勤行（実際は死後勤行）が、仏教の衰退をもたらし、併せて葬式自体が形骸化していると評されるに至った原点ではなからうかと思っております。

現在の私は崇敬してやまない親鸞聖人の生きざまを伏し仰ぎながら次の事柄を念じております。

一つは、「歎異抄」に「ございます」「親鸞は父母の孝養（追善供養）のためとて、一辺にても念仏申したること、いまだ候はず。」と示されておられます。念仏は葬式や先祖供養やもちろん布施のためなどではない思っております。

次は「改邪鈔」（第三代宗主・覚如上人、作）に「…かつは本師聖人の仰せにいはいはく、『某親鸞閉眼せば賀茂河にいれて魚にあたふべし』と云々。これすなわちこの肉身を軽んじて仏法の信心を本とすべきよしをあらはしますゆえなり。これをもつておもふに、いよいよ喪葬（死者の喪と葬式）を一大事にすべきにあらず、もつとも停止すべし。」と記されております。

念仏は、時空を超えた（いのち）と絶対無限の不可思議（ひかり）に導かれ生かされて、生きる生きざまの顕現だと私は信じております。ですから今生にこだわることありません。死後の肉体は感謝の念をもって、今まで生かしてください温かい大地の懐にお返しすればよいと心得ております。この様な思念から毎年一月一日には妻と二人で息子に宛てた「お願いのこと」という文章の日付を書き改めております。

最後に、素晴らしい理想を掲げるこの学会の発展を心から念じてご挨拶と致します。

台 掌

## 靖国を想う

杉浦 昌則

今年の春父が、夕餉を取る私の処に一枚の白い便箋を置いていった。

父は明治生で九三歳になり、体は丈夫だが耳が遠く、私とは殆ど会話が成り立たない。昔風に言うなら、父は私に家督を譲った気であるため、例えば菩提寺や氏神様の寄進など、金銭のかかわる事柄については、とくに迅速に私の所に廻ってくる気がする。

渡されたものを一瞥し、特にお金のかかる内容のものでは無さそうなので、気を落ち着けて読み直すこととする。手紙の発信者は、葛飾遺族会第七支部とある。中身は「葛飾遺族会が昨年度を以つて解散となり、従つて当支部も解散となり、繰り越し金五〇万円を靖国神社に奉納します。」とのことであつた。

以前から預かつたものの中に、遺族弔慰金の国債があることを思い出し、引つ張り出してみた。平成七年に政府が発行した、戦死者の遺族に対し下賜されたもので、四万円クーポン券みたいのが一〇枚綴りで計四〇万円を、一年に一枚づつ切り取つて郵便局で換金出来るものである。今年の分を入れてあと三枚が残つていて平成一七年を持つて終了する。

戦争というものは、半世紀をとくに過ぎた今でもこうして莫大な

出費が嵩む、大変な事業であることが実感させられる。そしてもうひとつ、この弔慰金は私の裁量で使えることになるだろうが、父の弟である叔父の戦死によつてもたらされたお金だけに、使い道に苦慮するのだ。お金が入ったからといって、家族で回転寿司に行つて、皿の色とか枚数を一切気にせず、大判振る舞いしようと言う気にもなれないのだ。

叔父の位牌を見ると、昭和一九年に比島（フィリッピン）にて二歳で戦病死とある。

工兵と言うことだから、大砲を従えて行軍できる道を切り拓いたり、橋を懸けたりと道無き道を進んだのではなかるうか。病死という事なら、それはやはりマラリアか。

大岡昇平の「俘虜記」や「野火」を読むと、比島においての凄絶を極めたその辺りの様子がよく解るのだが、それを叔父になぞらえて読むことは出来ないで、別の世界の物語として捉えてきた気がする。

赤紙一枚で国から召集され、次の報せは戦死公報で、遺骨を引き取りに行くはめとなつた。父は三度の召集で二度満州に行ったが、除隊中に弟の戦死の報せを受け、芝の増上寺まで遺骨を引き取りに行ったと聞く。晒し木綿に包まれた白木の箱は、揺るとゴロゴロ音がしたというが、開けてみた人の話では、中身はただの石ころだつたと聞いていたので、我が家ではそのまま墓に納骨したのとことだ。叔父の骨は南の島のジャングルで今も眠っているかも分からない。

桜の頃は混雑すると思つて、四月の中ごろ、葉桜の季節に靖国神社に詣でてみた。

地下鉄を降り、境内の正面から大鳥居を眺めていたら、私のそばに



一台のタクシーが停まった。車からは老夫婦とその娘とおぼしき三人が降り立つ。会話を聞いたら中国語だった。おそらく台湾の一家であろう。娘が白髪のお爺さんに何事か語りかけると、何度も大きく頷いては、鳥居の向こうの景色を、しばつかせた目で眺め遣る。

「お爺さんは誰に逢いにきたの。当時の台湾は日本だったから日本軍として参戦して、戦友にやっとうして逢いにこれたの。」それが、「もしかして貴方は日本人で、終戦のちも異国に残り、今日家族に日本を見せに連れて来れたの。」私は勝手に想像する。

境内の鳥居をくぐると、桜は散つても大勢の参拝客で賑わっている。大村益次郎の銅像を過ぎると右側に休憩所があった。急ぐ旅でもないので休憩所に入った。缶ビールが冷えていて、いつもなら迷わず飲んでしまうが今日は止めておこう。「ラムネ頂戴。」涼しい縁台に腰掛けて、ラムネ玉をカラカラ言わせて顎をしゃくる。出が悪い。いつからラムネを飲むのが下手になったのだろう。細い舌で、ビー玉につつかえ棒して流し込んでいた。あの日の夏休みが遠去かる。思った以上に靖国神社はひと気が多い。米国のアーリントン墓地には年間四〇〇万人が参拝するが、靖国神社はそれを上回って六〇〇万人の人が訪れると仄聞する。境内をさらに進み、第二鳥居そして神門を過ぎてやっとう、拝殿に到達する。

白い大きな水引幕には四つの十六枚菊の巨大な紋が描かれている。ここに叔父も祀られているのだろうか。そしてそれは本人も知っていることだろうか。あまり実感が湧かないのだが、取り敢えずお賽銭を投じて二礼二拍手一礼。

靖国神社は明治二年、明治天皇が維新の際の内戦である戊辰戦争において、国に一命を捧げた人たちの霊を慰めようと「東京招魂社」として現在の地に建てられた。さかのぼって維新に散った幕末

の志士達、又、その後の佐賀の乱、西南戦争、日清戦争、日露戦争・第一次世界大戦・満州事変・支那事変・大東亜戦争の戦争で亡くなった方々を合祀するもので、併せて二四六万六千余柱が祀られている。その中には従軍看護婦を始め、沖縄の「ひめゆり」「白梅」等の女子生徒達など、五万七千余柱の女性の御祭神も含まれるという。

又、学童疎開を乗せて沖縄から鹿児島へ向かっていて、敵の潜水艦に撃沈された対馬丸の幼い犠牲者達も祀られている。今年、日本の首相は一月一日に「こつそり」と参拝し、「一礼」にて、「私費」で「献花」を行なっている。かぎ括弧の部分は半島や大陸におもねた対策上の事と思われる。靖国神社にはA級戦犯が祀られていることが問題視されているが、連合国側が行った東京裁判の結果七人が処刑され、又拘留中に亡くなった七人と併せて一四人が七八年に「昭和殉職者」として合祀された。東京裁判は国際法に基づかない裁判であったことと、日本は侵略国でなかったことをマッカーサー元帥が自ら自国の軍事委員会で後に証言している。日本の国会はどう捉えているかというと、講和条約が発効し独立したのち、この戦犯問題が審議され、国会での結論は、全会一致でA級戦犯者と決め付けられた人たちを、全員戦犯とは看做さないと決議されている。

だからA級戦犯など、日本には存在しないのである。

縄文時代の以前から、日本にはシベリヤやバイカルの方から人が渡来し、弥生時代の頃には大陸から米作とともに入ってきて、いつの頃からか南方の海洋文化の海人族と混淆し、どこから見ても日本列島は地の果てに見えてしまう。ここで上手く暮らせなければ、その先もう行く所がない。だから考え方が違って、受け入れたよう

な、受け入れられないような曖昧模糊のまま、争わずに生きていくしかない。死者にたいして罵倒しつづければ、次の世代に恨みを晴らされる。だから日本で死んだ者は、あまねく祀られることになる。

靖国神社を出て、千鳥ヶ淵を五分も歩けば、「千鳥が淵戦没者墓苑」に辿り着く。ここは海外で亡くなった無名戦没者の墓である。

海外での戦没数二四〇万人のうち、一二四万柱が日本に戻って来た。そして身元が特定出来ない御遺骨を、この墓苑に納骨されるわけだが、今年は一〇一三柱が新に納められ、合計三四九八三七柱に及ぶ。(ちなみにこの一〇一三柱を政府の要請によりご焼骨したのは、当会会員である(株)誠行社で野崎専務さんのご尽力でなされたとお聞きする。)その内、比島で拾骨された数は九四五〇〇柱もあるので、叔父の遺骨ももしかして、何方かに拾われてここに、眠っているかも知れない。納骨堂の手前には献花台が設けられていて、両脇に、白菊と黄菊が並べられている。私は代金百円を箱に投じて、貴菊を手にとった。「合掌」。

靖国神社には御霊が祀られ、この千鳥が淵墓苑には叔父の遺骨も眠っているとすれば、魂よりお骨の方が具体性があり、私はこの墓苑の方に愛惜の念を強く感じた。

新聞の記事によると、いま厚生労働省の霊安室が満杯になりそうだとのこと。

海外からの御遺骨が年々増えて、現在五六〇〇柱が保管されているそうだ。以前は身元確認出来ない場合は、千鳥ヶ淵に納骨されていたが、DNA鑑定が可能になった現在、歯や指の骨などが残る場合は、九九年から同省に仮安置されるようになった。今年度中には鑑定を始められそうだということである。戦後は、どこかで一線を画して終焉させられるものでもなく、様々な分野で受け継がれるべき

課題が、今も多岐にわたり存在するのである。

昔、サイパンで近くの島、マニガハ島に、船底がガラス張りになった観光船で渡った。うす青く揺らめく海底にゼロ戦が沈んでいるのが見えた。狭い鉄の棺桶のような、最早大空を飛翔した雄飛の矜持は失せて、ただにスクラップの残骸と化し、白い砂の中にあわれな姿で埋もれていた。

私は数分間言葉を失った。声を出そうと思ったが声も出ない、不思議と涙も出ない。

海底(うなぞこ)を指差し、若いカップル達の矯正がさざめく。次代を担う若者達は、降り注ぐ陽差しの中で、どこ迄も屈託がない。

「陣中日記」 昭和二〇年四月二十九日南方にて

海軍少佐 二七歳 慶応大学卒

三月×日 死は決して難しくはない。ただ死までの過程をどうして過すかは、むづかしい。これは實二精神力の強弱で、ま白くもなれば汚れもする。死まで汚れないままでありたい。

四月×日 人間死ぬ死ぬと口に出せるうちは、まだ本当に死という観念が迫ってこない。いよいよ明日突つ込むといふ日になつてはじめて死ぬのかといふ気になる。いやそれでもまだ何か他人事のやうな気がしているが、しかし明日は突入する。さうすればたしかに死ぬ。

(靖国神社資料による)

活動報告 2002年10月から2003年9月まで

■10月懇談会・一部会報5号にも報告

平成14年10月28日 東京文化会館

テーマ「山陰の葬送文化を訪ねて・野外研修報告」

鳥取県西伯郡名和町町営火葬場・鳥取県出雲市 出雲大社 関係等

パネラー：天野氏、杉山氏、杉浦氏

本年度の伏線テーマ、「病院における死」からこれまでいろいろな活動がなされ、各付帯する施設やその運用また社会における事前の葬送思考を喚起する活動などを敷設する傾向などを取り上げてきた。野外研修では都市周辺から離れ、地方における葬送環境をもう一度検証することで、現代葬儀に基層的な機能意識を与えている習俗や風習の原点を見出すことが出来るのではないかと思う。ともすれば私達は特に首都圏のみならず大都市周辺を中心に葬送文化を語ることを平常にしていることもあり、今回の野外研修は今一度原点的な葬送のあり方を再考するきっかけになったようだ。研修参加者各位からの私見を交えた報告から、死の取り扱いについての意味をあらためて考えていきたい。

### 天野氏より・・・

昭和25～35年時代、葬儀料金が低い地方であった。現在でも他の地域と比べても安い。

54万ほどで葬儀を施行している。値上げも土地柄難しい。

当時は葬儀社は2社ほどしかなかった。それは、儲からないということで、やらなかったのであろう。松江の仕事の70%を葬儀社（葬祭業者）は施行している。松江、出雲などで5、60万の人口である。

葬具としては手間のかかるものも使われる。昔ながらの慣習を今も引き継いでいる。

七本塔婆を立てるのは、七日ごとに墓地に持っていき供養していく。または塔婆を立てることが一つの封印儀礼を示すということもある。また七本を一度に供え、七日ごとに一本づつはずしていくということもある。

（二村氏談）

### 杉山氏より・・・（火葬場について）

明るい墓地である。よく花が飾っていたということからも、とても信心深い土地柄である。

建物（火葬場）はブロックで造ってある。比較的中も明るい。情緒があった。釜は1基のみ。年に15件程使用している（月一件ほど）。当番制で火を付ける。告別までは、行方が火葬は今年で廃止するという。とても良い情緒があるだけに勿体無い気もする。（会員多数の意件有）地元の方から愛着を持っている設備である。送風機を使い煙を煙突から出すということだが、どこに送風機を付けたのか知りたかった。10m程の煙突の高さが必要ではないかと思うのだが・・・。

料金は8000円 3.5時間の火葬時間がかかる（夕方終る）翌朝集骨する。バーナーを使用しているが火力が弱い、野焼きのような感じである。告別式は60名～80名位で行うのが一般的。古くから町に住んでいる方が使用するだけで、新しい方は新しい火葬場に行くようである。

集落は浄土真宗がほとんどである。日没という時間帯を取り入れて儀式を行う。土着習俗を感じた。（二村氏談）

### 杉浦氏より・・・（出雲大社について）

“すもうあしこし” “す” すずき、“も” もろげえび、“う” うなぎ、“あ” あまさぎ、“し” しじみ、“こ” こい、“し” しらうお。

海蛇を、出雲大社に持って行くとお金をもらえる。通常家庭の神棚は伊勢神宮のである。

出雲大社の入り口にある岩は“君が代”の歌になった。～さざれ石のいわおとなりて～。

死の旅路の出発点ということであったのではないかと。

現在出雲大社が建っている場所は、島根半島の西側に位置していますが、ここは元々島であった所だそうです。出雲国風土記の神話伝説によりますと、八東水臣津野命（やつかみずおみつぬのみこと）が、出雲の国はいかに小さいとのことで、海の彼方から陸を引っ張って来たと言われています。大社のある半島の西側部分から日御碕（ひのみさき）は、遠く朝鮮半島の新羅の岬を切り取って引いてきて、動かないように立てた杭が石見と出雲の国さかいにある三瓶山で、引き綱は長浜の海岸となった。島根半島の東部分の美保の岬や松江辺りは、北陸から引いてきて、伯耆大山（ほうきだいせん）に繋ぎ、そのもやいは夜見ガ浜（現在の弓ヶ浜）となりました。

そもそも出雲大社の成り始めは、大和国編纂の古事記、日本書紀によると、天照大神に対し、出雲の大国主命が、国を譲る代わりに立派な神殿を建てて祀って欲しいとの願いから発したとされています。大和国から見て出雲大社は日出ずる所ですが、出雲は日の沈む方角に位置しています。記・紀によりますと、いかにも出雲

の国が禪譲されたのごとく、記されていますが、実際は権謀術数の限りをつくして半ば強引に奪ったと思われる。そこで「大国」と称されるくらいに重要な国の主を憤死させてしまった負目と恐れから、この怨念の霊魂を極めて厳重に封じ込め、一方尊崇の気持ちを大仰に示すことによって出雲の国人の心を鎮める効果を狙ったのかも知れません。ですから出雲大社は何もかも異端な感じがします。

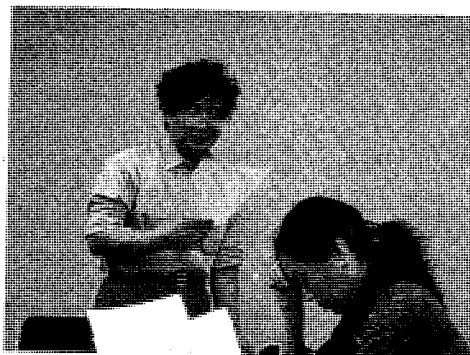
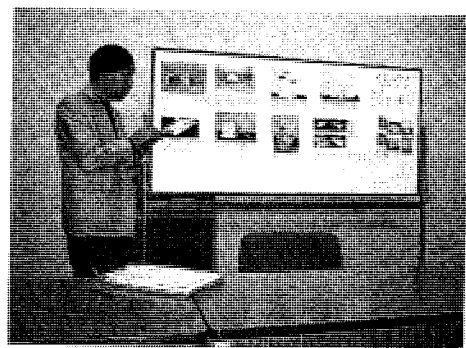
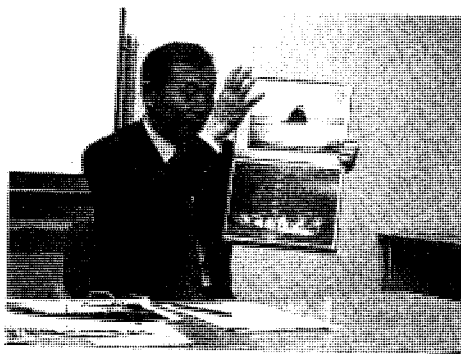
通常私たちが家庭に祀る神棚は、殆ど神明造りといって屋根の勾配がこちらを向いております。出雲大社では屋根の切妻の側が正面となります。檜皮葺の大屋根の天辺には、勝男木（鏗木）は三本。伊勢神宮の内宮は十本ですが、この意味するところは私も知りません。

屋根の稜線の延長が交差する千木は、先端が天に向かって切っ先鋭くカットされている。天照大神を祀る伊勢の内宮では、千木の先端は大地に水平にカットされているので、出雲大社は男千木と言われているようです。現在の千木の高さは24メートルと言われますが、太古には4倍の高さを誇っていたと伝承されています。

御魂を封じ込める注連縄（しめなわ）も、怨念の大きさにふさわしいくらい、巨大な物で、左右が細く、中央が極端に太くなっています。普通注連縄の縄い始めは神殿に向かって右側に位置するように飾りますが、ここでは逆に左側になっています。つまり大社は向かって左側が上席になっているのです。これは、端垣の内側に大社の脇社の配置に因を発しているとのこと。本殿の左側に筑紫の社、右側に御向の社及び天前の社が配されています。御向の社には、最初の妃と思われるすせりひめの命が祀られ、左はたぎりひめの命で宗像族の一族、北九州の宗像大社にも祀られております。それで筑紫様と親しみを込めて呼ばれているが、大国主神の何番目かの妃にあたると思われるので、ここにも後世の都合が見え隠れしているようです。

私たちは通常神社に詣るとき、手で二拍手を致しますが、大社では四拍手となります。四すなわち死を意味するとの説もあるようです。天照大神は、出雲の国譲りを受けて宮を築き、天穂日命に奉仕させたことから今日まで継承され、現在は出雲国造（こくそう）八十三代目に至っており、大社の祭祀を司っている。現在の本殿は1744年の造営で国宝に指定されています。

決して人の踏み入れることのない聖なる山、八雲山を背景にして佇む大社は、自然に溶け込み静謐で重厚な趣の中で、自ずと頭を垂れたくなる懐の深さを感じます。それはあたかも、大自然の懐に抱かれ、太古のオゾン霧に包まれたのごとくです。それは、長い歴史の中で人々から敬い、恐れられ、そして愛された信仰の幾層ものベールが重なって、音もない閑けさのはずが、心に様々な語りかけをしてくる気がいたします。



テーマ 『江戸時代はじめの儒者の葬式をめぐる』

講師：東北大学 講師 高橋章則先生

講師経歴・・・

- 1957年生まれ。
- 1981年 東北大学文学部史学科日本思想史学専攻卒業。
- 1983年 同 大学院文学研究科博士課程前期（国文学国語学日本思想史学専攻）修了。
- 1986年 同 後期修了。
- 1986年 東北薬科大学非常勤講師・・・現代に至る。
- 1990年 東北大学文学部講師／2000年 同 大学院講師・・・現代に至る。

その他・・・インドネシア大学大学院客員教授歴任（1997年、2000年）

研究活動／主要業績・・・「上古封建」論と国学——近世史学思想史の一断面——

本居宣長の「国造」制論とその思想的意味—宣長学考察の一視点—

（ともに日本思想史研究第16号 1984年）

近世初期の儒教と「礼」—林家塾における釈菜礼の成立を中心として—

（『日本思想史における国家と宗教』思文閣出版 1992年）

研究テーマ・・・日本の思想・文化の歴史的展開を歴史学的な観点から探求する。その際に、主として思想家の残した文献資料を扱い、彼らの思想的な営みを時代層・社会層との関連のなかで位置づけるという方法をとる。その上で、彼らの思想の同時代的な意義と今日的な意義、さらに普遍的価値等を考察することを目的としている。）

講演内容

仏教葬儀以前より儒教的な葬送の影響を我が国は受けてきた。

『土葬』の儒教的意味は、親の身体を傷つけない『孝』の意識より、亡骸を破壊する火葬は絶無。

同時に、火葬により靈魂のよりどころを消滅させてしまう恐れがある。

葬儀を取り仕切るのは『儒者の使命』でこれを『礼楽（れいがく）』として確立させたが、日本での浸透は、あまり定着しなかった。

『礼楽』とは、冠婚葬祭全般における礼儀。舞楽などもこれを含め、とくに葬礼をどう仕切るか、取り扱うかが儒者のアイデンティティとなる。

江戸時代における日本の儒者の中でも、葬送に大きく影響を与えたのが、野中兼山で、幕府に対して火葬反対を唱え、一時はキリシタンと混同されたがその後、各方面の国学者に影響を与えた。

特に江戸時代においては鎖国、つまり『海禁』ではあるが、江戸時代中12回の訪日を数えた、『朝鮮通信使』などの来日により、いっそう儒教的な基盤が、その都度再燃してきた。

朝鮮通信使の多くは、儒者であり、『華夷（かい）観念』のもと、我が国の葬礼を未開なものに見下していたようで、これを是正することを日本の学者に教示した。

\* 華夷観念・・・中国が明から清へ移り変わる際、古来からの中華思想（世界の中心は中国にあると云う基層的思想）が、蛮夷である施政者の政変を伴っても受け継がれ、これを華夷変態の変化とする経緯から、そのまま朝鮮半島に浸透し、朝鮮においても、中国の『柵封』にもかかわらず、自ら『小中華』と称し、日本に対して基層的な優越性を自負していた。このため儒者の集団である朝鮮通信使においては、葬礼においても儒教的に改めるよう、働きかけていくのが儒者としての使命のように感じていたらしい。

けれども、仏教も然りであるが、日本の習俗性、特に日常の信仰に際しては、民俗の基層的な観念であり、儒教に際しても、そこから宗教性を除いてこれを『儒学』として取り入れていくことになる。

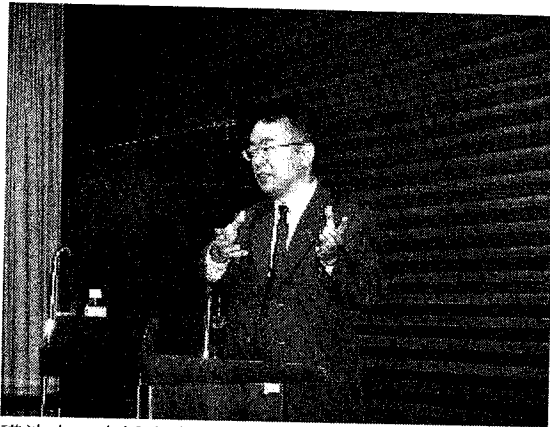
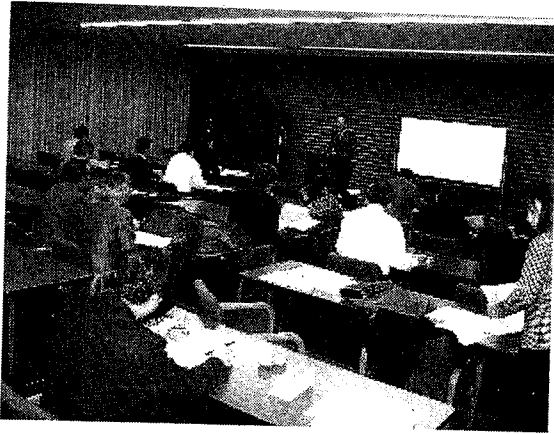
朝鮮通信使が、我が国の葬礼に対して、一番未開さを感じたのが、『挙哀（こあい）の欠落』で、これは、死者に対して泣くこと（哭・慟哭など）が少ないのを指摘していた。

このような経緯の中から、林 羅山の二代目といわれている林 鷲峰（がほう）などは、仏教徒である母のなど、自家の葬儀を無理やり儒教的に行い、これを浸透させようと試みている。

このときの経緯やそれまでのまとめが『泣血余滴（るいけつよてき）』『後喪日録（こうそうひろく）』等の著作となり後の葬礼に際しても影響を与えていくことになる。

これらの著作では基本的に儒教的な礼式の普遍性が確信され、『文公家礼（ぶんこうからい／朱子）』に則った礼式の構想と実践が記述されている。

これらの解説を、高橋先生の論文「近世初期の儒教と『礼』 — 林家塾における釈菜礼（せきさいれい）の成立を中心として —」（『国家と宗教』）を元にお話しされました。



講演中の高橋先生

■ 12月懇談会・忘年懇親会 平成14年12月20日(金) 東京文化会館 小会議室

テーマ 『インドネシア バリ島 葬送文化視察報告』(会員有志参加)

会員参加者 (敬称略・順不同)

小谷みどり	第一生命経済研究所 副主任研究員
和田恵助	株式会社 和田 社長
杉山昌司	建築家
杉浦昌則	株式会社セレマ 社長
浅井秀明	株式会社 出雲殿 専務 奥様と娘さんが現地参加
松江英寿	有限会社 松江葬儀社 専務 青森県
二村祐輔	株式会社 日本葬祭アカデミー 取締役
その他	一般参加者
小林英里佳さん	駿台ホテル・トラベル学院 学生
増田 藍さん	駿台ホテル・トラベル学院 学生
中下大樹 氏	日本葬祭アカデミー 研修生

◆ 行程

11月3日

14:00 成田空港 集合・・特別待合室にて行程等レクチャー  
16:05 日本航空 729 便にて出発  
22:25 バリ デンパサール空港到着・入国審査の後、市内サヒド・ラヤ・ホテルへ

11月4日

09:00 ホテル出発・・  
10:30 ブキッ・ジャンブル(棚田)を経て、バリヒンズーの総本山『ブサキ寺院』  
12:00 キンタマーニ高原でランチ  
14:00 トゥルニャン村で風葬場所を見学  
17:30 ホテル着。一端、ホテルにて休憩/民族衣装に着替えなど  
18:30 ホテルからデンパサール市内の『ジャガト・ナタ寺院』へ  
『新月の儀式』に参加 その後、儀式を切り上げて ホテルへ

11月5日

08:45 ホテル出発  
09:30 バトゥブラン村のバロン・ダンス鑑賞(悪魔払いのダンス。かつて墓地で踊られていた。)  
10:30 テガラランの絶景を抜け、グヌン・カウイ到着(12世紀の王族の墓)  
12:30 ウブドのベベツ・ブンギルで田園を見ながらインドネシア料理のランチ  
ウブド市内散策・プリ・ルキサン美術館、プリ・サレン・アグン(王族の家)など見学  
16:00 ウブド出発。  
17:30 ジンバランの『ウルワトゥ寺院』見学(岸壁に立つ寺院)  
18:00 寺院境内で夕陽と波音をバックに『ケチャ・ダンス』鑑賞  
20:00 ホテル帰着。

11月6日

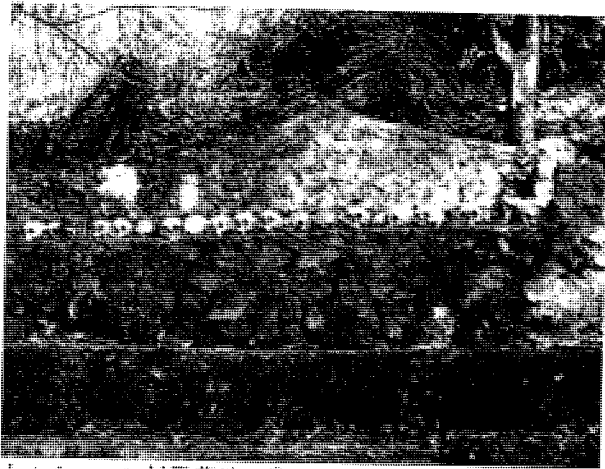
09:30 ホテル出発 /デンパサール郊外の『火葬式(ガベン)』見学  
故人:イワヤン・ピヤウン・コシマンさん享年65歳 11/3 市内の病院で逝去  
家庭環境は中流より下 火葬は南中時以後 12:30 ごろから始まった。  
14:30 ホテル帰着。それぞれレイト・チェックアウトの部屋で休憩・シャワーなど。  
19:30 JTBの送迎車到着。  
19:45 空港へ向け出発 出国手続き後日本航空720便に搭乗 23:50 発。

11月7日 07:25 成田着 解散

上記の行程に係わるデジカメ映像をビデオプロジェクターにて放映・解説。  
出席者からの質疑応答を行った。



トゥルニャン村風葬地 ①



トゥルニャン村風葬地 ①

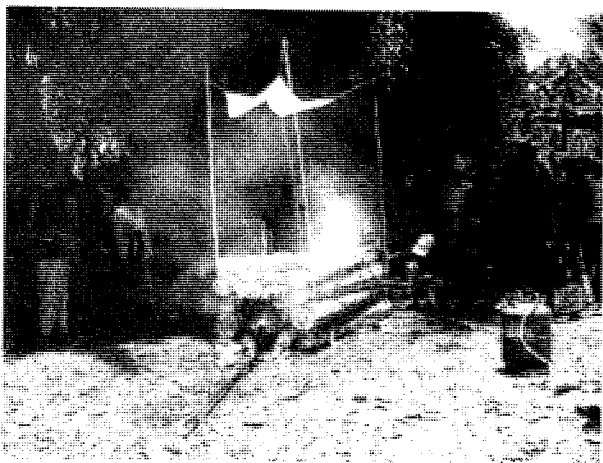


バリの葬式①





バリの葬式②



バリの葬式② 火葬



バリの葬式③ 葬列

■忘年懇親会

上野広小路鈴木本ビルの高田屋で20時より開催。  
（株）のうえ 儀礼文化研究所 副所長 河上文久氏の乾杯発声にて、  
18名の出席者により楽しく始まった。



## テーマ「平成15年度(4月より)の活動テーマ」

事務局：来年度の複線的なテーマを『臨終行儀』を踏まえた日本のターミナル・ケアの歴史、実態、問題点、将来的検証を行ないたいとのたたき台より、参加各位から、下記のような提言が寄せられた。

天野：かねてから提案していた葬送習俗における『衣食住』をテーマにしてはどうか。またそれらに関する地域慣例など検証することが望まれる。葬儀に関係した言葉も同じ行いに対して、地方色がある。テーマ的には『衣食住からみた葬送文化』と云うことだ。

勝山：世界的な葬祭環境の変化の中で傾向となっていることに、社会心理からみた葬送儀礼やその前段にある死また癒しの問題などが取り上げられるようになってきている。そのような状況で、日本の葬祭業界の取り組みは、きわめて形而上の面が強い。これらの反省から、テーマとしては、『新しい葬儀社、または葬祭業としての取り組み』を検証して、日本の葬送儀礼に対する周辺対応を検証したい。

杉山：世相を反映して各種の事件事故などの例から、いわゆる自然死以外の死因傾向が増えている。これらは、世帯環境との連動もあり一般の人たちが日常的に直面することも多い。けれども、その取り扱いについては、検死状況など医学面のみならず、遺族に対する配慮など心理面においても、これと云ったケアがなされていないのが現状。そこで、『自然死以外の死の遭遇に対して、社会的な対応の問題点』などをテーマにしてみたい。なぜなら、そこを基点に葬祭と云う儀礼が派生するから。

溝落：葬送に関しては、一般生活者の視点が置き去りにされている。現状の葬送儀礼、葬儀施工についてのクレームなどもそのような観点が原因のことも多い。葬祭ディレクター制度にしても、技能を中心とする技術志向で、そこには携るスタッフなどの資質が問われていない。また宗教界においても同じような問題点が重複して内包されている。これらの観点から、生活者視点から見た『葬送の変化とその現代的態様』を検証する必要があるのではないかと。

杉浦：同様に社会現象としての葬送の多様化、これは形式や進行のみならず、精神的な葬儀の受け止め方にしても、多種の多様化現象がみられる。学会としてはこれまでの葬送文化とすり合わせながら、『警鐘を打つべく切り口から現代社会の葬送の位置づけ』を考えてみたい。

小口：それらを踏まえて、葬送の歴史や習俗の変遷から『近未来の葬送トレンド』を導き出すことが出来ないだろうか。

勝山：自社のキャッチコピーとして、『不安を安心に！』と云う行いをさせている。そこにはその行いについての解説や説明が必要である。これがないままにことを進めるのが、サービスではないと考えるが、解説や説明の理解度に問題があるような気がする。

二村：不安というのは、私も消費者サイドから多く耳にすることで、それは三つの要素が絡み合っていると思う。一つは初期対応に対する実務、心理面からの『不明』と云うことで、つまり最初にどう対応してよいかわからない、ということだ。次に葬儀社の支払いに対する『不満』。そして、お布施や戒名に対する『不信』がからまって、不安を表出させているのが現代的な葬送施行に対する生活者の思いである。また、説明・解説に関しても、これまで日本人が持っていた『暗黙の了解』、『共通の意識』と云う基盤が崩壊しつつある中で、葬送文化を踏まえた上での霊魂観や死生観の日本的認識、また基層文化に触れる感覚を啓発し、再認識させていく必要がせまられていると思う。

三橋：生活者から見た葬送の意味や意義についてヒヤリングなどを、学会として実施することで、年代別、生活属性別などの観点から葬祭意識のサンプル抽出に取り組んでいくことも活動テーマになりうると思う。

野崎：火葬場経営、あるいは寺院の観点から、特に檀家制度に関しても社会的な観念崩壊が見られる。それらの事例を情報として収集する必要があるように思う。

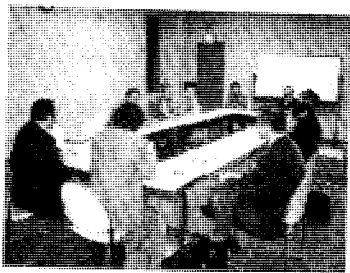
木村：火葬場に関しても、まだまだその設置に際していろいろな問題がある。これらはあまり一般的な話題として取り上げられることは少ないが、自治体との関係における問題点や業務委託に関する実務的な問題も多いので、学会として検証しておく必要があるのではないかと。特に火葬行政だけでなく葬送進行全般における政治とのからみなども、これまでの歴史上あったわけで、これらが現代的な社会病理の一因にも関係する面を指摘できると思う。

浅香：葬送の文化は死から火葬場、埋葬までと非常に社会的に考えていかねばならない検証事項が多岐にわたってある。その中から学会としての『アンチ・テーゼ』を発していきたい。できれば、それを過去から未来へ時間軸を中心に、近未来に際して包括的に提言していきたい。

天野：会員の葬祭実務関連者または企業に対して、実務的な自社業務、地域特性などに関するアンケート

調査なども実施したい。それにより全国の葬祭文化における共通点や相違点が浮き彫りにされ、葬送文化を研究する人たちへのデータ提供が図れると思う。

・・・このように年間、月間、複線的、表出的な各種研究および活動に関するテーマが提言された。



学士・修士による研究課題プレゼンテーション

当学会代表理事の浅香先生より推薦

日本大学理工学部建築科四年生 外角精一郎氏

テーマ「横須賀市域における火葬場の都市史的研究」

三浦半島の穏やかな丘陵が、浦賀水道に落ち込むところに横須賀がある。横須賀は中世以来、漁村として名がしたが、近代に入って帝国海軍の成立とともに、「海軍の町」として発展した。現在も駐留米軍の基地や海上自衛隊の駐屯地として、その系譜を保っている。

横須賀の合併・分離という自治体の変遷の中で、現在の横須賀市域となった市町村の明治以降の火葬場の所在を悉皆調査で追ったのが本論文である。

研究方法は、現地調査・文献調査・資料収集を行い検討・考慮した。また、文献資料の上では、浅香勝輔先生（前・日本大学教授）が所属されている「火葬場敷地願 第十五大区三小区」と題された和とじの薄い冊子を借りて、そこから諸地点を探し出した。

なぜ、この研究・調査をしたかということ、大学1年に歴史を学んでました。その際、浅香先生に教わりそれ以来、この分野に興味を持ち、論文を書こうと思った。しかし、就職はこの道ではない。

### 市域変遷年表

明治22年	3月31日	市制・町村制が施行 横須賀16町と逸見村が横須賀町となる。公郷村・不入斗村・佐野村・中里村・深田村が豊島村となる。
明治36年	10月1日	豊島村が豊島町となる
明治39年	12月15日	横須賀町と豊島村が合併し横須賀町となる。
明治40年	2月15日	横須賀町が市制施行により横須賀市となる。
昭和8年	2月15日	衣笠村が横須賀市に合併
昭和8年	4月1日	田浦町が横須賀市に合併
昭和12年	4月1日	久里浜村が横須賀市に合併
昭和18年	4月1日	浦賀町・北下浦村・武山村・大楠町・長井町・逗子町が横須賀市に合併
昭和25年	7月1日	逗子町が横須賀市から分離独立

### 横須賀市における火葬場の変遷

#### 1、既に無くなった火葬場

- (1) 浦郷火葬場 旧田浦町に浦郷火葬場があった。昭和50年代半ばまで操業したが老朽化のため供用廃止された。
- (2) 逸見火葬場 昭和4年に坂本火葬場が改築竣工と同時に廃止された。
- (3) 公郷火葬場 明治13年頃の築造で、豊島村の村有共同火葬場であった。
- (4) 野比火葬場 臨時的火葬場。浄土真宗高御蔵王明山最宝寺の境内に火葬場を作った。

#### 2、火葬場跡地の追跡

浦賀町では西久比里・川間・大坂（高坂の誤りと判定する）・赤池の4ヶ所、大津村では貞昌寺谷、鴨居村では北方、走水村では伊勢町である。

#### 3、現在も存続している火葬場

- (1) 浦賀火葬場 設備面に問題がある火葬場
- (2) 中央斎場 旧横須賀町立の共同火葬場として明治22年頃建設された。横須賀市で初めての近代設備を有した火葬場で、葬祭場も併設している。

\* 中央斎場・浦賀火葬場の稼働状況（平成13年度）はホームページ参照

## 質疑応答

市町村などの合併・分離にともない、火葬場も新しくなっていく。

浦賀火葬場はいまだに煙突があり、設備面で問題がある。横須賀は人口42万ほどである。

横須賀市側は古い火葬場を廃止したいという意向だが、地元住民が廃止を反対している。昔とは、住民と市の立場が逆になっている。

休みは友引である。月に6日程。高炉をすべて稼働させず、高炉数の半分ほどの稼働が通常で、住民との取り決めのようこともある。

横須賀の中央部は中央斎場（坂本）である。

横須賀の葬祭業者はそれぞれ斎場をもっている。中央斎場のみで葬儀を行うわけではない。

浦郷には現在、野焼きの跡は見当たらない。

逸見火葬場は安針塚にあった。

海軍の結核病院であったため、100%火葬であった。昭和42年まで、使っていた。

返子市では昔から、誠行社を使用していた。



研究発表中の外角精一郎氏



テーマ①「最新葬祭情報」 講師：二村祐輔氏  
日本葬祭アカデミー教務研究室 / 有限会社セピア 代表取締役  
日本葬送文化学会事務局長

最近の葬祭に対する一般消費者の視点から、いろいろな対応が発生しています。特定非営利活動法人 日本葬祭情報管理協議会の意図する「葬祭情報」の管理とは何か？またそのような機構の社会的意味や役割と葬祭業界の体質変化など。合わせて、葬祭業界における付帯的企業の変化や最新情報などを事務局担当の立場からプレゼンした。

#### ◆生花業界の動向と進出について

背景 1、葬儀単価ダウンが風潮となった → 利益減を業者へのしめつけ強化

2、23区営、東海1丁目に火葬場来年にもオープン

そこで、生花組合（東京）600社の花屋が加盟はこのように考えた。火葬場の運営を請負いたい。葬儀の申し込みもどんどん入ると思っていた。（これは勘違いである）葬儀業へ進出したいと思っているが、その一方で葬儀社から仕事が入らなくなるのは困る。町の花屋が葬儀の受付所にはならないか？

組合内部の結束が大切だ。しかし、組合内では、話がなかなかまとまらない。来年の1月大田区に公営の火葬場、葬祭式場ができた場合、今まで葬祭業でない例えば、生花業（花屋さん）が葬祭業に名乗りを上げた際、消費者に大きなインパクトになる。万が一が起きた場合、今まで葬儀社に相談に行くところを、とりあえず、町の近所の花屋さんに行くというような感覚になるのではないか。

#### ◆個人情報保護と葬祭情報の管理

葬祭に関して、消費者が不安に思うことは、亡くなられた方の個人情報や喪主になる方の個人情報の取扱いに対して不安が高まってきている。直接、葬祭業社がしていることではないのですが、例えば、ギフト関係や霊園の営業などから営業があることで、葬祭業者が情報を流しているのではないかとされているようだ。葬儀をする上で、個人情報が拡散していくのではないかと、消費者は思うのである。公文書からでもいろいろな情報を入手できる。（本籍、病歴、死亡日時など）

役所の手続きなどはほとんどは、葬儀社のサービスの一環であるので、特に取扱いを重要視しなければならないのではないかと。

昨今の葬祭環境から言えば、地域と人脈が希薄な中で葬祭業を営むようになってきたことによって、初対面の葬儀社（中には人材派遣の者かもしれない）に大切な公文書等（個人情報が盛り込まれているもの）を渡してしまう。

葬祭情報というのは、担当者が話を聞きながら打ち合わせをするのですから、家庭内部的なことまでも、知り得ることができる。

非営利の活動法人を作り、この葬祭業界における個人のプライバシーが存在しているということの意識付けや、モラルの向上にむけて活動をするNPOを設立するために2月に申請しているので、5月半ばには認証されるであろう。日本葬祭情報管理協議会という名称。

日本葬祭情報管理協議会の役割においては、葬祭企業の方々に個人のプライバシーをどう位置づけ、どう守る事を確立させていくか、というモラル認識をしてもらうということと、実務的に企業が知りえた情報をどう処理していくか、保管をしていくかということが問題になるので、P・I・P（プライベート・インフォメーション・プロテクト）の認証を企業に付与していくことで、個人情報を守る。

企業の現状報告（社内での打ち合わせ内容書、死亡診断書等をどのように取扱いされているか、保管の仕方）をしてもらい、調査を行い、葬祭業務の管理責任者という形で認証し、また責任者という事業所を認証していきたい。

葬祭企業そのものも他社との差別化をする上で、一番の前提になるのではないかと。（プライバシーの保護）そして、社内でのモラル向上にもなる。

#### 質疑応答

##### \*実際に何か問題のような、事件が起こったことはあるのですか？

葬儀後のセールに関して、疑心暗鬼を生じることになる。個人そのものの尊厳が損なわれるのではないかと。表立った形では（事件的な事）起きていないと思うが、そういうことを未然に防ぐ意味でも、先に先手を打つ

てモラルを高めていったらどうかということが投げかけになっている。

\*その説明会・講習は葬儀会社を対象に行うのですか？

葬祭企業（葬祭関連企業）に対して、資格認定を行うことが大きな目的になっている。個人情報を取り扱う企業という部分で、該当してくる。一般の消費者に対しての投げかけで、葬祭企業の大きな看板にもなるのではないのでしょうか？

\*葬儀社から本来漏れるはずがないということが大前提ですが、今回の前提はそうではないということですが、ならば既存の制度の一つに取り入れるようにして、やる事やるべき事があるのではないかと思う。

業界を上げて技術的向上（メンタルな部分含）を図るといふこともありますが、これがNPOであるといふのは一般の方の意見を聞くという大きな受け皿をもちながらのNPOであって、このNPOを構成しているのが全部が全部、葬祭企業であるというのではなくて、むしろ一般の方々の中でどういうことか不安を抱えているかということ協賛していくことが前提になっている。一般の方々を持つ意識は計報を出してもらいたくないとか、会葬礼状に住所を入れてもらいたくないということにも出てきている。そういった一般の目線に合わせて、葬祭業者は考えていかなくてはならないのではないか。

\*モラルなのか企業としての資格制度なのか？とりあえず学会としての話ではないですよ？

この学会も含めて、一般の方も含めて、葬祭業界に対する動きが出ていますよ、という報告である。

## ■テーマ②「新年度の活動計画についての懇談」

1月の拡大理事会及び懇談会において提言された年間テーマを再検討して、4月からの年間テーマ決定を行いました。

### 拡大理事会での提言例

- ・ 葬送文化に関わる「衣・食・住」
- ・ 全国の葬祭業、仏教界等への各種アンケート調査
- ・ 現代の『臨終行儀』に関わる徹底検証
- ・ 自然死以外の社会的対応や取組みに關しての調査、提言
- ・ 「人と地球」を元に、葬送形態や主観の現状変化の調査報告
- ・ 近未来の葬送トレンド
- ・ 秋の研修旅行先について（東北 仙台周辺 韓国 プサン 済洲島 その他インドや中国）

葬儀というのは、いろいろな文化が混ざっている。葬送文化にかかわる『衣・食・住』は多いのではないか。一柳さんなどの100年史などで勉強していく。古い良いことを知り、研究し、今を知る。→温故知新「住」の部分では住まいはもちろん、住まい以外（斎場等）でも調べてみたい。

「病院における死」というのが今年度の年間テーマであった。

葬送文化にかかわる『衣・食・住』を漠然にするのではなく、衣食住の過去、未来のような感じで細かく考えていってはどうだろうか。

4月の総会までには提案していきたい。というのが事務局の考えです。年間テーマは理事会で決定する。

「衣」の部分では、50年前は紫色でした。最近ではピンクの着物を使うようになってきた。（経帷子）そういうのが何時頃から、なってきたのかを考える。

その時代の「衣・食・住」の文化について、皆さんの知っていることを調べてもらい、文化を見ていく。

具体的な内容については、理事会で、まとめていく。しかし、理事の中だけで決めてしまうと偏るので、皆様からの意見を聞いていきたい。

学会に代わったということで、何をどう変えていくかを考えていかなければならないのではないか。

“自然死”というのは、いろいろなケースがあると思うが、その事実を見て、葬儀機能の癒すという部分では、いかなる機能があるのか。

アンケートと言うの、内容が難しいのではないか。質問項目をかなり厳密にやらないと、統計的な意味を持たなくなる。アンケートに答えてもらう方々の人選もある。

地方の生活文化の中にある葬送の事例を調べてもらうと面白いものが結構ある。一つの事例でいうと、長野県に“灰寄せ”というのがある。今は飲み食いの場所が“灰寄せ”というようになってしまっているが、実際は違って、火葬した後に残った灰を集めて骨瓶に入れることである。そう考えると、その“灰寄せ”というのは火葬が始まる前からのことである。福井でも“灰寄せ”を行うがそこでは、亡くなった人の遺品を焼いてそれをお墓に納め、残った灰を仏壇の香炉に入れて先祖の仲間入りをする。そして、“灰寄せ勤行”というお経をあける。沖縄では香炉は大きく、位牌は小さくということがある。白木の位牌や遺品を焼いて香炉に入れて先祖の仲間入りということもあり、それも“灰寄せ”に通ずるものがある。そういうふうな事例を調べる。日本の文化というのは、地方によって違うが、もとは同じであるということが多いのではないか。



一年間のテーマについては、絞って行うのか、それとも間口を広げて調べるのか。それによっては、勉強、研究にせよ、変わるのではないか。

この産業に関わる人にしか知らないことを、絞って“会”として行ったらどうなのか？

葬送文化の「衣・食・住」であると地域性を否定してはならないことであるが、大きく分けての地域性でよいのだが、生活文化の中で成立してきたような事を地域地域でいろいろ比べていくのも勉強になるのではないか。例えば、「関西は分骨（3寸）をするが、なぜそうするのか」などという細かい部分が皆様の興味のあるところではないか。

それぞれの皆様もっている、いろいろな疑問を解消していけるような、学会の機能にしていきたい。各自葬送文化をどう感じとっていくか、どう味わっていくかというようなことでやっていきたい。

喧々諤々の発表などをする学会という領域まで達していないので、現時点では本学会としては「いろいろな葬送文化を見ていく」というスタンスが良いような気がする。

■日本葬送文化学会 第二回 「定例総会」

平成15年4月26日 午後6時30分～ 東京文化会館4階大ホール

「平成15年度定時総会」 報告

総会次第

会長挨拶 会長 天野 勲 氏

議長選出・・・(株)和田 和田篤泰 氏 (賛成多数)・・・承認

開会・・・司会 大成祭典(株) 勝山宏則 氏

議案1・・・平成14年度活動報告・・・・・・・・(司会)より・・・(賛成多数)・・・承認

議案2・・・平成14年度会計報告・・・・・・・・(司会)より・・・(賛成多数)・・・承認

議案3・・・平成15年度活動予定に関する事項・・・(司会)より・・・(賛成多数)・・・承認

未定・変更に関しては常任理事会一任・・・・・・・・(賛成多数)・・・承認

議案4・・・平成15年度 収支予算に関する事項・・・(司会)より・・・(賛成多数)・・・承認

細部の変更に関しては常任理事会一任・・・・・・・・(賛成多数)・・・承認

議案5・・・役員改選・人事に関する事項

平成15年4月10日東京文化会館応接室での常任理事会において合議の上

1、常任理事退任・・・杉山昌司氏(監査) 稲村吉彦氏(監査)

藤井 高氏(会計) 岩崎孝一氏

2、以下役員留任

会 長 天野 勲 氏

浅香勝輔 氏(千葉県 前日本大学)・・・常任理事代表

阿島武志 氏(栃木県 (有)一二三)・・・WEB委員

勝山宏則 氏(東京都 (株)大成祭典)・・・WEB委員・会報編集委員

杉浦昌則 氏(千葉県 (株)セレマ)・・・会報編集委員

大杉実生 氏(東京都 (株)中央セレモニー)・・・会計委員

二村祐輔 氏(東京都 (有)セピア)・・・事務局長

菅原裕典 氏(宮城県 (株)すがわら葬儀社)・・・東日本担当

下村 侃 氏(岡山県 (株)いのうえ)・・・西日本担当

顧問 八木澤壮一氏(東京都 共立女子大学)・・・顧問・永久会員

山床節子 氏(兵庫県 ジャーナリスト)・・・顧問

理事 柴田先生(ルーテル学院大学名誉教授)

田中久文先生(日本大学 教授)

谷 荘吉先生(病院院長)

3、新『常任理事』並び『理事』推薦

常任理事 推薦(順不同) 荒木由光 氏 (有)アラキ 監査

三橋初枝 氏 (株)薫風社

野崎二三子氏 (株)誠行社 監査

中島 章 氏 (株)セレモ・ワールド)

原 敏之 氏 (株)中原屋

理 事 推薦(順不同) 山田慎也 氏 (国立歴史民俗博物館)

上村敏文 氏 (ルーテル学院大学)・以上・(賛成多数)・・・承認

議案6・・・その他事項 予定議案・・・事務局運営についての提案・・・(司会)より

現状の事務局運営について、「事務局長」が主導的な役割を果たしていくことに対して懸念する会員もおられますので今後、現状の事務局改善と各担当専任者への運営委譲をかんがみて、受け渡しのための事前準備として、運営分担を「独立」したかたちで進めていきたいという意見が出ました。

そのため、下記のように活動運営をそれぞれ分担し、今後事務局機能は、それぞれの委員会から要請された指定の文書作成や印刷・それらの内容・郵送など事務作業のみを行い、事務局自体の独自の判断や示唆、事前の働きかけ、渉外事項などを一切行わないという前提で進めます。

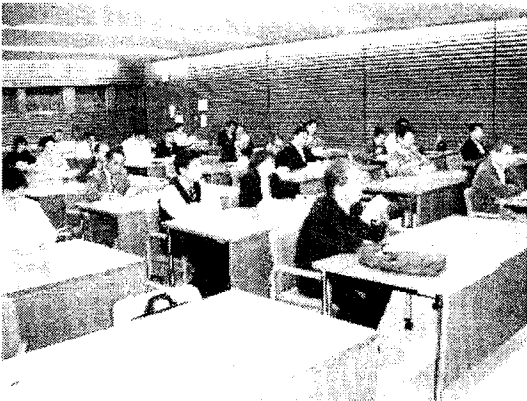
○例会運営委員会の設置と人選・・・毎月の例会(定例会・懇談会など)の準備や予定構築、講師折衝例会 記録など運営に関する活動を受け持つ。また本年はテーマにもとづいた『アンケート調査』などを行なう予定ですので、その構築と準備。

○野外研修委員会の設置と人選・・・恒例の野外研修の行き先を検討して、実施に向けた事前準備や現地との折衝・渉外を行う。

- WEB 委員会の拡充と人選・・・毎回の活動に関してホームページ上の記載・運営管理を行なう。この報告が今後は毎回例会案内に添付される。
- 会報編集委員会の拡充と人選・・・年1回発行の会報誌製作のための委員会。原稿調達や校正・編集に関して独自の運営を図っていく。  
これらの詳細活動や運営・また人選に関しては常任理事会の権限にてこれを行う・・・(賛成多数)・・・承認  
各委員会編成について、常任理事会一任する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(賛成多数)・・・承認  
その他、提議事項・・・なし
- 閉 会・・・以上の次第で、和田議長のもと、定時総会を終了いたしました。



総会議長の和田氏



司会進行の勝山氏

テーマ「葬送の衣食住・海外編 シンガポールとニュージーランドの場合」

講師：小谷みどり氏

講師紹介 第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部副主任研究員。大阪府生まれ。奈良女子大大学院修士課程修了（生活設計論・ターミナルライフプランニング・余暇論）余暇生活開発士。93年ライフデザイン研究所（現 第一生命経済研究所）入社。東京都在住。人生をどう締めくくるかを生活設計の視点からとらえ、「ターミナルライフプランニング」として提唱する。日本葬送文化学会会員

編・著書・「お墓から覗いたニッポン人」（出版 ライフデザイン研究所）  
「世紀末くらしのアプローチ」 「葬儀白書」（出版 鎌倉新書）  
「葬儀屋さんガイド」（出版 婦人生活社） 「お葬式のお値段」（出版 PHP 研究所）  
「働く親の子育てヘルプブック」共訳・共編（出版 ベネッセコーポレーション）  
「変わるお葬式、消えるお墓」一最後まで自分らしく（出版 岩波書店）  
「おとむらい新世紀」（出版 東京新聞出版局） 他多数。

### 関心領域について

生活設計論→結婚費用、子供の養育費、出産費などを考えること。また、倒産した際、何を準備しておけばよいか。例えば雇用保険、資格をとって倒産しても他の会社に転職できる能力を持っておく、などが生活設計論（ライフデザイン）である。

人が死ぬというリスクが、今までの生活設計の視点には入っていなかった。自分の人生をどう締めくくるのかを生活設計で、考えてほしいという視点で研究している。

告知の問題、ホスピス、などを元気な時から考える研究をしている。

葬送の観点で日本の衣・食・住を勉強しているわけではないので知らないのですが、私自身なじみのある部分でしたらと思シシンガポールとニュージーランドを選んだ。

### シンガポールの場合

2000年に1年間、会社を休職してホスピスの調査、研究に行っていた。ホスピスケアをして、亡くなる方は8割いた。シンガポールは他民族国家で、中華系、マレー系、インド系。それぞれによって、宗教が違うので、葬儀のやり方が変わってくる。

マレー系は、ほぼ100%イスラム教徒である。イスラム教徒同士でないと、結婚できない。

中華系はお年寄りには道教を信じ、中高年は仏教を信じている。エリート層はキリスト教を信じている。

インド系の人達は、ヒンズー教もキリスト教もいる。

それぞれの宗教による葬儀をあげられるようだ。

中華系の方の葬儀は、普段着で参列される。ジーパンにTシャツが一般的である。遺族の方は基本的には上は白、下は黒である。若い女性であると、白いタンクトップの方もいる。

道教の場合に多いが、亡くなった方との関係を表すための札を右肩につけている。

広東省出身の方は、喪主は麻袋を目だけ出しかぶる。他の子供達はコックさんのような帽子をかぶる。

HDBと呼ばれる公団住宅に住まれる方が多い。1Fが“ボイドデッキ”と呼ばれる、スペースになっている。

イメージとしては、1Fの地面のところ鉄柱の柱がたくさん立っていて、オープンエアになっている。そこで、結婚式や葬式をする。ほとんどの方は自分の住んでいる団地のオープンスペースのボイドデッキで、葬儀を行う。鉄柱（白い柱）がたくさん立っているので、葬儀がやりにくい。ボイドデッキでやらない場合は、コミュニティーセンターで行い、住宅の前の道路にテントを張って葬儀をしている。ほとんどの方は地元の新聞（ストリートタイムズ）に訃報を出す。（名前も住所も記載する）

“ボイドデッキ”で葬儀を行うのは、中華系の方々だけである。インド系とイスラム教の方は亡くなると遺体をすぐ処理する。

シンガポールは、病院で死亡診断書が出されたら、すぐ火葬・土葬して良いことになっている。イスラム教は肉体はアラーの神からの借り物なので、亡くなったすぐに返すという考えがある。（24時間以内）準備が整え次第、すぐに行く。セレモニーらしいセレモニーは行わない。

イスラム教徒は必ず土葬である。墓地に女性、子供はいかない、男のみである。これは慣習である。（泣くと魂がああの世に行かないという考えがあるらしい）インド系もそうで、火葬すると散骨するのが一般である。

マレー系の方は土葬すると言ったが、今はシンガポールはSARSが流行っていて、亡くなった方は15人ほどいる。SARSで亡くなった場合は、必ず火葬にするという法律ができた。

シンガポールの場合、国のシステム的には思想統一がある。国が決めたことは、絶対である。反対の余地なし。

SARSで亡くなった方の葬儀に行く時は、白マスクに白衣を遺族も含め全員着ている。中華系は火葬でも、土葬でもどちらでも良い。前述で話したようにポイドデッキで葬儀をしている。1週間も遺体を安置している。

その葬儀の場で、賭けマージャンをすることが、認められている。地元の新聞を見て、集まる。そのマージャンをしている方々は他人である。しかし、その賭けマージャンをしている人達は24時間誰かが寝ずの番をしなければならないので、その遺体の見守りをすることも兼ねている。よって、遺族の方々は知らない人でもきちんと接待している。

ポイドデッキでは、火を使っても良い。死者に送るということで、出棺の前にポイドデッキの所で燃やす。(ブラウスや帽子、歯磨きセットなど)墓地で燃やす場合もあるが、今は芝生なので、火気厳禁になっている。よって、最近はポイドデッキで燃やす。

シンガポール人は模型の家を燃やすことが好きである。なぜかと言えば、国民のほとんどが団地に住んでいるので、あの世に行ったら、一戸建ての家に住めるようにと模型を燃やす。また車の税金が高いので、高価なものなのという感覚があり、車のおもちゃ(ベンツなど)を燃やすことがある。今は、パソコンを燃やすようである。その時々によって、価値が変わり、燃やすものも変わるようである。

霊柩車は荷台がガラス張りで、中の棺が丸見えの構造になっている。車の正面には大きな遺影が掲げられる。遺族は霊柩車の後ろについて歩く。

ポイドデッキではジュースくらいである。会葬者から送られた毛布を飾る。

宗教色のある場合は、宗教者がポイドデッキまでやってくる。キリスト教などの場合は、賛美歌をそこで歌う。祭壇などは無く、シンガポールは暑い国なので、中華系の方はほぼ100%エンパーミングをしている。女性の場合は口に真珠を噛ませる習慣がある。(男性にはない)お金をかけないで行うのが一般である。

### ニュージーランドの場合

イギリスからの移民の方が多い。宗教を信じている人が減ってきている。行きつけている教会もない。

無宗教で葬儀を行うことが一般的である。歌をうたう、その歌詞を参列者に配る。(式次第)いろんな曲をかけるが、アメージンググレイスをかけることが多い。よって、音響設備が整っている。

裕福な方が少ないので、ほとんどスーツで参列する方は少ない。もちろん亡くなった方のお付き合いしている方々によるが・・・。ジーボンにTシャツ姿が多い。

家で葬儀をする方が多い。祭壇は一切無い。棺を安置して、両脇に花を置くくらいである。キリストの場合は十字架を置くだけで、ホールというのが一般的である。

火葬率が高い。(7・8割)コストの面からも火葬を選ぶ方が多くなってきている。

遺族は火葬場に付いて行かない。会葬者も葬儀会館に残る。少しお金がある方は、遺族の負担でランチほどのようなものを参列者に振舞うケース(葬儀社が用意する)がある。それは、裕福な方だけで、一般的には遺体だけが、火葬、墓地に向かい、遺族などは家に帰られる。(火葬場に一緒に遺族は行かない)

後日、又はその日の夕方に親しい方々で、食事会をすることもある。

土葬については、細かい規定があるが、火葬した骨は、害がないので、どう処分しても良いことになっている。散骨で、パウダー状にしてあれば、どこに散骨しても、平気である。(砂浜、ゴルフ場などもOK)それに対しての、反対は起こらない。

火葬場の遺族は付いて行かないので、火葬後パウダー状にされた遺骨はBOXに入れられ、葬儀社が後日火葬場に行ったついでに取りに行き郵送、宅配をする。何年も誰も取りに来ないBOXがいくつもある。

シンガポールもニュージーランドもしょっちゅうお墓参りに行く習慣が無い。シンガポールは清明祭にお墓参りする。一人一人が夫婦なので、“～家の墓”というのではない。亡くなった方のお墓参りに行く。亡くなった日より、誕生日、又は父の日、母の日に行く人が多い。ニュージーランドには日本のように、お墓参りの日というのではない。

### 質疑応答

\*葬儀の僧侶や神主のような方はいないのですか？

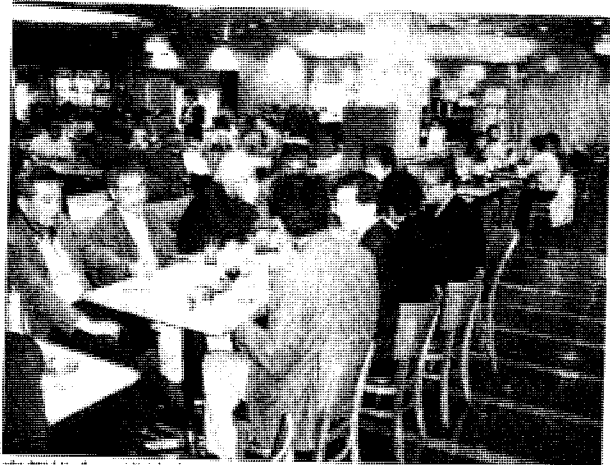
マレー系はイスラム教であるが、僧侶という人はいない。儀式を執り行う人はいない。

\*お寺はない？

火葬が終わったあ後、近所のヒンズー寺院で行う。遺族が何人かで立ち会ってお金をだして、お祈りをしてもらう。ヒンズー寺院にはお祈りしてくれる人がいる。菩提寺というのではない



講演中の小谷みどり氏



定例総会・講演会終了後の懇親会の様子

テーマ「死者とイエ」

佐渡島北部の葬儀における食・住・衣・人

講師 山田慎也（やまだ しんや）氏

講師略歴

1997年3月慶応義塾大学大学院社会学研究科博士課程修了 社会学博士（慶応義塾大学）

1997年4月文部省中核的機関研究員（国立民俗学博物館講師）を経て

1998年国立歴史民俗博物館民俗研究部助手となり今に至る。専攻は民俗学、文化人類学

## 1. はじめに

葬儀とはなんだろう。物理的な消滅といった単純なものではなく、様々のレベルの死が同時に進行している。

誰かが死んで存在がなくなっても、そのあと葬儀、お盆をやるということは、仏教的には仏になったというが、魂はなくなっても、死後にもいるような感じがする。また、死んだ人が所有していた財産は誰かが引き継ぐということも死に関連した現象である。つまり①物理的な死②先祖として扱われる③財産に引継ぎ手としての存在、これが、故人の存在である。これは、現在増えつつある無宗教式葬儀でも共通する。死者へ語りかけていたり、供え物をするということは、「死んでも存在しているという感じ」というのが前提である。「死とは消滅である」と言い切れないのが私達なのでしよう。

また、葬式の場所には社会的な意味があります。喪主が後継者であり、財産を受け取るという意味を示すということは広く知られています。（ロバート・エルツの研究にある）

## 2. 地域の概要

新潟県佐渡島（さどとう）北部は、南部の両津港から、3時間もかかる。

また、山が海まで迫っており、海際にしか住めない土地。1962年にやっと車の通る道ができた。

狭い土地なので人数制限をしなければ生活ができなくなるため、江戸時代より、43戸と戸数制限がされていた。つまり、分家は、認めないということである。

オオマイ、コマイ、サンニンイチニンと呼ばれる階級制度があり、仕事や取り分が決められていた。

しかし、三代さかのぼれば皆親類といわれる土地であり、婚姻などを通じて、身分が変わる機会があり、階級は恒久的なものではない。

## 3. 葬儀の過程

葬儀はオモシユイ、シユイが中心になって執行。

オモシユイ 人のやり取りがある家、仲介した人の五十年忌まで、嫁を出す側ももらう側の関係

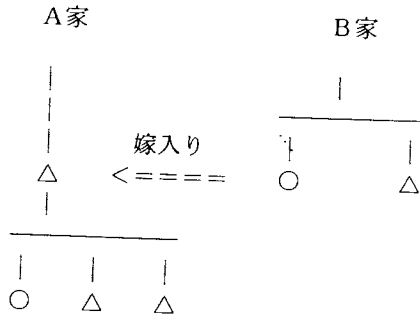
その、嫁が死ぬと縁が切れようがなくなるのでシユイになる。エンイは離婚などによって切れる可能性がある。生きてエンイ、死んでシユイ。この概念は昭和30年代まで続いていた。

ここの住民は、家の当主の名+地位で呼ばれ、個人名は記憶されない。

〇〇の婆ちゃんは、二代まえも三代まえも〇〇の婆ちゃんであり、名は意識されない。

直系に乗れない人、つまり、結婚しないで死んだ人は、尊敬されない。

「縁づかない」と呼ばれ代々の墓の隣に建立された、無縁の墓に入る。死んでもなお差別されつづける。



結婚しない女（離婚・出もどりを含む）はアバ（あばずれの意）、結婚しない男はオッサンと呼ばれ、傍系である。

ツギョウト 葬儀の連絡先をリストアップしていく、今後付き合いをしていく家を決めていく。  
単なる連絡係ではなく、社会的な意味がある。

ユーガン（湯灌） 現在は清拭のみ。この儀式に招待されるか、されないかも社会的地位の決定の場面である。米があまり採れない土地ゆえに米の重要性が非常に高い。150キロにも及ぶ米で団子つくるケースもある。畳をすべて同方向に敷き替え（流し敷き）、戸を全てはずす。

イロチョウ（香典張）の作成。

昭和40年代に町営の火葬場ができた。それまでは、地域地域で野焼きをしていた。

その頃は、薪の手配も仕事のひとつであった。

流し念仏。念仏を皆で合唱する。全員参加で共同体験をする。全員に送ってもらったという体験が重要であり、自分も皆に送ってもらいたいと感じるようになる。

施夜（ショヤ） 一般の参列者が来る。

#### 4. 葬儀の形式と法事

葬儀が法要として認識されている。このあたりは真言宗が多い。

ニカホウヨウ、シカホウヨウ 道具を2つ使う4つ使うの違い

ニカホ+セガキ シカホ+セガキ

葬儀も、年期法要もまったく同じ祭壇、形式にのっとり執り行われる。

家に死者を迎え入れ、また送り出すという儀式。

#### 5. 葬儀における食

米の重視 喪家の米でないといけない。団子はヒトガタである。

枕団子、飾り団子（串団子、盛り団子、前掛け餅、7つの餅、十三仏団子）、イノセキ団子、墓団子

葬儀の食事はメシヤド（飯宿）でおこなう。赤飯、あん餅、イゴネリ、煮しめが饗される。

食べないと、「ホトケをカケにする」を言って食べることを促される。（仏様が怪我をするの意）

供養とは、まさしく死者へ供え、養うこと。

花より団子というのは、仏は団子が好きだという意味とこの地域では認識されている。

ひたすら食べ物を供える。

3人の故人を祀る50年忌では、祭壇の前に4つのお膳が並ぶ。故人への3膳とご先祖への1膳である。

ご先祖ではなく、地蔵さまに差し上げるという説もある。地蔵に出さないと仏が食べ物を受け取れなくなるらしい。

#### 6. 葬儀における衣

シロの忌み言葉をイロという（柳田）

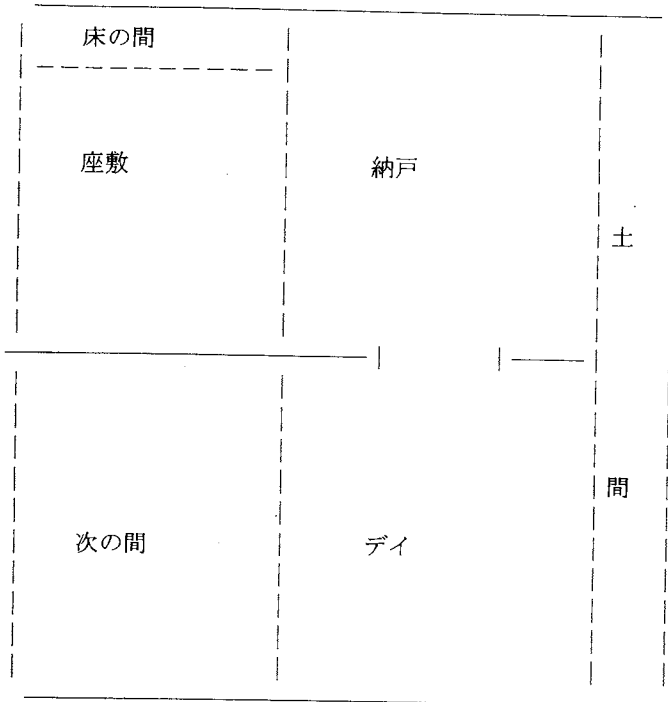
経帷子、幕、喪主夫婦のイロ帽子、基本的には素材は麻、第二次世界大戦後まで。

後に、さらしに代わる。

イロキ 参列者が着る イロ（喪服） 通常はイロ帽子



## 7. 葬儀における住



典型的な家の間取り、当主夫婦は、納戸に寝起きする。納戸には財産や種籾をしまう大切な部屋である。葬儀は座敷で行なう。納戸で生まれ、次の間で育ち、座敷で葬儀をし、最後は納戸の仏壇に収まる。

葬儀とは通過儀礼である。(ファーフィリップが100年以上前に提唱)  
ある地位から、別の地位へ移ることであり、そこでは、分離・過渡・統合が行なわれている。

分離過程 臨終から湯灌・寝室(納戸と次の間) 入れるのはオモシルイのみ。他の人は外側で礼拝

過渡過程 通夜から七日ジマイまで。座敷、床の間に祭壇、家が全て式場、生活空間が非日常の儀礼空間へ

統合過程 初七日の朝、納骨、位牌は仏壇へ。家を元に戻す

死者の分離・過渡・統合は、寝室・座敷・墓と空間的移動に対応。

## 8. 葬儀における人

香典 3千～5千円

中院(ちゅういん) 20万～30万円 シンルイとしての葬儀の負担金として重要

仏供米(ぶくまい) 3升以上

ジノバという家族会議のような場面で様々なことが決定されていく。

御布施は僧一人につき8万円、主導師は倍(16万円)

## 9. 葬儀を支える家

死者の処理には大量の米が必要。

## 10. 死の準備としての人生

### 物理的な処理

湯灌（寝室）＞ 葬儀（座敷）＞ 火葬（ランバ）＞ 七日ジマイ（座敷）＞ 墓

### 文化的な処理

枕経（寝室）＞ 戒名・引導（葬儀）＞ 位牌

### 社会的な処理

後継者の確定、シムルイ関係の確定

（ツギョウトの範囲、ジノバの席順、指名焼香の順序、香典やホドコシモノの量）  
社会階層の顕示と意識の再構成（法要の種類や輿の形態、施夜の餅の大きさなど）

## 11. 外在化する葬儀

農協の葬儀部門、火葬場の利用 儀礼の短縮、省力化 施夜（シヨヤ）料などの貨幣化  
内在的に準備されていた、死の処理法を外部に依存することにより、簡略化されていく。  
しかし、従来の拘束からの解放を望んだからこそ、現在の葬儀がある。昔は良かったではなく、  
これからのシステムを見つけ出す必要がある。

### 質疑応答

#### \* 食事の席の呼び名は何ですか？

七日ジマイ、シマイの膳。仕上げ。

葬式：メシヤド（昼食）（はんだい）大皿スタイル。別家でやる。別家の発想はあるようだ。  
しかし、皆親戚関係なので「イミ」の概念がはっきりしていない。

#### \* 農協の介入はどのようなものですか？

農協は、昭和50年代より、介入するようになったが、装具レンタルと、香典返しの農協商品券の納品にとどまっている。



講演中の山田慎也氏

議題「本年度活動テーマ 葬送文化の衣食住についてアンケート調査票のためのディスカッション」

旧き時代より連綿と続く葬送にかかわる衣・食・住の風習・慣習が現在どのように伝わり、残されて、また行われているかを各地方の関係各位に伺い、アンケート形式で調査へのご協力をお願いする。その目的は、現在行われている葬送施行において、それぞれの地域に埋没する古くからの特異な慣例やしきたりを発掘し、そのご報告を頂くことで、それらを然るべき研究者と共に検証して行うと考える。また、調査結果の発表方法につきましても、当学会の会報に集計結果と各地域習慣の相違点を表出して今後の課題とさせていただきます。

“衣”の問題で、亡くなった人に白い着物でないといけないのか。などという疑問はいくらでも出てくる。そういうのを老舗の葬儀社に投げかければ、返ってくるものがあると思う。

昔は着物に“香”を炊き込み臭いを消すこともあった。

どういうところを狙うかははっきりすれば、アンケートを出すところも絞り込める。

アンケートは葬祭業者でなくても、どういうところに興味を持っているかも分かるので、会員全員に出す。調査をするならば、アンケートの結果を誰かが責任者としてまとめ、検証結果の論文形式などが必要であると思う。何しろ調査しっぱなしにはしないようにということ。

設問に対して答えていただいたことは、数値的な発表を今度の会報発行で、とりまとめる。

調査回収の数を重要視するより、いろいろな土地柄を見るようにし、“面”ではなく“点”で調べていく。

具体的には、全葬連、老舗の葬祭業者を対象にして行う。また、会員の中から、紹介してもらう。

民俗学会から、そういう内容は出ている。

県庁所在地では、かわり映えしたものはなく、あまり面白いものはないと思う。かえって郡部の方が面白い。県庁所在地の葬儀社と地方の葬儀社を比べても、面白いと思う。

基本的には郵送でアンケート調査を送り、FAXで返信してもらう。

着払いの封筒を使ってはどうか？学会などのアンケートはそうであるので、

でも20円の手数料がとられてしまう。

アンケート内容の確認

返信者には会社名、記入者名、住所電話番号を、きちんと明記してもらう。

問1(1)3の部分は「そんな習慣はない」という言い方ではなく「そのような習慣はない」にした方が良い。4を付け加え「分からない」という項目も入れる。

(2) 明治、大正、昭和は一つにくくってはどうか。 “戦前・戦後・ごく最近・分からない”に分けてはどうだ。その前に話の筋からして、設問の順番を変えた方が良い。

遺族の喪服と捉えた部分と死者に対しての着る服というように考えたので、入替える必要があるところは、入替えても良い。

問1「喪服の色についてお尋ねします」にする。

問2の返事も“戦前・戦後・ごく最近・分からない”にする。

問4では、きちんとした漢字にした方が良い。例えば“きゃ半”とか。また、選択枠に“六道銭”も追加する。雑誌関係では問5のような質問をするときは以下の通りにし、穴埋めにする。その方が分かりやすいと思う。

問6の「葬儀の参列者にナマモノ(刺身)を提供することがありますか。」の部分で、前の設問と重複しているので、参列者を葬儀の会葬者に変えた方が良いのではないかと。

問7においては“葬儀時”を“葬送の場面で”にする。

問8においては“参列者”ではなく“会葬者”にする。

“黒飯”とは黒豆ご飯や味付けご飯を言う。

“葬送の場面”というところを強調しないといつの時に食べる料理か分からないのではないかと。

“誰が” “いつ” ということの明白さがほしい。

問10においては、御社の地域柄という設問なので、宗教的な呼称ははずした方が良いのではないかと。宗教的というよりもあくまでも、習俗的という考えではどうか。

問12では、「供えますか」よりも「作りますか」にしたら、どうか。

問15を先にもってきて、その次に問13の方が良いのでは。

問15“安置室”という言い方ではなく、“霊安室”に統一した方が良い。

別紙アンケート調査票を記載。

## ■ 7月定例会

平成15年7月19日 土曜日 東京文化会館 大会議室

テーマ『葬儀に赤飯は常識？—葬儀と食物の関わり—』

講師 板橋春夫氏

講師略歴

1954年群馬県生まれ。1976年 國學院大学卒業。現在伊勢崎市職員。

教育委員会文化財保護課 課長補佐。日本民俗学会理事、國學院大学兼任講師 専攻は日本民俗学。

2001年11月 国立歴史民俗博物館第36回歴博フォーラム「民俗の変容 葬儀と墓の行方」参画。

主な業績

「群馬の暮らし歳時記」(上毛新聞社 1988)「葬式と赤飯—民俗文化を読む」(煥乎堂 1995)

(今回は当会会員 理事 山田慎也氏のご紹介を得て年間テーマを踏まえたなかで、お葬式の『食』にまつわ

私の故郷、群馬は養蚕の県。養蚕の仕事をしようと思っていた。蚕室の藁(ワラ)は葬儀で使った草鞋(ワラジ)を使うとあたる(成功する)といわれている。こんなところにも葬送と生活の接点があるとふと思い出しました。

「人の一生」という本の夜の部を担当した。近世(江戸時代)の文書を調べていて、行器をホカイと読むことは知っていたが、葬儀と赤飯のことを再認識した。

昭和40年代に聞いた言葉に「長生きしたら(葬儀で)赤飯だよな」がある。結論から言えば、「葬儀に赤飯を食べることは常識である」

高齢まで生きたということが目出度いことなので赤飯を使うという考え方もある。

文化庁の調査で全国の10%で赤飯を葬儀で使用していたことがわかった。(1366箇所中、151箇所) 明治時代の外国人の記録に、葬儀のあと、コジキ・ホカイ人に食物を与えて供養としたというものがある。

①通夜(当日)

②初七日(四十九日)

③最終年忌(三十三年が多い)

大雑把に言えば①は東日本、②③は西日本といえる。ただし③は岐阜と沖縄にしかサンプルはなく、沖縄はお祝い事と認識しているようだ。

柳田国男の「稲の日本史」に照らすと①と③が柳田説と合致する。

衣類の色について

石川県の白山のふもと、シラミネ村で全員白装束で並んだ葬儀写真をみた。葬式を白で行う例は全国に多数あった。第二次世界大戦で葬儀は黒が一般という常識が作られたようだ。

戦死者が多数出て、合同葬による集会で各地の葬儀が比較される機会となったため。

この時期に白装束が衰退し、黒色が葬儀の色という全国共通の認識が作られた。

そのとき、赤飯が赤いということが良いのだろうかと考えようになったのではないか。赤飯に黒豆を北陸では使う。祝いの飯ではないというサインにしているようだ。

神道系や北陸の真宗の国では赤飯が禁止されてきたようだ。

各地で、赤飯から饅頭へ変わっていった。饅頭は自宅では作れないので、お金をだして購入することになる。明治、大正の貨幣経済化で手作りの赤飯から、買ってくる饅頭へ変わった。また、高価で分けやすいのも良かった。

近親者が赤飯を作り持ち寄りふるまうことは、ケガレの見地からはどう説明するのか。

近親者のケガレや忌みを分散する目的ではなさそうだ。そうではなくて、葬儀に挑む前に力をつけるのが目的という説を支持する。忌み負けないようにする。

ハレの日、ケの日、で言えば葬儀も結婚式もハレの日であり、特別の日という点では同じであり、通過儀礼に供する赤飯を食べて当然であるといえる。

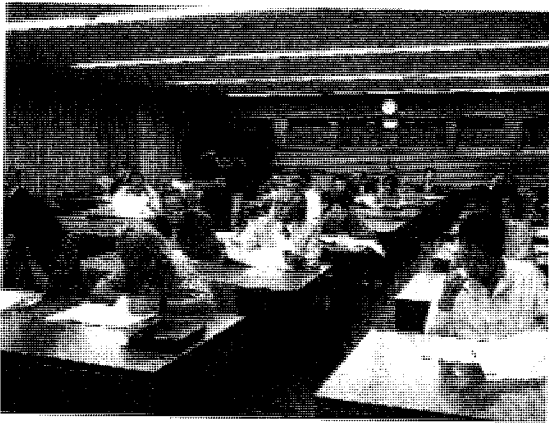
長寿銭について・・百歳以上で亡くなった時、100円か500円を袋に一個入れ配る風習がある。

これをとっておくと、または身に付けておくと縁起が良いと言われる。秩父地方ではまだ80歳代で亡くなった場合でも配っているが、群馬では100歳台でなくては配らない。

昭和30年代では80歳代まで生きるのが大変な長寿であったが、現在は100歳も珍しくなくなってきた。30年間で常識が変わった例である。



講演中の板橋春夫氏



テーマ「モンゴル葬送文化視察報告 モンゴル葬儀の衣食住について」

概要・・8月6日～11日まで当学会有志数名によるモンゴルへの葬送文化視察が行われました。今回はその報告を聞きました。

◆行程

8/6 (水) 成田ーウランバートル 19時着

8/7 (木) ウランバートル 午前：市内観光。全体を一望できるザイサン丘へ。スフバートル広場。国立自然史博物館。モンゴル・ラマ仏教の中心地ガンダン寺。葬式に関しての伝承を住職から聞く。

午後：「BUYAN」国営葬儀社見学。検死所・死体公示所「モルグ」

8/8 (金) ウランバートル 午前：墓地視察。ロシア人墓地／「アルタンウルギー」(モンゴル人の国家貢献者の墓)／「ダラン・ダブハル」(モンゴル人の庶民のお墓)

午後：ダムバ・ダルジャー日本人墓地。ゴビ・ショップ等

夕刻：民族歌舞団のコンサート

8/9 (土) ウランバートル／ナライハ市／テレルジ

午前：モンゴル国立大学民俗学者による講義(モンゴルの葬式など) チョイジンラマ廟見学。

午後：テレルジ。途中ナライハイ市付近のモンゴル人とカザフ人の墓。トルコ時代の人石など。

・・・民族ゲルに宿泊。

8/10 (日) テレルジ／ウランバートル 午前：モンゴル人の住まいを訪問。大自然の乗馬にて散策。

午後：デパートで買物。ザハなどフリーマーケット自由散策。

8/11 (月) ウランバートルー成田 16時着。解散。

◆参加者・・杉山昌司 松江英寿 和田恵輔 高橋美江 二村祐輔 小林寛子以上会員 二村文徳(元臨済宗僧侶・オブザーバー参加)

◆報告

二村氏・・本日はモンゴルで撮ってきた100枚の写真を見ながら説明します。

モンゴルはかつて共産圏であり、旧ソビエトの影響が強い。モンゴル系、トルコ系、多少の中国系など多民族である。遊牧民主体の国、人口密度に低い中でいろいろな文化伝承を見ることが出来た。

宗教的には、ラマ教だが仏教の古い部分での伝承がなされている。習俗的には、かつての日本に通じる

ところが多い。かつて日本にもあった。三廻る儀式とか、四十九日へのこだわりなどが色濃く残っていた。国営の葬儀社を見学。国営テレビが取材に来て、当日のニュースで私たちの学会が紹介されました。

葬儀は黒と赤が基調で、これはラマ教の作法にのっとるものです。葬儀では前世の死因も発表される。国営葬儀社の庭には、棺と墓石が積まれていた。遺体公示所は、がんセンターの一角にある。そこで検死室を見学した。祭壇設営やご遺体の安置は、北東を背にするのが作法です。

ロシア人の墓地も多数あり、特徴は墓ごとに柵があり、ロシア正教の十字が掲げられている。ほとんどの墓石に炎の文様がつけられている。炎は天に昇っていくことが由来らしい。月曜、水曜、金曜しか埋葬してはいけない。

日本人墓地・・日本人が合葬されている、満蒙開拓団など、当地で亡くなった邦人800人分の霊を祀っている。二村文徳氏により読経を奉げた。ここには遺骨はない。すべて日本へ持ち帰られた。これは記念碑のみ。

モンゴルは現在、ラマ教中心の社会になった。ラマ教寺院の地獄絵図がとても印象的。ラマ教の影響を受ける前のモンゴル人の死生観は、日常の延長線上に死があると考えていた。また、死を人に見せない習俗があった。

トルコ系の墓を見学。ジンギスカンの前の時代のトルコ帝国の遺跡がある。石碑には細かい文字がぎっしりと刻まれている。

和田氏・・国営葬儀社の人が宮型の霊柩車が欲しいと言っていた。一番低価格の葬儀は墓石つき150ドル。高価なのは、写真つき600ドル。僧侶は3000人しかいない。これは、ロシアの宗教弾圧による。民主化後は坊さん中心の葬儀となった。現在僧侶養成中。モンゴルの葬儀は4万年前までさかのぼれる。埋葬時代が長いらしい。

高橋さん・・公示所の女医さんは派手だった。墓石に、モンゴルブラックという種類があるが、その語源とモンゴルとの関係を知りたい。多くの写真を撮ってください皆で閲覧。

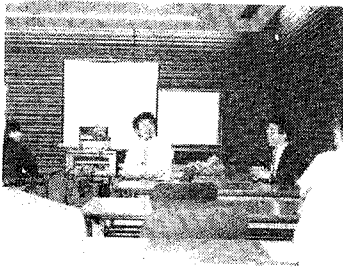
杉山氏・・郊外が貧民窟のようになっている。衛生面も心配。その横に墓地があり、どうやら、盗掘されているようだ。町の中は整備されているのだがアンバランスだ。

二村氏・・・昔の日本との共通点が多い。納棺後、埋葬地まで辻ごとに小麦を撒く習慣がある。橋の欄干に青布を巻く習慣もある。こんな儀式が残っている。埋葬地に着くと男女別に分かれて個人の経歴を述べるのを聞く。男は棺から見て右側、女は左側からである。日本にも男女分かれて参列する例がある。墓の周りを右回りに3回廻る儀式がある。日本もかつてはやっていた。三年間墓参りしない大切なしきたりがある。一つの仮説として今まで墓の場所を明らかにせず、そこに立ち入らないようにした秘密保持の習慣から、ラマ教導入の影響で、死者を大切に、四十九日を意識するように変化していった。そこで、四十九日まではラマ教式でその後三年は昔ながらの考え方のとったしきたりのようだ。また墓に行かず、寺へお参りに行くようになってきているようだ。

◆お知らせ

モンゴル訪問の第二弾は来年2004年 8月17日以降、5泊6日の旅を予定しています。モンゴル国立大学民俗学教授の案内で「ゴビ砂漠の風葬」を会員有志で見学したいと思います。希望者は今から受け付けいたします。

モンゴル報告は寄稿として本紙に掲載されています。



日本の葬送文化にまつわる調査 回収結果報告

「葬送文化の衣・食・住についてのアンケート」

アンケート調査対象

- 1: 会員からの紹介者、また葬祭企業
- 2: 全葬連会員名簿からのピックアップ（東京を除く全国の葬儀社の中から、地方色が在ると思われる葬儀社を検討選択した。）
- 3: 現在、インターネット上にホームページを載せている葬儀社に対して、メールでのアンケート調査依頼を行なった。
- 4: 会員内の葬祭企業や研究者

アンケート発送総数・・・647社（名） 有効回収数合計 132社 回収率 20%

内訳	回収数	回収率
1: 17社（名）・・・郵送	15社（名）	88%
2: 217社・・・郵送	75社	34%
3: 356社・・・メール送信	12社	3%
4: 57社（名）・・・郵送	30社	52%

なお、内容の解析、分析結果はもう少し時間がかかりますので、後日別紙にてお知らせします。  
ご協力を頂きました関係各社に厚く御礼申し上げます。



2003年8月6日から11日まで、私たち日本葬送文化学会の会員有志で、モンゴルの葬送文化に触れる旅を実施した。首都ウランバートルを中心に寺院や国営葬儀社、死体公示所などを訪ね、直接葬儀にかかわりのあるラマ僧や葬儀社社長のほか、モンゴル国立大学民俗学部の教授から、現在行なわれている葬送の概容やこれまでの歴史を聞くことが出来た。また郊外にある各民族の墓地なども見学した。

#### ■モンゴルと言うところ

現代日本でなじみの深いモンゴル観といえば、やはり大相撲でのモンゴル人の活躍ではないだろうか。顔かたちや表情に日本的な親しみがああり、他のアジア地域の人たちと較べても、人種的な違和感を全く感じさせない。

かつて中国大陸のみならず、ユーラシア全体を制覇した歴史をもつこの国の代表的な人物にはチンギス・ハーンやその孫のフビライ・ハーンが有名である。遊牧民として勇猛果敢な歴史背景は、いまでも私たちにロマンを与えるが、現在のこの国における文化や政治経済に関して、私たちの知らないことも多い。モンゴルを語る上で簡単にその概容を記しておく。

先ず体制的には、近代に入って旧ソ連に連動して社会主義化した国体が続いたが、1992年には人民共和国から新憲法を敷設し大統領を中心とする三権分立のもと、民主化され現在に至っている。

国土は日本の約4倍の広さで人口は約234万人。きわめて人口密度は少ない。国土の北西部は山岳地域で南東部の大部分は砂漠である。これを総称して「ゴビ」と呼んでいる。平均の海拔は1580mで首都ウランバートルの海拔は1351mと高地に属している。そのため寒暖の差が激しくまた降水量も少ない。気候的に良いとされるのは7、8月で日中の最高気温平均が21度、最低平均が8度。また驚いたことに夏の時期の日没は2時ごろである。

原語は固有のモンゴル語とモンゴル文字を有し、一般的にはロシア文字をモンゴル語の表記に使用しているので、首都の街並みは建物や記念施設の概観にロシアの雰囲気残り、社会主義時代の面影を残した飾り気のないものになっている。けれども、一般の住居は首都郊外にモンゴル特有のゲルが集落をなして、広がる大草原を背景に独特の光景をみることができる。

さて、そのような環境や歴史的経緯が、現在に至って葬送儀礼に関してどのような影響を与えているのだろうか、それを垣間見ることが、短期間ではあるが今回の旅行の大きな目的でもあった。

#### ■遊牧民とラマ教の葬送

遊牧の民という言葉に、どうも私たちは独自の想像や一方的な感慨を持っているようだ。遊牧民が死に際してどのような対処をしているのか、興味深いところである。けれども最初に考え方を改めさせられたのは、遊牧民という私たちのこれまでの概念である。私たちが思い浮かべるような流浪を日常とする、いわばと土地に固定されていないような生きざまをあてはめることは出来ないのである。遊牧は「回遊」であり、季節による定期的・計画的な移動である。広義にみれば回遊地の範囲が広大であるというだけで、その範囲に「定着」していると、とらえることも出来る。それゆえ葬送においても、その回遊の出発点であるところがふるさとで、そこに中心として固定された埋葬地を有しているということを前提におかなければならない。ただ日常の生活環境を農耕民族と比べたとき、その大きな違いは、食料となる「作物」が土地に固定していない。羊や馬は常に牧草の豊かなところへ移動する。それを追いかけて行き、常にその中にあることで、安定した食糧供給を充たしていくのが遊牧民である。そこでは人間が中心ではなく、家畜の移動に追従する民族が遊牧民とも云えるのである。これに季節の定時移

動がもたらされ、さも人間がコントロールしているかのような印象をもつのもやむをえない。そうして、移動契機はあくまでもそれぞれの家族、一族での都合や判断で、農耕民のように、同一地域に居住する他者を交えた共同体での共有作業が伴うことはない。このことから遊牧民にとっては、農耕民の世界にみられるように、地域共同体が一定の儀礼を踏まえた上で、集団的にある種の社会秩序を成立させているわけではない。このあたりも私たちの感覚とは異なるようだ。

そこで、全体を秩序だてるのは、民族間の伝統的な習俗慣例や包括的な信仰からの共通性で、葬送においては、現在その中心的な役割をラマ教に求めているのである。

ラマ教はチベット仏教ともいわれ、インドにおける仏教やヒンズー教よりも、より土着化した仏教でどちらかと云えば、日本の仏教、各宗各派における教義的な印象よりも、習俗化した仏教儀礼の要素を多く含んでいるような気がする。

もともとモンゴルの民俗信仰は仏教伝来以前から、それぞれの民族におけるシャーマニズムが中心で、特にモンゴル人の中でもトルコ系民族は今でも自然崇拜的な原始宗教を基盤においている傾向が強いと言う。

私たちが会見した首都ウランバートルにあるいわば本山格のラマ教寺院、ガンダン・テグチンレン寺院の僧ツェンド・アユシ師によると・・・ラマ教浸透の歴史的な経緯は・・・

釈尊によって始まった仏教が、8世紀頃インドからチベットに伝わり、中国系の禅宗と大乘仏教の対立をへて、11世紀ごろにはかなり浸透したとのこと。そして16世紀に入り、ソナムギャツォが、モンゴルの首長に呼ばれて説法に行き、ダライ・ラマの称号を受けた。これにより彼はダライ・ラマ三世となり、さらに17世紀、五世のロサンギャツォの時代に、チベット全土の最高指導者としての体制が出来あがった。これに相談役とも言うべき、パンチェン・ラマを西の指導者とし、ダライ・ラマを東の指導者兼最高指導者として仰ぎ、現在までラマ教として、モンゴル人達の生活の一部となっている。けれどもモンゴルでは旧ソ連や中国に挟まれ、20世紀における強力な社会主義化から、ラマ教も幾多の軋轢を受け、寺院の閉鎖や僧への迫害から受難の時代を迎えた。その後、ソ連の崩壊影響を踏まえた民主化の波によって、モンゴルラマ教の中心的寺院であるガンダン寺もやっと1996年に再建され、激減したラマ僧の養成とラマ教の再普及に、今も全力をあげているとのことであった。

ラマ僧の社会的役割の背景には、日常的な宗教行事のみならず、特に葬送における役割が多岐にあり、逝去の一報が第一番に寺院や僧侶にもたらされ、葬送すべての差配がラマ僧に委ねられることからそれがいえる。

ラマ教の葬送では、僧の立会いのもと死亡日時が秒単位まで正確に把握され、医学的な死因が一旦、輪廻思想による生前の罪過を踏まえた教義的な意味での死因に置き換えられる。そしてその罪障消滅を図るための儀礼手立てが行なわれる。遺体を包む布の色を選別したり、故人の十二支（えと・干支）なども考慮されながら、それに応じた祈りの文言を当てはめていくそうである。また何よりも大切なラマ僧の指示は、埋葬地の決定で、埋葬に赴くことが葬送の主たる行いとなる。これまでの埋葬は多くが山の南斜面や荒野における風葬が伝統的で、広義に云えば土葬が原則。まれにラマの高僧が火葬されることもあるらしい。死者の頭の方角を北または北東に向ける作法や墓碑の最頂部に必ず刻まれる炎状のデザインは天へ昇るための象徴など、社会主義時代に途絶えた宗教作法が、今また復活し一連の埋葬儀礼の慣例として踏襲されている。現代モンゴルの首都ウランバートルを中心とした諸処の葬送儀礼については、後で述べる。

埋葬・お墓と言えば、以前話題になったのが日本とモンゴルの国際協力で、人工衛星などからの写真をリモート・センシングしたうえでのチンギス・ハーンの墓探しである。結果的には発見することが出来なかったが、そのことに関して、モンゴル国立大学を表敬訪問した際、民俗学研究所主任 歴史民俗学博士のサロール教授の講義を聞くことが出来た。通訳をしていただいたのはたまたま夏休みで里帰りをされていたバットルガー先生で、先生はモンゴル大学大学院の日本語学部から、現在愛知県立大学の国際文化学科の講師でもある。

サロール教授の話によれば、12、3世紀におけるモンゴル人の靈魂観は、それ以前の伝統的な伝承から、死を故人の日常世界の延長上に置くため、身の回りの品々や宝物など、かなりの副葬品を故人とともに埋葬していた。族長や王などはそれに加えて家来や愛妾なども人身供犠として盛んに行なっていたということである。死後の状態も現状からの延長線上でそれを維持させるかのごとく、この世とのつながりや絆を断ち切らないようにすることに心血を注いで、墓を荒されることを極力さけるため、そして永年にわたって保ちつづけるために、埋葬地は大きな秘密にされた。当然死後の墓参などもなく、世代ごとにその記憶が薄れていくわけである。このことからモンゴル最大の権力者であったチンギス・ハーンのお墓を見つけるのは現代でも難しいと云うことである。ただし幾つかの候補地はあり、今後の調査が期待されるとともに、半面永遠のロマンとして残しておきたい気持ちもあると教授は語った。

講義の中で、埋葬に関しては遡って4万年前くらいからの検証が出来るとのこと。それは集団的な埋葬から個人的な埋葬までいろいろなケースがあり、国土の南北でも墓穴の深さなどに差異があるようだ。南のカラコルム地方は5mくらいで北の方は10mも深く掘ったものが多いとか。また伝統的にお葬式のことを「ホイロワ」と尊称し、やはり遊牧民らしく一般的な副葬品には家畜などを解体して、肉を振る舞いに使い、その骨をいっしょに埋める伝統があった。また同じ国内でも、モンゴル系民族の埋葬は埋葬地表に何も墓上設備を置かないことが原則で、トルコ系民族は石を積み上げたドルメンを形成する。また両者に共通している古代の遺体形状は、しゃがみこんだり腕を組むなど、屈葬状態が多いということだが、先生の解説では、3世紀ごろから始まった伸展葬のように寝ている姿よりも屈葬の方が、より生きていたときの姿に近いという感覚があったのではないかと云うことである。これにたいして、私たちが学んだ日本の屈葬に関する一般的な所見、つまり胎児形態への擬相や緊縛的な遺体の封印観とは、対照的な見解であることが興味深い。また故人の地位によっても墓穴の深さが異なることや、穴の壁面を石組みにするなど、当時でもその専門的な埋葬施工の職人がいたのではないかと考えられるとのこと。なかには匈奴などモンゴルの日常的な住まいであるゲルをそのまま埋め込んだものもあるらしい。そうして盗掘を避けるために、侵入者にたいしていろいろな仕掛がなされ、これまでの学術調査の際にもその仕掛による事故で、死んだり怪我をした研究者もいるとのこと、命がけであることを話された。

いずれにしても包括的かつ強制的な宗教規制を全土に敷設する指導者の政策や体制がなかった時代が長く続いたことで、習俗的な部族慣習の影響が根強く土着化し、埋葬作法に関してもこれまで多くの伝承が内在していたということだ。そうして、17世紀に入ってラマ教が国策的な意図で、ゆるやかに広く浸透し、それまでの習俗とまみえてあらたに土着化していった。その影響は、これまでのような秘密埋葬や人間・動物などの血を流すものの供犠が廃止されるようになり、むしろ古儀的な仏教であるラマ教の特徴で輪廻転生や天界への昇華を踏まえた鳥葬・曝葬形態のほか、特にチベットにおける『死者の書』にあるように、49日忌をまで大事な死者儀礼期間として考えるようになった。また埋葬後3年間は墓には行ってはいけないと云う慣例については、それまでの秘密埋葬習俗からの伝承慣例といえなくもないが、靈魂にたいする隔絶的な作法とも考えられるとのこと。そのために故人にたいする追善志向を寺院が受け持ち、没後、墓へ行くことが出来ない部分を僧に委ね、寺院に出向いて祈りを捧げるなど、

いわゆる先祖供養を背景とした日本の寺檀関係に近い現象も見受けられる。このようなことから現在では対応できる僧侶の数が少なく、今盛んに養成中で、ガンダン寺の境内にはモンゴル仏教大学がその最高教育機関として存在し、また各地にラマ僧養成のための仏教中学校などもあるということだ。

サロール教授の話では最初に会見したガンダン寺のツوند・アユシ師も12歳から僧侶になるためこのような学校で勉強し国立の仏教大学を卒業したエリート僧ということだ。

講義後全員で大学を背景に記念写真をとり、またの来訪を約束してお別れした。私たちの来年の予定では、教授のご案内でゴビ砂漠における風葬を見に行こうという計画がある。

次に現代のモンゴルでの葬送事例を検分するために、私たちはもう一人の実務専門家と会見することができた。

### ■モンゴル国営葬儀社訪問 (BYUAN 葬儀社)

地方においての葬送施行は今でもその地域のラマ教寺院と地域住民の持ち寄りの共同作業で行なわれることが多いが、都市部では葬儀社がこれを支援する。

首都ウランバートルには国営の葬儀社があり、その見学とガウンバートル社長の話を聞いた。そこではモンゴル国営テレビ局TV5から私たちの視察についてインタビューしたいとの申し入れもあり、参加者たちの見学の場面や日本とモンゴルのお葬式について取材された。日本からわざわざ葬儀社を訪問する団体など、きわめて珍しい出来事だったのであろう。これはその日と翌日のニュースで放映され後日ビデオテープが送られてきた。

訪問する前にラマ僧ツوند・アユシ師やサロール教授からレクチャーされたモンゴルの伝統的な葬送・埋葬の歴史を踏まえて、それらの承継がこの国営葬儀社の業務の中にも大きく反映され、実務的な葬儀の流れをレポートすることで、そのあたりを紹介していきたい。

現代モンゴルの葬送の中心的課題は、これまで述べてきたように埋葬(土葬)することである。逝去の報が僧侶に届き、そこで遺族を交え埋葬日時・場所の決定がなされた後に、葬儀社への連絡とそれ以後のかかわりが始まる。慣習的に葬送(埋葬式)は月・水・金の曜日設定でおこなうことになっている。それを僧・遺族らが予定した埋葬日時とすり合わせ、その日にあわせているような準備が始まる。葬儀社には、先ず棺の要請をうけて、それをかわきりに葬儀社業務が開始されていく。

社内ではいろいろな種類の棺が、材木の切り出しから製作されていた。形状は箱型を基調として、蓋は内法のある、いわばインロータイプが一般的で、幅は納めたときの肩幅から足の方に向かって細くなっているものが多い。旧来の西洋棺に似ている。素材は、雑木で表面をあまり成型していない一分くらいの厚板を利用して、底板も枠組みも、かなり乱暴な釘づけで形作られている。それだけを見ていると、とげが刺さりそうな梱包箱だが、まわりを布で覆うように隙間なく貼り付けうまく装飾していく。私たちが見学した工場では、50代近い女性がひとり、作業服姿で一心不乱に釘付けしていた。

モンゴルでの伝統的な葬儀の色は黒と赤ということで、それに準じた色合いのカラフルな布張り棺が多い。出来上がりを見ると内装は緑色の布張りで、これは草原を表し、蓋の内側には青色の布を張り付ける。緑と青は共にモンゴルの大草原を象徴する色で、特に澄み切った青空の色をモンゴリアン・ブルーと云うそうだ。その青布は天の象徴的配色で、葬儀のみならず各種の祭祀に関して、柱や棒の先に巻きつけるなど、日常的にもいろいろな場所で多く見受けられる。

また棺の種類では、高級棺になると成型された板を布張りではなく、チーク風な塗装でデザインを施し、家具調に仕上げている吹き付け工房もその葬儀社内にあった。

単価は24500トゥルグ～175000トゥルグ(日本円約1/10円として換算してみてください。)

葬儀社としては棺の注文が葬儀受注の第一報で、その後依頼されるのが、遺影写真や簡易的な仏具と云うことである。また死装束の準備や遺体の上にかける曼陀羅状の白布なども一般的に販売されている。最初実働は遺族の選んだ棺を一旦、葬家自宅に届けること。それに遺族が独自に装飾を加えたりすることも多いらしい。

僧と遺族の間で日取りが決定すると、その知らせがあり、埋葬日の前日に、これはあくまでも前日が決まりということであるが、墓穴を掘りに行く。これもこの葬儀社の業務の一環として表示してある。

#### ■死体公示所から埋葬へ

ウランバートルで特徴的なのが、遺体に関しては、自宅での儀礼が済むと葬送の当日まで、「死体公示所」に保管されると云うことである。施設は市内のがんセンター病院の一角にあり、表示的には実験棟となっている。その搬送に関しても葬儀社が受け持つらしい。また遺族が直接運ぶこともあると云う。

死体公示所には担当の研究医が配置され、遺体の衛生的な面からのチェックや時には剖検からサンプル採取までおこなっていたらしい。そのなごりを漂わせているが、いまでは医師の配置はあるものの、病理学的な設備は何も見当たらなかった。おそらく社会主義時代の制度的ななごりをそのまま引継ぎ、死体の管理までも公的に行なっていた時代のなごりを漂わせる。

棟の中にはいわゆる納棺室があり、正面壁には赤と黒の幕が垂れ下がっている。部屋の真ん中に腰ほどの高さで赤い布で覆われた台があり、そこに棺を置くとのこと。そこで自宅から運んできた棺を乗せ、保管室から出された遺体をラマ僧の立会いのもと、納棺する。遺体の保管室はすぐとなりの別室にあり、番人らしい老女がひとり、清掃や開け閉めの管理として座っていた。中を見せてくれという私たちに怪訝な顔をしながらも扉を開けてくれた。

旋錠されたみずぼらしい木の扉を開けてもらうと、裸電球一つの薄くらいきたない部屋で、冷却パイプらしきものが、むき出しになっていて、部屋全体の温度はひんやりしていた。薄汚れた壁だけの殺風景なその部屋に、いつもは数体保管されているようだ。私たちが見たときには、錆びたストレッチャーの上に無造作に布で包まれた遺体が一体、保管されていた。

さて、葬送はその死体公示所での納棺を皮切りに、集まった遺族や関係者ともども埋葬地への葬列となる。僧侶を乗せた車を先導として遺体を載せたトラックの後を、それぞれ遺族の車列が続き、所定の埋葬地へ向かう。その道中、Y字路や交差点など、いわゆる辻ついで停車して、僧侶が読経しながら小麦など穀物を撒くなどの儀礼をしつつ、橋に差し掛かる際には、欄干に青布を巻きつけるなど、独自の葬送儀礼を果しながら埋葬地に向かう。花籠での撒き銭や六道の辻儀礼のように、どこか日本の葬列との重なりをイメージさせる思いである。

埋葬地へ到着すると、僧侶の祈りを皮切りに、遺族（長男）が故人の経歴などを述べると共に褒め称え、男は棺の右側から、女は左側から、共に足元の方からお祈りを捧げる。その後、布やロープを使って墓穴に棺を納め土をかける。そうして、その回りを振り返ることなく「右回りに3回周る」と云うことである。もちろんラマ教は仏教であるが、右回りの三匝儀礼がこのモンゴルの地で一般的になされていることに驚いた。この宗教儀礼は、最近の日本ではほとんど見られなくなった。これがこの地にあったのである。

#### ■モンゴルのお墓あれこれ

これまで述べてきたように、宗教的にはラマ教、葬法的には土葬を基調としたモンゴル人のお墓は、

現代どようになってきているのだろう。この短い旅行の間に4ヶ所ほど見学することが出来た。社会主義時代に密接な関係があった旧ソ連とのかかかわりの中で、首都近郊にロシア人墓地がある。さほど広くはない敷地に複十字の墓標を伴った埋葬がなされ、ランダムではあるが区画ごとに柵で周りが囲ってある。なかには遺影を楕円の陶板に焼き付けたものもあるが、お墓参りの習慣もなく、多くは朽ち果てている。また生前の趣味・職業なのか？車のラジエターを墓標にくくりつけ、それが風車のようになっているものもあった。墓地の中心にはモニュメントらしき構造物が突っ立っているが、ベンチが置いてあるわけでもなく、また何らかの祭祀対象というわけでもない。目印にはなと思った。

そこから、郊外の丘に向かうと、モンゴル建国に寄与した人たちの特別な墓地があった。アルタン・ウルギー墓地と呼ばれ、その意味するところは「永遠のゆりかご、ふるさと」だそうだ。広い丘陵の草原一面に一定の方向、つまり北面にあわせて、それぞれ憲章を施した墓標が無数に並ぶ。そうして多くの墓標の最頂部（墓標形状にもよるので、それぞれの形の中で一番「天」に近い位置）には立ち上る「炎マーク」が刻印されている。中でも目につくのが軍人であろうか、ジェット機の上昇する意匠がリアルに再現されたデザインのものも数ヶ所あった。

かなり広大な、斜面一面がこれら英雄や偉人として活躍した方々の墓で埋め尽くされ、彼方下方にはウランバートルの街も見下ろすことができる。けれども対面や周りの斜面にはゲルの集落が転々と張り付き、生者死者が合間見えて一つの空間を共有しているようにも思えた。

この墓地を後にして、今度は一般のモンゴル人墓地、ツァガンダワ墓地へ向かったが、ここも広大な草原の斜面が墓で埋め尽くされている。ただし、汲々とした感じではなく、果てしなく一面に広がっている風景である。一つの斜面全体がすべて墓で覆い尽くされ、住居もすぐ近くまで押し寄せていることから、はやくも1924年以来、満杯状態でいまでは使用が禁止されている。

英雄・偉人の墓地とは異なり墓標の規模も小さく、また80年近い年月の経過から、風化されたものも目立つ。けれども抜けるような青空と緑の斜面のなかで、吹きぬける風さわやかさも、しみじみと落ち着いた、たたずまいを感じた。

では現在の一般のモンゴル人たちはと云うと、そこからかなりはなれた場所に墓地区画を指定されて、埋葬している。形状立地は同じような雰囲気であるが、墓標が自然石を加工したものから、コンクリートや土レンガのようなものが多く使用され、きわめて庶民的というか安価なつくりのものが多く目についた。やはり墓参りの風習もさほどにないようで、墓地を作る際の素材の不良さもあいまって、墓標自体や土葬後の土囲いや墓地のふたなど、壊れているものも多い。なかにはまるで盗掘にでもあったような壊れ方をした墓所もあり、頭蓋骨や一部の骨が散乱しているような光景も目にして、痛々しく感じた。そこでは埋葬場所の「風情」といった趣はなく、現代の埋葬の合理性や簡略化された一面をかなり感じた。

全人口約234万人の内、その半数以上が首都ウランバートル周辺に集中しているので、いわゆる墓地不足が著しく、いくら大草原を有しているといっても、都市問題として大きな悩みを抱えていることを国営葬儀社の社長から聞いていたので、あらためて現実の問題としてとらえることが出来た。その際、社長から日本の火葬状況や施設、火葬炉についても大きな興味を持って聞かれ、いずれ近い将来、土葬から火葬へと移り変わることは間違いのないことだとも聞かされた。そのため、火葬に関する資料提供を要請され、施設や火葬炉の写真、そのデータなどを後日送ることになった。あわせて、この紙面を借りて、もう一つ国営葬儀社から要請されたことをお伝えしたい。それは遺体の搬送において、霊柩車を使用したいと云う事である。現在、病院や遺体公示所への搬送、また埋葬地へ向かう際など、棺をトラックで運んだりすることが多く、非常に心苦しく思っているとのこと。そこで、もし日本の葬儀社で、

可動可能な使用しない霊柩車があれば、ぜひ寄贈してもらいたいということである。その際、宮型車がラム教葬儀にふさわしく、いわゆる「ほとけ」を運ぶにふさわしい車だと思われ、述べられた。

日本では宮型霊柩車からいわゆるライトバン形式の洋型車がもてはやされている現状から、遊休状態の宮型車が、多くの葬儀社で眠っているのではないかとと思われるので、ご協力いただけるような葬儀社があれば、なんとかしてこれをモンゴルに送りたいと考えている。資金的な問題は、日本からの船賃など、相応に負担することも考えているので、(社長談) なんとか協力していただけないかということであった。これについては、現在全霊柩等霊柩車組合の力、また日本モンゴル協会等関連団体の力を借りたいと思っている。

私たちはその後、ウランバートルの北およそ 70 km にある景勝地テレルジへ向かい、大草原の中を走った。草原というのは一面全くの平面に見えるが、実はそうではなく、かなりでこぼこしている。目標が真正面に見えるからといって、そのまま突っ走るわけにはいかない。ところどころ、雨季の際にできた深い溝や小川の後が現れ、車にとってはそのくぼみが自然に消えうせる辺りまで、はるかに大きく迂回を余儀なくされる。徒歩や馬ではなんと云う事もないのだが、文明の利器はこんなところでその限界を感じさせる。モンゴルの歴史上、馬は欠かせない交通機関である由縁がしみじみと実感できた。

そのような蛇行を繰り返しながら進むと、ガイド曰く、国宝級の古代トルコ帝国の遺跡があるというので立ち寄り。大草原の中に忽然とあらわれた遺跡は古代文字の刻まれた柱が一本。周りに朽果てた柵があるものの、他には何も無い。けれどもある方向に向かってその柱からは草原の中に露岩が転々と連なっていた。説明によるとこれも墓であり、延々と地平線近くまで連なる露岩は、標柱の王の家来や使用人、家畜等々の副葬の跡ということであった。あまり発掘調査が進んでいないようで詳しくは判らないと云う事。

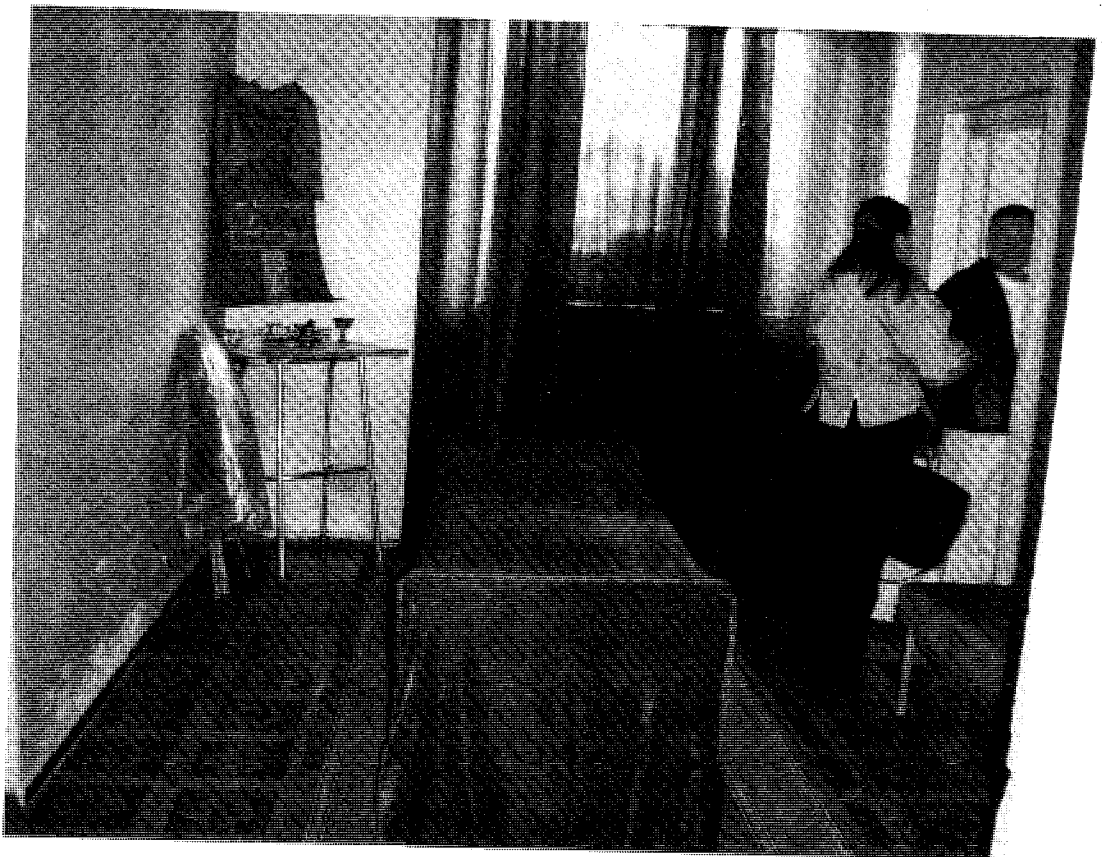
そのような遺跡に立ち寄りながら、目的地のテレルジへ夕刻到着。そこで私たちは遊牧民の家、「ゲル」に宿泊した。モンゴルきっての景勝地と云う案内でどれほど素晴らしいところかと想像を膨らめたが、そこは大草原ではなく、岩山を背景とした森林地帯で、川の流に沿ったキャンプ場といったところだ。日本人には見慣れた景色で、それほど感動はない。けれども大草原に住むモンゴルの人々にとっては、立ち木や川に囲まれたところは、そう云う場所が少ないこともあり、たいへん人気のあるところだそう。ここで「ゲル」に宿泊するのだが、高度も約 1800m 近くあるので、朝夕の気温は低い。「ゲル」の真ん中には薪をくべるダルマストーブが設置され、夜間は 3 時間ごとに薪を足しに来てくれると云う。8 月にストーブをつけて寝る面白さと「ゲル」に集まった同行者達と酌み交わした現地のウオッカなどの酔いも相まって、すぐに寝入ったが、確かに火力が衰えると寒くて目がさめる。

このような一夜を明かし、翌日はモンゴル遊牧民の家庭訪問、そこから馬に乗り 2 時間ほどの散歩。些少なりともモンゴルへ来たことを味わったひと時であった。

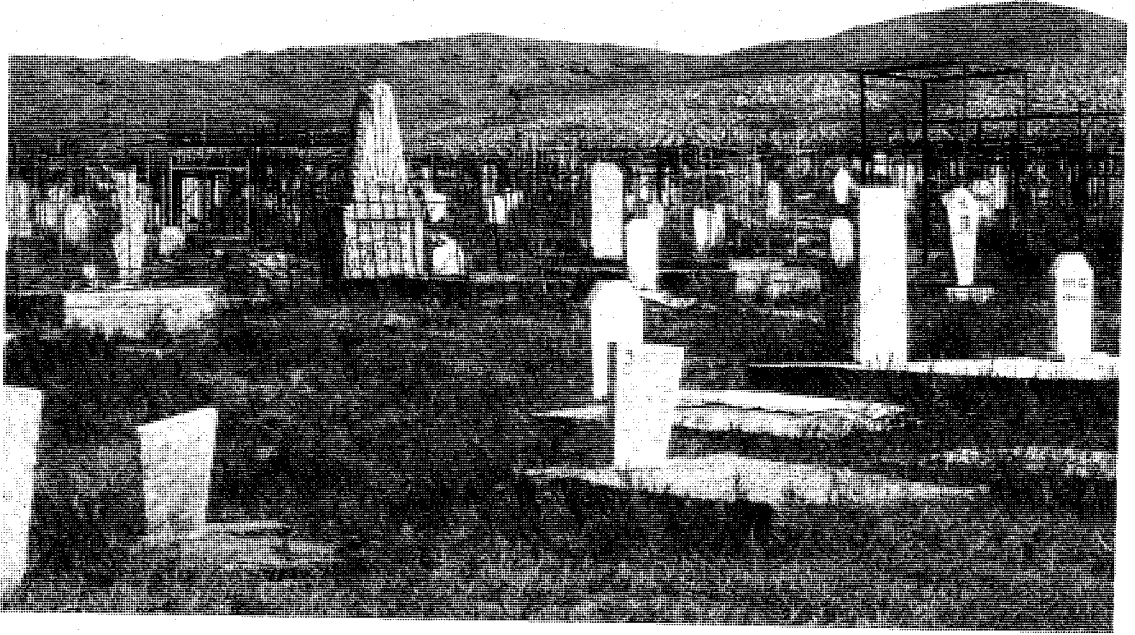
午後、ウランバートルへ戻りこれまで泊まっていたホテルで一泊の後、8 月 11 日朝の便で帰国した。午後 3 時すぎ成田着。解散。到着して一番最初に感じたのは、いがらっぽい日本の空気。

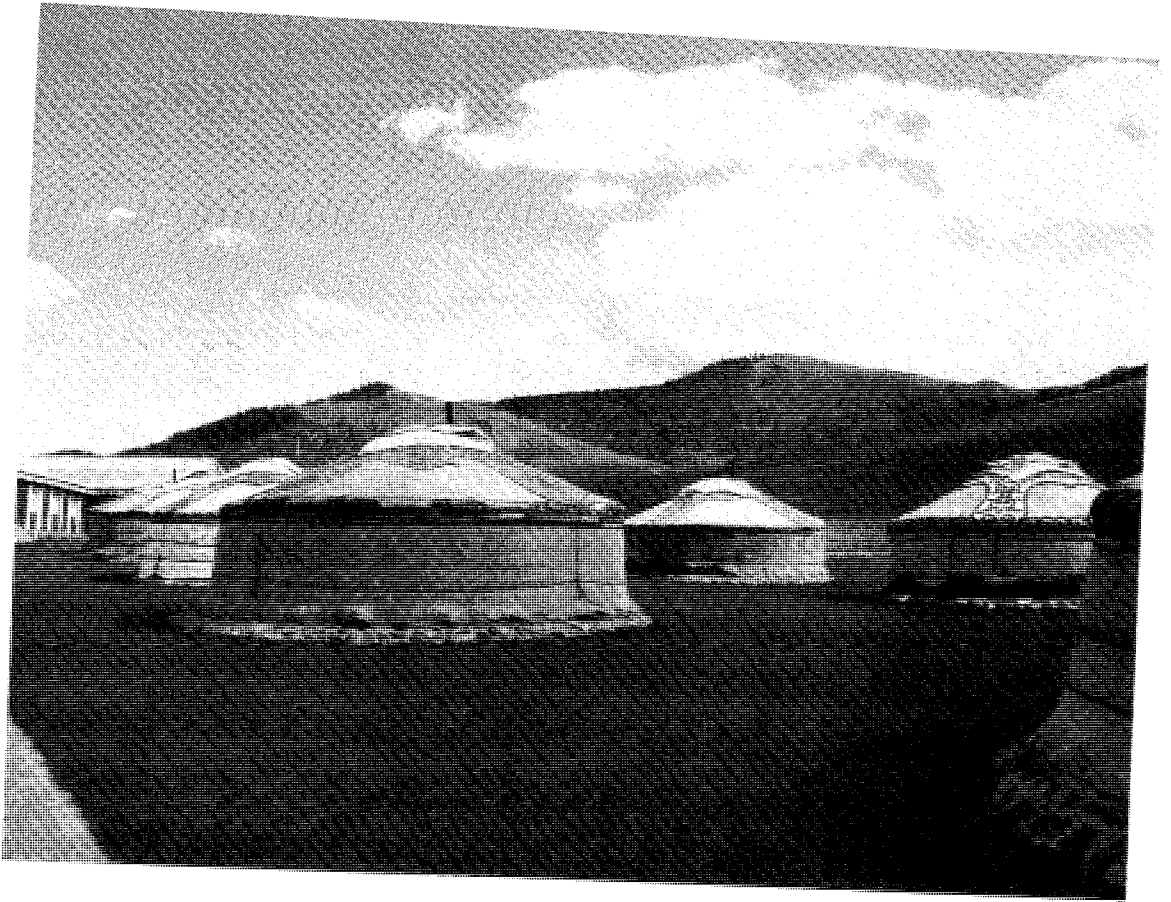
なお、今回のモンゴル視察では、短い期間に多くの人たちと心暖まる交流が出来たこと。また葬送の文化において、非常に「懐かしさ」を感じたことで、来年もまたぜひ訪れることを約束してきた。それはゴビ砂漠での風葬を見ることである。現在参加希望者を募っている。(2004 8/17 以降実施予定)

日本葬祭アカデミー教務研究室／有限会社 セピア  
日本葬送文化学会 常任理事 二村祐輔 (ふたむらゆうすけ)









## 2003年 平成15年度役員 一覧

- 会 長 天野 勲
- 代表理事 浅香勝輔
- 常任理事 阿島武志・・・・・WEB委員  
同 勝山宏則・・・・・WEB委員・会報編集委員  
同 杉浦昌則・・・・・会報編集委員  
同 大杉実生・・・・・会計委員  
同 二村祐輔・・・・・事務局長
- 新任常任理事 荒木由光・・・・・監査  
三橋初枝・・・・・会報編集委員  
野崎二三子・・・・・監査  
中島 章・・・・・会計委員  
原 敏之・・・・・WEB委員
- 東日本理事 菅原裕典（宮城県）・・・・・東日本担当
- 西日本理事 下村 侃（岡山県）・・・・・西日本担当
- 理 事 柴田千頭男・・・・ルーター学院大学名誉教授  
田中久文・・・・日本大学 教授  
谷 荘吉・・・・病院院長
- 新理事 山田慎也・・・・国立歴史民俗博物館  
上村敏文・・・・ルーター学院大学
- 顧 問 八木澤壮一・・・・共立女子大学・・・・永久会員  
山床節子・・・・ジャーナリスト
- 退任理事 杉山昌司・・・・監査  
稲村吉彦・・・・監査  
藤井 高・・・・会計  
岩崎孝一・・・・会報編集委員

日本葬送文化学会誌 (第六号)

発行

日本葬送文化学会

会長

天野 勲

事務局

〒102-0081

東京都千代田区三番町七一

朝日三番町プラザ五〇三

電話 〇三―五二―五―五七六七

事務局長 二村祐輔

発行日

平成一五年 十月二十日

編集

杉浦昌則 勝山宏則 三橋初枝

原 敏之 浅井秀明 吉澤武虎

印刷

スタジオ創造